

一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 及び  
一般国道319号善通寺バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊

## 室塚遺跡 生野原遺跡

2008. 2

香川県教育委員会  
国土交通省四国地方整備局

室塚遺跡



(1) 室塚遺跡遠景（東より）



(2) 室塚遺跡B地区遠景（北より）

生野原遺跡



(3) 生野原遺跡 I - 2 区 SX105 遺物出土状況(南西から)



(4) 生野原遺跡 I - 2 区 SX105 遺物出土状況(東から)

# 序 文

室塚遺跡は香川県丸亀市綾歌町室塚に所在する遺跡です。一般国道32号満濃バイパス建設に伴い、香川県教育委員会からの委託を受けた財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成12年度に発掘調査を行いました。その結果、丘陵上では弥生時代後期の木棺墓・土壙墓群で構成される墓域と古墳時代終末期の方墳1基を、谷部では弥生時代中期から後期および中世の遺物を含んだ川跡を検出しました。とりわけ墓域では木棺の痕跡が確認できるものが含まれているうえに、主軸の方位などから複数のグループに分けることができ、同時代の墓地構成原理を考えるうえで貴重な資料になりました。

生野原遺跡は香川県善通寺市生野町原に所在する遺跡です。一般国道319号善通寺バイパス建設に伴い、国土交通省四国地方整備局からの委託を受け、香川県埋蔵文化財センターが平成16年度に発掘調査を行いました。その結果、埋没した旧河道の上で土坑や溝状遺構などの遺構と遺物を検出し、この地域の開発史に新たな資料を提示することができました。

両遺跡の整理作業は、財団法人の業務を引き継いだ香川県埋蔵文化財センターが平成19年4月から2か月の期間で実施し、ここに「一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 及び一般国道319号善通寺バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 室塚遺跡 生野原遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、国土交通省四国地方整備局をはじめとする関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年2月

香川県埋蔵文化財センター

所長 渡部 明夫

# 例　　言

1. 本報告書は、一般国道32号満濃バイパス建設事業及び国道319号善通寺バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県丸亀市綾歌町室塚に所在する室塚遺跡（むろづかいせき）と香川県善通寺市生野町に所在する生野原遺跡（いかのはらいせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、室塚遺跡は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが、生野原遺跡は香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は、下記の期間で実施している。

室塚遺跡： 予備調査 期間：平成11年6月1日～6月30日

　　担当：主任技師 野崎隆亨、技師 松本和彦、調査技術員 豊岡多恵

本調査 期間：平成12年11月1日～平成13年3月31日

　　担当：文化財専門員 山下平重、技師 松岡 晶、調査技術員 中村文枝

生野原遺跡：本調査 期間：平成16年10月1日～平成17年1月31日

　　担当：主任技師 長井博志、技師 新谷政徳、嘱託 宮武直人（職名は当時）

4. 調査に当たって、下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

室塚遺跡：国土交通省四国地方整備局、綾歌町建設課（当時）、綾歌町教育委員会（当時）、地元自治会、地元水利組合

生野原遺跡：国土交通省四国地方整備局、善通寺市教育委員会、地元自治会、地元水利組合

5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は室塚遺跡を宮崎哲治が、生野原遺跡を長井博志が担当した。

6. 報告書で用いる方位の北は、室塚遺跡と生野原遺跡のどちらも旧国土座標系第IV系の北である。また、標高はどちらも東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。なお、遺構は下記の略号により表示している。

SD 溝状遺構 SK 土坑 SR 自然河川跡 ST 墓 SX 不明遺構

7. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。

8. 石器実測図中、平面図中の濃いトーン部分および輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れを表す。なお、現在の折損は黒く塗りつぶしている。

9. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1993年版』による。

# 目 次

## 室塚遺跡

第1章 調査の経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査・整理の経過	4
第3節 調査・整理の体制	5
第2章 立地と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	11
第1節 A調査区の遺構・遺物	11
第2節 B調査区の遺構・遺物	31
第3節 包含層他の遺物	36
第4章 まとめ	37
第1節 遺構の変遷	37
第2節 弥生時代後期の墓群について	37

## 生野原遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過	47
第1節 調査に至る経緯	47
第2節 調査の経過	49
第3節 整理作業の経過	49
第4節 発掘調査及び整理作業の体制	49
第2章 立地と環境	50
第1節 地理的環境	50
第2節 歴史的環境	50
第3章 調査の成果	53
第1節 遺跡の立地と地形（第4図）	53
第2節 土層序（第5～8図）	55
第3節 I区の調査成果	59
第4節 II・III区の調査成果	69
第4章 まとめ	75
遺構の変遷	75

# 挿図目次

## 室塚遺跡

第1図 遺跡位置図(1/80, 0000).....	3
第2図 調査区位置図(1/2, 000).....	4
第3図 遺跡位置及び周辺の遺跡(1/25, 000).....	7
第4図 A調査区遺構配置図(1/250).....	8
第5図 A調査区土層断面図(1/120).....	9~10
第6図 ST01・02平・断面図(1/40).....	12
第7図 ST03~05平・断面図(1/40).....	13
第8図 ST02~04出土遺物実測図(1/2・1/4).....	14
第9図 ST06~09平・断面図(1/40).....	15
第10図 ST10・11平・断面図(1/40).....	17
第11図 ST12・13平・断面図(1/40).....	18
第12図 SK01平・断面図(1/40)、出土遺物実測図(1/2).....	18
第13図 SD01~03断面図(1/40)、SD02出土遺物実測図(1/2).....	19
第14図 室塚1号墳墳丘平・断面図(1/80).....	21~22
第15図 室塚1号墳完掘状況平面図(1/80).....	23~24
第16図 室塚1号墳敷石検出状況平面図(1/40).....	25
第17図 室塚1号墳上面敷石検出状況平面図(1/40).....	25
第18図 室塚1号墳下面敷石検出状況平面図(1/40).....	26
第19図 室塚1号墳排水溝検出状況平面図(1/40).....	27
第20図 室塚1号墳墓壙完掘状況平面図(1/40).....	28
第21図 室塚1号墳遺物出土位置平・断面図(1/40).....	29
第22図 室塚1号墳出土遺物実測図(1/2・1/4).....	30
第23図 B調査区遺構配置図(1/300).....	31
第24図 B調査区土層断面図(1/80).....	32
第25図 SR01上層出土遺物実測図(1/2・1/4).....	33
第26図 SR01上層出土遺物実測図(1/2・1/4).....	34
第27図 包含層出土遺物実測図(1/2・1/4).....	35
第28図 A調査区墓群主軸方向模式図(1/500).....	38
第29図 香川県内の土壤墓群平面図(1/2, 000・1/1, 000).....	38

## 生野原遺跡

第1図 遺跡位置図 .....	47
第2図 調査区位置図(1/2, 500) .....	48
第3図 周辺遺跡分布図(1/25, 000) .....	51
第4図 周辺微地形図(1/10, 000) .....	53
第5図 I-1・2区北壁 .....	55
第6図 I-4・7・8トレンチ .....	56
第7図 I・II区西壁 .....	57
第8図 I・III区南壁、III区トレンチ .....	58
第9図 全体遺構配置図(1/400) .....	60
第10図 I区遺構配置位置図(1/250) .....	61
第11図 SD102・104断面図(1/40)、SD102出土遺物(1/4) .....	62
第12図 SK106・108・109・110断面図(1/40) .....	62
第13図 I区SR102断面図(1/40)、出土遺物実測図(1/4) .....	63
第14図 SX105平・断面図及び遺物出土状況図(1/60・1/30) .....	65
第15図 SX105出土遺物実測図①(1/4) .....	66
第16図 I区SX105出土遺物実測図②(1/3) .....	67
第17図 SB101平・断面図(1/40) .....	68
第18図 SD103断面図(1/40) .....	68
第19図 I区包含層出土遺物実測図(1/40) .....	69
第20図 II・III区遺構配置位置図(1/250) .....	70
第21図 SD201断面図(1/40)、出土遺物実測図(1/4) .....	71
第22図 SK201・203・205・206断面図(1/40)、SK202・SK204平・断面図、SK206出土遺物実測図(1/4) .....	71

第23図	SX302断面図 (1/40) .....	72
第24図	SX303・SK101断面図 (1/60) 、 SX303出土遺物実測図 (1/4) .....	73
第25図	SK301平・断面図 (1/40) .....	73
第26図	III区包含層出土遺物実測図 (1/4) .....	74
第27図	遺構変遷図 (1/800) .....	77

## 表 目 次

### 室塚遺跡

第1表	室塚遺跡周辺の遺跡 .....	7
-----	-----------------	---

## 写真図版目次

### 巻頭図版

- (1) 室塚遺跡遠景 (東より)
- (2) 室塚遺跡B地区遠景 (北より)
- (3) 生野原遺跡I-2区 SX105 遺物出土状況 (南西から)
- (4) 生野原遺跡I-2区 SX105 遺物出土状況 (東から)

### 図版1 室塚遺跡

- (1) 調査前の風景 (東より)
- (2) A地区全景 (北より)

### 図版2 室塚遺跡

- (3) A地区全景 (北から)
- (4) A地区全景 (東から)

### 図版3 室塚遺跡

- (5) ST01完掘状況 (東から)
- (6) ST01完掘状況 (北から)
- (7) ST01断面 (東から)
- (8) ST01小口板痕跡 (北から)
- (9) ST02完掘状況 (東から)

### 図版4 室塚遺跡

- (10) ST02検出状況 (北から)
- (11) ST02断面 (北から)
- (12) ST02断面 (東から)
- (13) ST03完掘状況 (西から)
- (14) ST03断面 (西から)
- (15) ST04断面 (南から)
- (16) ST04断面 (南から)
- (17) ST05完掘状況 (南から)

### 図版5 室塚遺跡

- (18) ST06完掘状況 (東から)
- (19) ST06断面 (西から)
- (20) ST07完掘状況 (東から)
- (21) ST07断面 (北から)
- (22) ST07断面 (東から)
- (23) ST08完掘状況 (北から)
- (24) ST08断面 (東から)
- (25) ST09完掘状況 (東から)

### 図版6 室塚遺跡

- (26) ST09断面 (北から)
- (27) ST10断面 (南から)
- (28) ST10断面 (北から)

### (29) ST11完掘 (東から)

- (30) ST11断面 (東から)
- (31) ST12完掘状況 (北から)
- (32) ST12断面 (北から)
- (33) SD03断面 (北から)

### 図版7 室塚遺跡

- (34) A調査全景 (南から)
- (35) 1号墳上面敷石検出状況 (南から)
- (36) 1号墳上面敷石検出状況 (北から)
- (37) 1号墳上面敷石検出状況 (奥壁側) (西から)
- (38) 1号墳上面敷石検出状況 (玄門側) (西から)

### 図版8 室塚遺跡

- (39) 1号墳下面敷石検出状況 (北西から)
- (40) 1号墳下面敷石検出状況 (北西から)

### 図版9 室塚遺跡

- (41) 1号墳下面敷石検出状況 (奥壁側) (北西から)
- (42) 1号墳下面敷石検出状況 (玄門側) (北西から)
- (43) 1号墳石室埋土断面 (西から)
- (44) 1号墳石室埋土断面 (西から)
- (45) 1号墳墳丘断面 (南から)
- (46) 1号墳墳丘断面 (北から)
- (47) 1号墳石室埋土断面 (東から)
- (48) 1号墳石室埋土断面 (東から)

### 図版10 室塚遺跡

- (49) A区1号墳玄門付近断面 (北から)
- (50) A区1号墳玄門付近断面 (南から)
- (51) A区1号墳玄門付近断面 (南東から)
- (52) B地区III区北壁断面 (東から)
- (53) B地区II③区北西壁断面 (東から)
- (54) SR01全景 (北から)
- (55) SR01全景 (西から)
- (56) B地区II①区北壁断面 (東から)

### 図版11 室塚遺跡

- (57) B地区遠景

### 図版12 室塚遺跡

- 出土遺物(1)
- 図版13 室塚遺跡
- 出土遺物(2)
- 図版14 室塚遺跡
- 出土遺物(3)

- 図版15 室塚遺跡  
出土遺物(4)
- 図版16 室塚遺跡  
出土遺物(5)
- 図版17 室塚遺跡  
出土遺物(6)
- 図版18 室塚遺跡  
出土遺物(7)
- 図版19 室塚遺跡  
出土遺物(8)
- 図版1 生野原遺跡  
(1) I 区 全景(北から)  
(2) I 区付近 遠景(北から)
- 図版2 生野原遺跡  
(3) I - 1 区 調査区西壁断面(東から)  
(4) I - 2 区 茶褐色シルト混粘質土層内 須恵器出土  
状況(西から)
- 図版3 生野原遺跡  
(5) I - 2 区 調査区南壁断面(SD102付近)(北から)  
(6) I - 2 区 SX105 完掘状況(南西から)
- 図版4 生野原遺跡  
(7) I - 2 区 SX105 焼土面検出状況(南西から)  
(8) I - 2 区 SX105 遺物出土状況(南西から)
- 図版5 生野原遺跡  
(9) I - 2 区 SX105 調査風景(南西から)  
(10) I - 2 区 SX105 遺物出土状況(東から)
- 図版6 生野原遺跡  
(11) I - 2 区 SX105 遺物出土状況(南から)  
(12) I - 2 区 SX105 遺物出土状況(東から)
- 図版7 生野原遺跡  
(13) I - 2 区 SX105 遺物出土状況(西から)  
(14) I - 2 区 調査区北壁断面(SR102付近)(南から)
- 図版8 生野原遺跡  
(15) I - 2 区 調査区北壁断面(SR102付近の下層確  
認)(南から)
- (16) I - 2 区 SR102 土器出土状況(東から)
- 図版9 生野原遺跡  
(17) I - 2 区 SR102 土器出土状況(西から)  
(18) I - 2 区 SR102 土器出土状況(西から)
- 図版10 生野原遺跡  
(19) I - 2 区 灰色砂礫層内 土器出土状況(南西から)  
(20) II 区、III - 1 区 全景(北から)
- 図版11 生野原遺跡  
(21) II 区、III - 1 区 全景(北から)  
(22) I - 2 区 調査区東壁断面(SX303付近)(西から)
- 図版12 生野原遺跡  
(23) II 区 SK204 断面(東から)  
(24) III - 1 区 SK301 完掘状況(東から)
- 図版13 生野原遺跡  
(25) III - 1 区 SK301 断面(西から)  
(26) III - 1 区 調査風景(南から)
- 図版14 生野原遺跡  
(27) III - 1 区 SX303 完掘状況(東から)  
(28) III - 1 区 下層確認トレンチ断面(西から)
- 図版15 生野原遺跡  
(29) III - 2、3 区 調査前状況(北から)  
(30) III - 3 区 トレンチ断面(北から)
- 図版16 生野原遺跡  
(31) III - 3 区 トレンチ断面(北から)  
(32) 生野原遺跡現況(北から)
- 図版17 生野原遺跡  
I 区SX105出土遺物 (1)
- 図版18 生野原遺跡  
I 区SX105出土遺物 (2)、I 区・III区包含層出土遺物

一般国道32号満濃バイパス建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊

## 室塚遺跡



## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

一般国道32号は高松市と高知市県都同士を結ぶ重要な路線である。県内では高松市内を基点に綾歌郡綾川町、丸亀市、仲多度郡まんのう町、三豊市を通り抜け、阿讚山脈猪ノ鼻峠（猪ノ鼻トンネル）を経て徳島県三好市に続いている。対向2車線の国道は、交通量が増加の一途をたどる現代社会においては狭小であり、交通事故の多発、交通渋滞によるCO<sub>2</sub>排出量増加などの問題を引き起こす要因となってきたため、それに対処すべく現道の拡幅および歩道の敷設、バイパス路線の新設などが行われてきている。高松市西山崎町から仲多度郡まんのう町賀田に至る延長21.7kmの一般国道32号バイパスもそのひとつであり、綾南・綾歌・満濃工区の3つはそれぞれ綾南・綾歌・満濃バイパスと呼ばれている。この道路は中讃地域と高松市間の交通を円滑化して地域間の連携強化を図るとともに、幅員の狭い現国道32号の沿道環境を改善することを目的としている。1972（昭和47）年度より事業着手し、現在までに約20kmが完成・供用されている。

この事業計画を受けて、香川県教育委員会事務局文化行政課（当時、現香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課）は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間において平成11年4月1日付けで締結した『平成11年度 埋蔵文化財調査契約』に基づき、平成11年6月1日～30日にかけて一般国道32号満濃バイパスの予備調査を実施した。その結果、まんのう町と丸亀市綾歌町にまたがる西山から派生する丘陵上（予備調査D地区、『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』参照）とその裾部（同E地区）において弥生時代後期の遺構・遺物を確認したことから、「室塚遺跡」と命名して遺跡台帳に登録を行った。

その後、文化行政課と国土交通省四国地方整備局香川工事事務所との間でその保護措置について協議を行い、丘陵上と裾部を合わせた2,056m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することで合意した。



第1図 遺跡位置図(1/800,000)

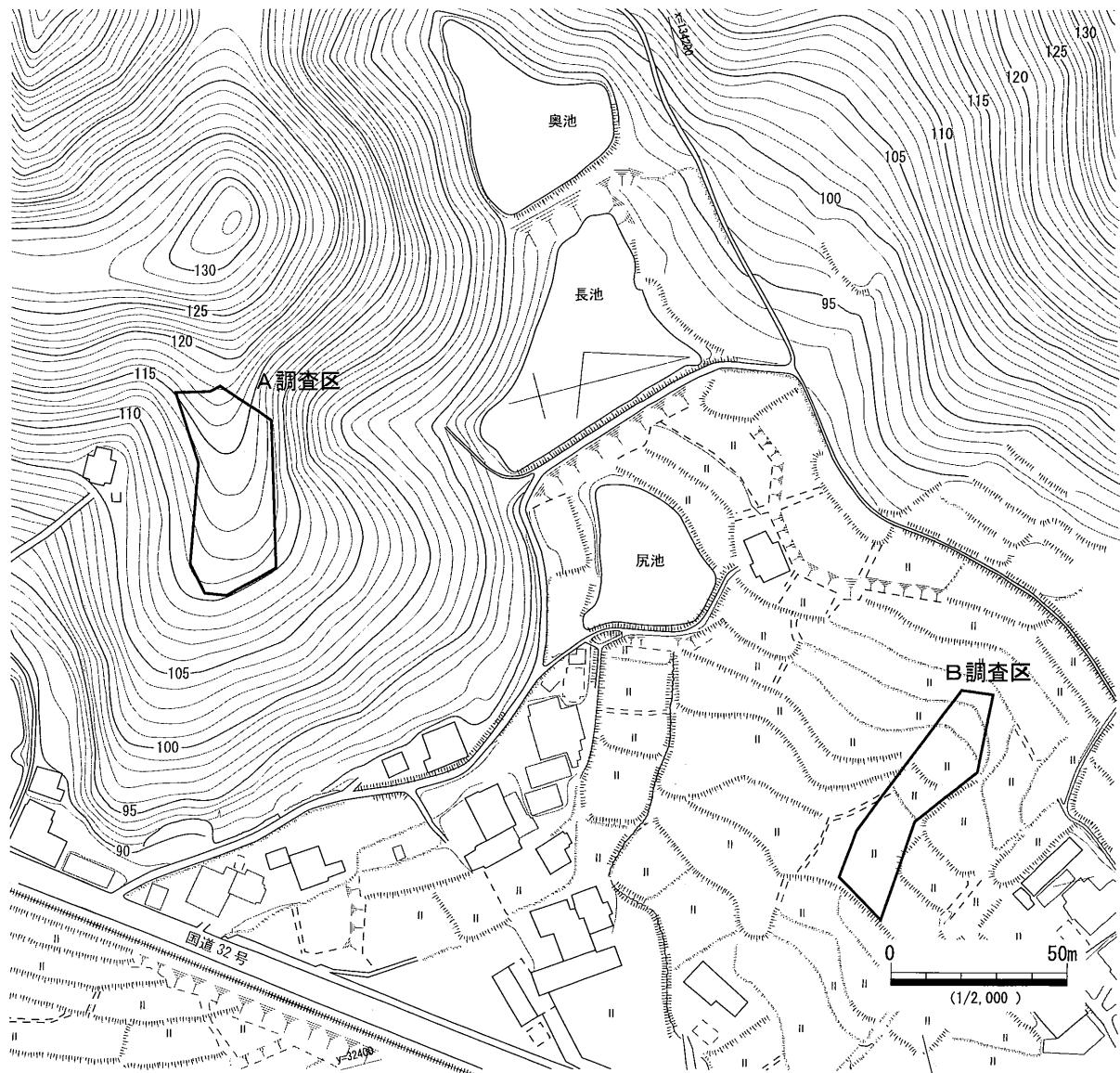
## 第2節 調査・整理の経過

発掘調査は、国土交通省四国地方整備局香川工事事務所から委託を受けた香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で、平成12年4月1日付『埋蔵文化財調査契約書』が締結され、それに基づいて香川県教育委員会を調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として平成12年11月1日に着手し、翌平成13年1月31日に終了した。

調査方法は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが現場作業員を雇用する直営方式を採用し、丘陵上をA調査区、丘陵裾部をB調査区と呼称した。

また、調査時の成果については、平成13年1月12日に開催した現地見学会にて公表し、見学者多数の参加を得た。

整理作業は、平成19年4月2日に開始し、5月31日に終了した。出土品の洗浄は現地で終了していいたため、遺物復元、実測遺物抽出、遺物実測、遺構・遺物図面トレース、レイアウト、遺物写真撮影、遺物観察表作成、原稿執筆、編集、台帳整備、収納などの作業を行った。



第2図 調査区位置図(1/2,000)

### 第3節 調査・整理の体制

平成12年度の発掘調査及び平成19年度の整理作業は以下の体制で実施した。なお、平成15年度末をもって財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが解散となり業務が香川県埋蔵文化財センターに移行したため、整理作業は香川県埋蔵文化財センターで実施している。

#### 調査（平成12年度）

香川県教育委員会事務局文化行政課

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	課長	北原和利
	課長補佐	小国史郎
	副主幹	廣瀬常雄
総務	係長	中村禎伸
	主査	三宅陽子
	主事	亀田幸一
埋蔵文化財	係長	西岡達哉
	文化財専門員	森 格也
	文化財専門員	宮崎哲治

総括	所長	菅原良弘(平成12年10月31日まで)
		小原克己(平成12年11月1日から)
	次長	川原裕章
総務	副主幹	六車正憲
	副主幹	大西誠治
	係長	新 一郎
	主査	山本和代
	主任主事	高木康晴
調査	主任文化財専門員	藤好史郎
	文化財専門員	山下平重
	技師	松岡 晶
	調査技術員	中村文枝
	参事	長尾重盛

#### 整理（平成19年度）

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

香川県埋蔵文化財センター

総括・生涯学習推進グループ	
課長	鈴木健司
課長補佐	武井壽紀
副主幹	古田 泉
主任	林 照代

総括	所長	渡部明夫
	次長	廣瀬常雄
総務課	課長	野口孝一
	主任	宮田久美子
	主任	嶋田和司
	主任	古市和子

文化財グループ	
課長補佐	藤好史郎
副主幹	片桐孝浩
主任	白井洋二
文化財専門員	森 格也
文化財専門員	信里芳紀

資料普及課	
課長	廣瀬常雄(調査課長兼務)
文化財専門員	宮崎哲治
嘱託	朝田加奈子
嘱託	伊井恵子
嘱託	磯崎福子
嘱託	岡崎江伊子
嘱託	奥田光輝
嘱託	香川和子

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

丸亀市は、香川県中部（中讃地方）のほぼ中央部にあり、四国山地（阿讃山脈）の北裾部から海岸線にかけて広がっている。遺跡の立地する丸亀市綾歌町（旧綾歌郡綾歌町）は、平成の大合併により旧綾歌郡飯山町・旧丸亀市と合併して平成18年3月22日に発足した新「丸亀市」の南部にあたり、四国山地につづく山塊と洪積台地からなっている。

室塚遺跡の調査地点は、丸亀市の南西隅に位置してまんのう町と境界となっている西山から南方へ派生する尾根の稜線上とその裾部の緩斜面（標高約85m）に分かれて立地している。北と西を西山が、南を中津山が、東を城山山塊が遮断するように位置しており、これらの山に囲まれた小さな盆地が生活域であったことは容易に推定できる。

### 第2節 歴史的環境

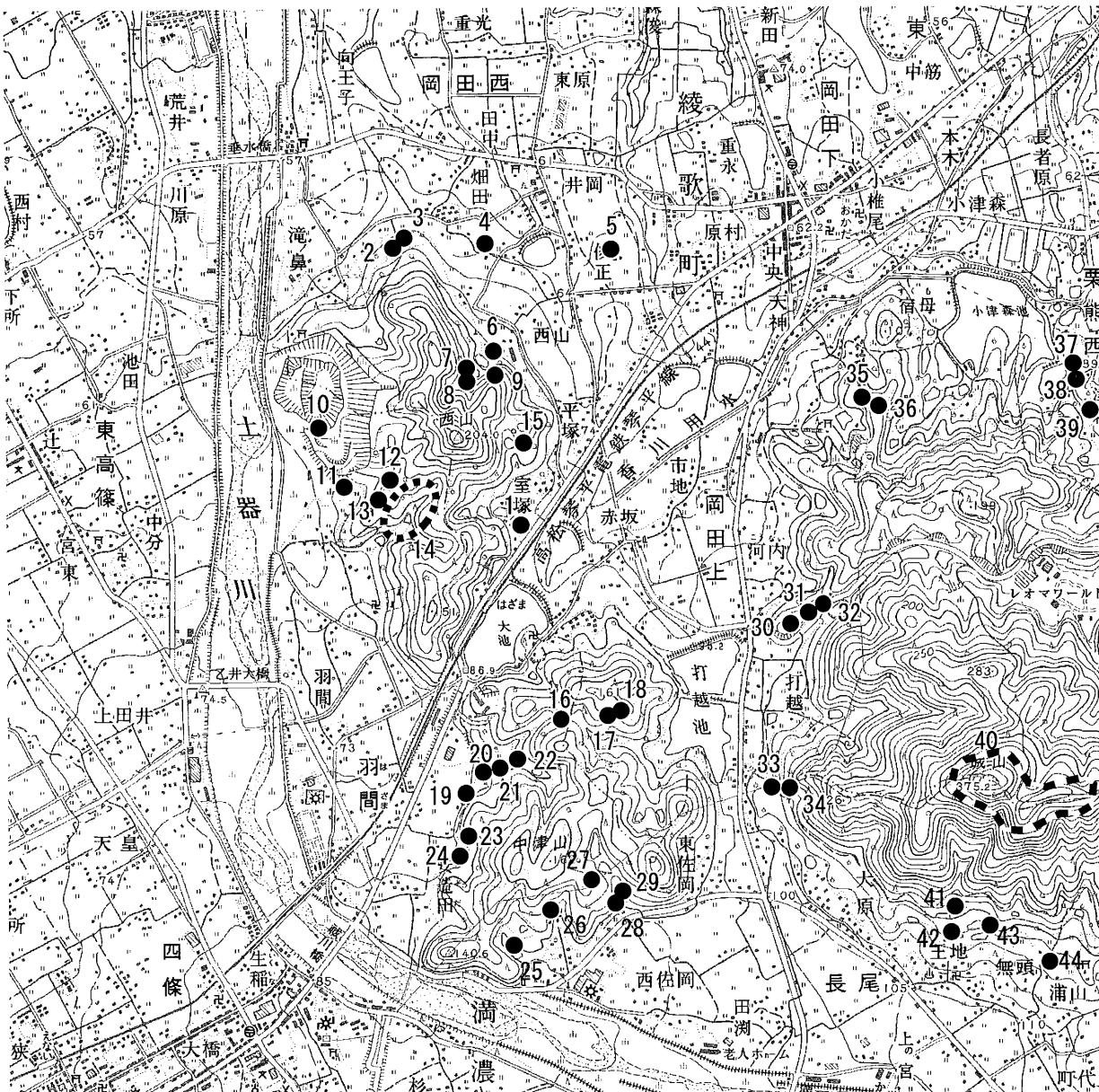
室塚遺跡周辺では、今のところ旧石器時代・縄文時代の遺跡や遺物の出土はとくには知られておらず、後述する羽間遺跡で縄文時代後期前半の土器片少量が混入している程度である。人々の活動がうかがえるのは弥生時代に入るがその遺跡数は少ない。遺跡南方の中津山麓の羽間遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡からなる小規模な集落が存在している。また、中津山中の佐岡遺跡からは平形銅剣2口の出土が伝えられている。古墳時代では西山・中津山と城山の山麓を中心に多数の古墳が分布しているが、一部を除くとそのほとんどの内容は不明である。中津山の一群では横穴式石室を内部主体とした後期古墳が複数確認されている。それらの中には、1墳丘に2石室を有する佐岡1・2号墳や複室構造を持つ安造田神社前古墳、モザイクガラス玉が出土した安造田東3号墳などの特徴的な古墳も認められる。集落遺跡では、同じ一般国道32号建設で調査を行った俊正遺跡の6世紀代の竪穴住居跡2棟を検出している。

それ以降の遺跡はわずかに知られているものの、実態が不明なものがほとんどである。古代～中世の瓦片の出土を伝える蓮光寺跡、南北朝時代～戦国時代に幾度かの合戦を経験した城山の西長尾城跡、江戸時代の大庄屋「岡田久次郎」の屋敷地の可能性のある俊正遺跡などが挙げられるにすぎない。

以上見てきたように、室塚遺跡周辺において大規模な開発やそれに伴う発掘調査は数少なく、地域の歴史はまだまだ土中に眠っているといえよう。

#### <参考文献>

- ・『香川県史 第1巻 原始・古代』香川県 1988
- ・『一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 羽間遺跡』香川県教育委員会ほか 2007
- ・『綾歌町史』綾歌町教育委員会 1976
- ・『新修 満濃町誌』満濃町・満濃町史編纂委員会ほか 2005
- ・『安造田東3号墳発掘調査報告書』満濃町教育委員会 1991



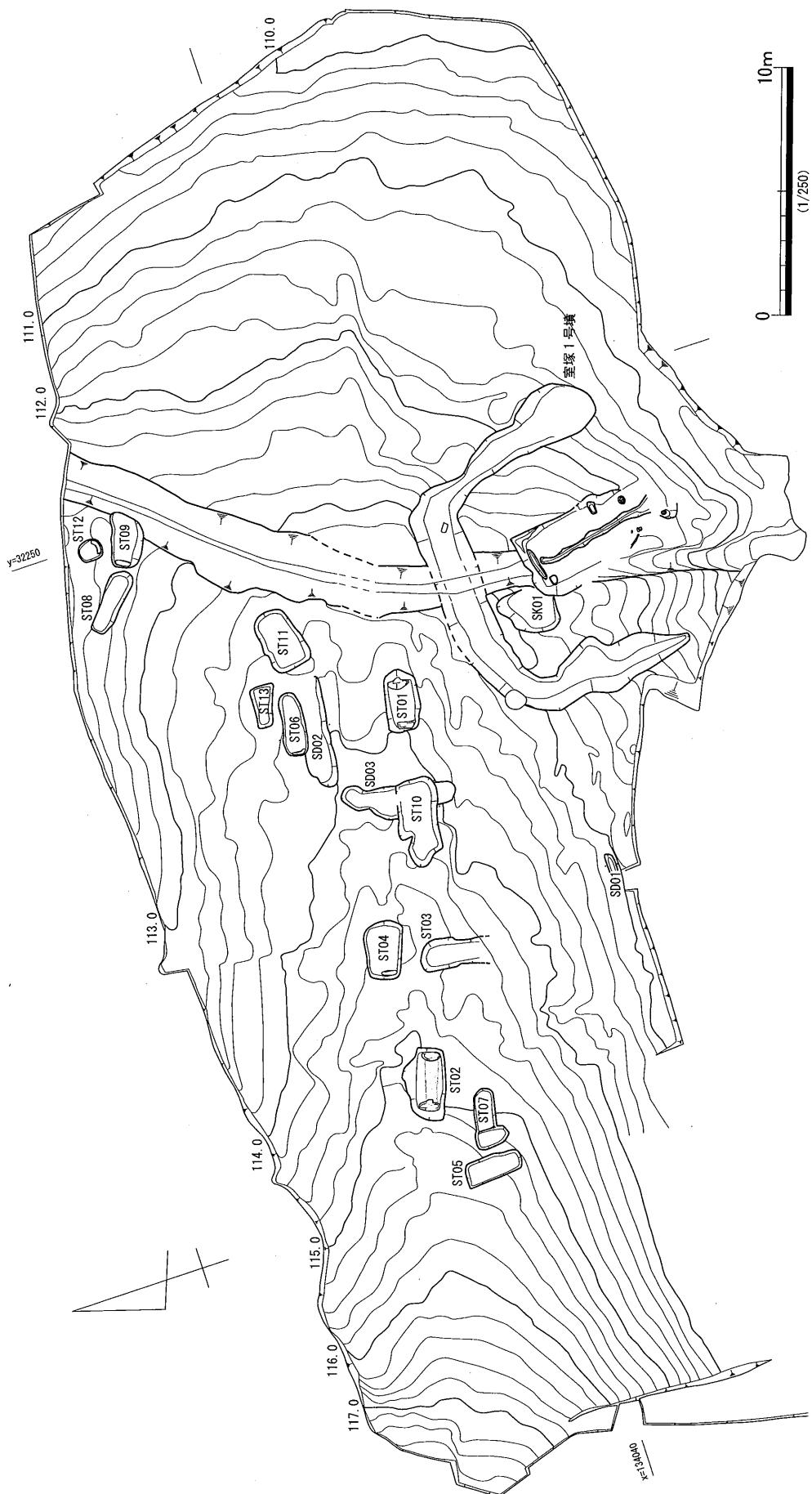
第3図 遺跡位置及び周辺の遺跡(1/25,000)

番号	種別	遺跡名	時代
1	墓	室塚遺跡	弥生
2	古墳	滝ノ鼻古墳群	古墳
3	古墳	滝/鼻古墳	古墳
4	古墳	車塚古墳	古墳
5	集落	俊正遺跡	古墳～中世
6	経塚	岡田経塚	中世
7	窪	西山窪跡	中世
8	寺院	蓮光寺跡	古代
9	包含地	西山遺跡	?
10	古墳	草塚古墳	古墳
11	古墳	西山西部3号墳	古墳
12	古墳	西山西部2号墳	古墳
13	古墳	西山西部1号墳	古墳
14	古墳	出雲山古墳群	古墳
15	墓	土屋氏石棺	古墳
16	古墳	安造田東峰古墳	古墳
17	古墳	平石2号墳	古墳
18	古墳	平石1号墳	古墳
19	集落	羽間遺跡	弥生
20	古墳	安造田東2号墳	古墳
21	古墳	安造田東3号墳	古墳
22	古墳	安造田東1号墳	古墳

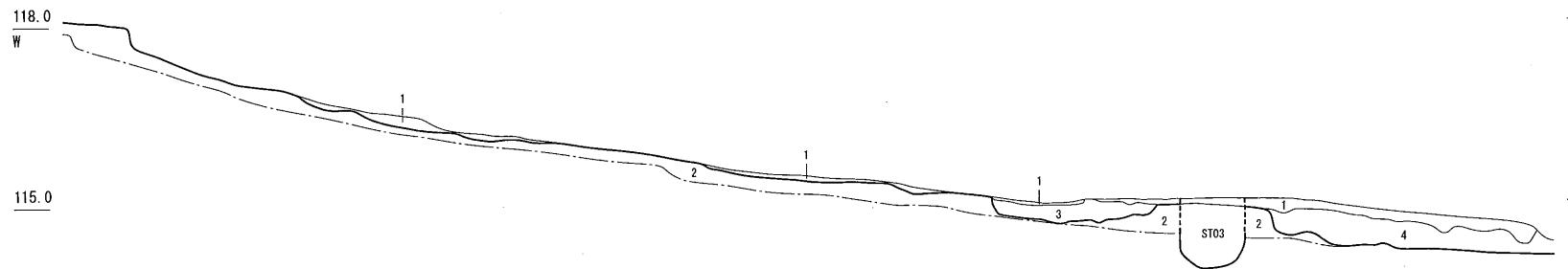
番号	種別	遺跡名	時代
23	古墳	安造田神社裏古墳	古墳
24	古墳	安造田神社前古墳	古墳
25	墓	長尾大隅守一族の墓	中世
26	寺院	佐岡寺跡	古代
27	包含地	佐岡遺跡	弥生
28	古墳	佐岡2号墳	古墳
29	古墳	佐岡1号墳	古墳
30	古墳	前山3号墳	古墳
31	古墳	前山2号墳	古墳
32	古墳	前山1号墳	古墳
33	墓	岡田5号石棺	古墳
34	墓	岡田6号石棺	古墳
35	墓	岡田3号石棺	古墳
36	墓	岡田4号石棺	古墳
37	墓	岡田1号石棺	古墳
38	墓	岡田2号石棺	古墳
39	古墳	津森穴蔵師古墳	古墳
40	山城	西長尾城跡(国吉城跡)	中世
41	古墳	斯頭墓地2号墳	古墳
42	古墳	斯頭墓地1号墳	古墳
43	古墳	光明寺池上古墳	古墳
44	古墳	天神塚古墳	古墳

第1表 室塚遺跡周辺の遺跡

第4図 A調査区遺構配置図(1/250)

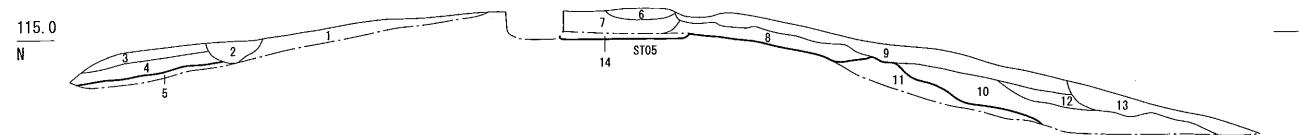


A区 畦①

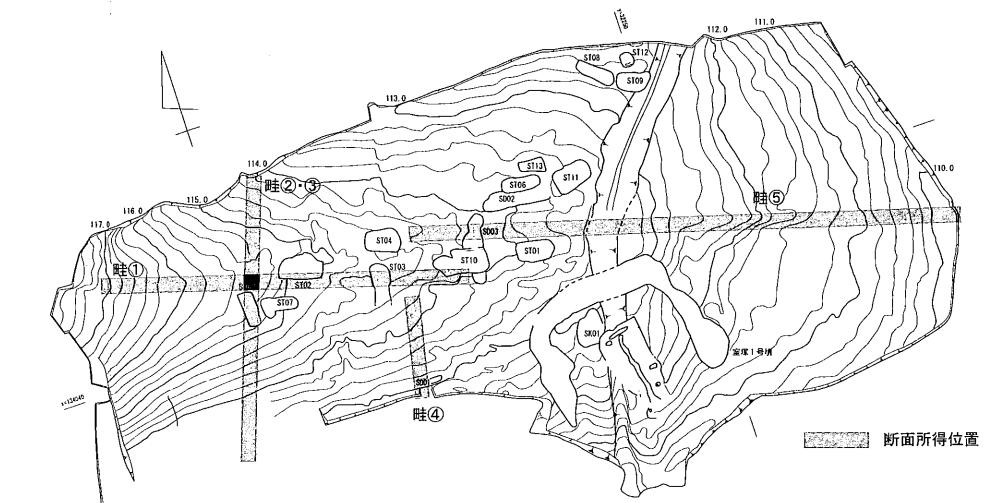


- 1 表土  
2 地山 10YR7/8 黄橙色岩盤  
3 7.5YR8/3 淡黄橙色シト～細砂 地山の再堆積土  
4 5Y6/4 淡黄色シト～2cm大の角砾 地山の再堆積土

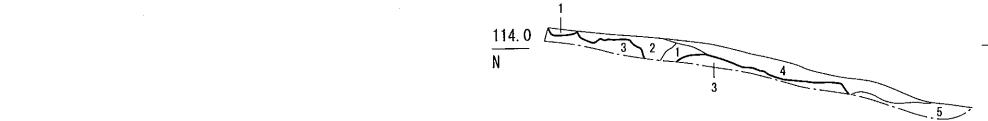
A区 畦②・③



- 1 2.5Y6/3 淡黄色細砂 岩盤再堆積土  
2 2.5Y6/2 灰白色細砂 しまりなし  
3 7.5Y7/2 灰白色シト～細砂 しまりなし  
4 7.5Y7/2 灰白色細砂層 しまりなし  
5 地山 2.5Y8/2 灰白色シト～再砂 しまりなし  
6 2.5Y7/1 灰白色シト～細砂  
7 2.5Y8/1 灰白色シト～細砂 しまりあり  
8 2.5Y6/1 灰白色シトと 5YR5/8 明赤褐色岩盤ブロック  
9 果樹園表土 7.5Y7/1 灰白色細砂 しまりなし  
10 10YR7/4 にぶい黄橙色シト～細砂 ややしまりあり  
11 地山 10YR7/4 にぶい黄橙色シト～5cm以下の角砾  
12 10YR8/2 灰白色シト～細砂  
13 2.5Y8/2 灰白色シト～細砂 2.5Y5/1 黄灰色シト～細砂ブロック含

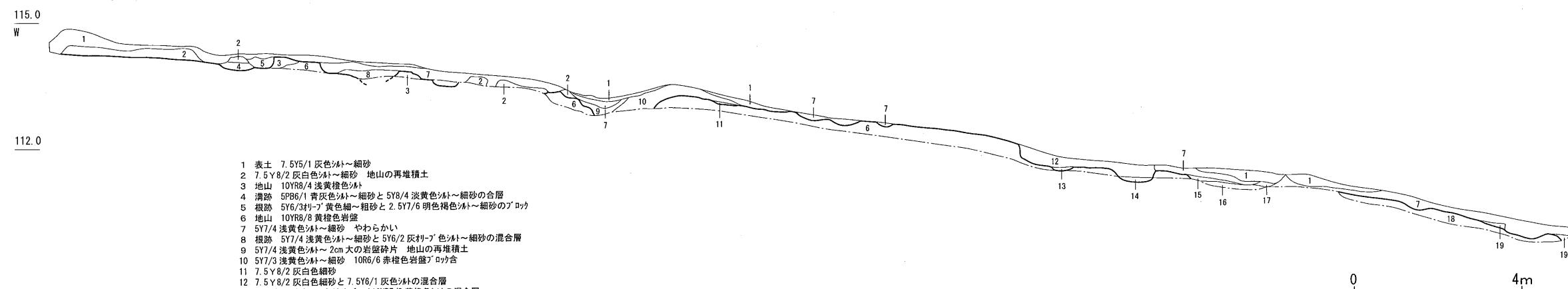


A区 畦④



- 1 5Y7/2 灰白色シト～細砂 白色粗砂含  
2 5Y6/2 灰色シト～細砂 1cm大の礫を含  
3 地山 10YR6/6 明黄褐色シト 地山岩盤の砕けた礫を含  
4 清淤 5PB6/1 青灰色シト～細砂と 5Y8/4 淡黄色シト～細砂の合層  
5 根跡 5Y6/3リーブ 黄色細～粗砂と 2.5Y7/6 明赤褐色シト～細砂のブロック  
6 地山 10YR8/8 黄橙色岩盤  
7 5Y7/4 淡黄色シト～細砂 やわらかい  
8 根跡 5Y7/4 淡黄色シト～細砂 5Y6/2 灰色シト～細砂の混合層  
9 5Y7/4 淡黄色シト～2cm大の岩盤碎片 地山の再堆積土  
10 5Y7/3 淡黄色シト～細砂 10R6/6 赤橙色岩盤ブロック含  
11 7.5Y8/2 灰白色細砂  
12 7.5Y8/2 灰白色細砂と 7.5Y6/1 灰色シトの混合層  
13 10Y7/1 灰白色シトと地山ブロック10YR7/8 黄橙色シトの混合層  
14 2.5Y7/1 灰白色細砂と地山ブロック10YR7/8 黄橙色シトの混合層  
15 2.5Y8/2 灰白色シト～細砂 地山ブロック10YR7/8 黄橙色シト含  
16 5Y8/2 灰白色細砂  
17 5Y7/2 灰白色細～中砂 地山ブロック10YR7/8 黄橙色シト含  
18 地山 5Y7/2 灰白色シト～細砂 かたくしまっている  
19 5Y7/3 淡黄色細砂

A区 畦⑤



## 第3章 調査の成果

### 第1節 A調査区の遺構・遺物

#### 1. 調査区の概要

A調査区は西山から南に派生する尾根の稜線上で、尾根先端手前の緩傾斜地、標高約115mの地点に位置する。西・北方面は西山とその山系に遮られて眺望が利かないが、南東方向は城山と中津山に囲まれた小盆地が手に取るように一望できる場所である。調査前は雑木林であり、1本の山道が通っている状態であった。雑木林以前には果樹園として使用された時期があるとの聞き取りを得ている。平成11年度の予備調査において土壙墓の可能性の高い土坑1基と弥生時代後期前半の壺1点を確認しており、保護措置の必要な範囲と判断された尾根稜線上全域をA調査区とした。その面積は1,068m<sup>2</sup>を測る。

土層序であるが、基本的に10~20cm厚の表土層の下はにぶい黄色系シルト層の地山層となっている。部分的に果樹園時の表土層や、風雨などで削られた地山層の再堆積層などがみられる。

調査の結果、弥生時代後期前半の木棺墓・土壙墓群、土坑、溝状遺構、および古墳時代終末期の方墳を検出した。また、果樹の植え付け跡と思われる多数の土坑内からは、わずかの中世土器片と近世陶磁器片が出土している。

#### 2. 遺構・遺物

##### 木棺墓・土壙墓

###### ST01（第6図）

ST01は調査区中央部、標高約114mで検出した木棺墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.5m、短軸約1.4m、深さ約0.46mを測る。長軸方向はN81°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にほぼ並行している。断面形状は逆台形を呈しており、床面の両小口部分に木棺の小口板を固定するための溝状の掘り込みを有する。この掘り込みは中心間で約1.8mを測る。

###### ST02（第6図）

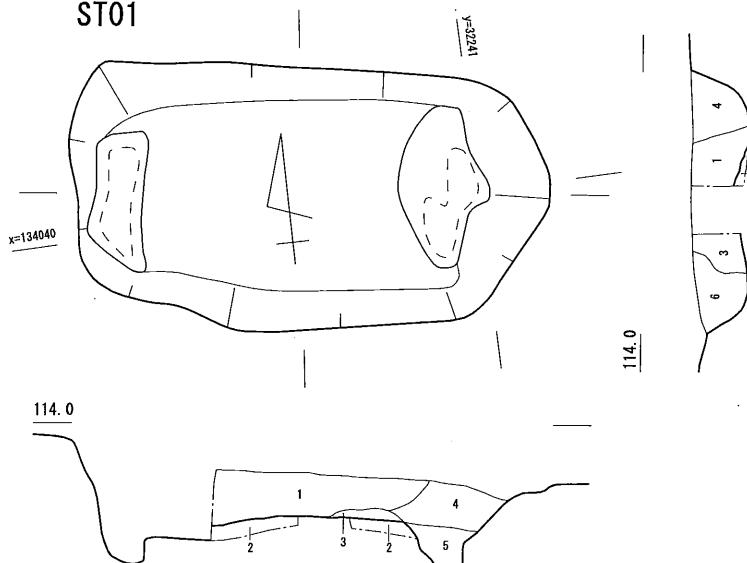
ST02は調査区西半部、標高約115mで検出した木棺墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.9m、短軸約1.7m、深さ約0.7mを測る。長軸方向はN72°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にほぼ並行している。断面形状は逆台形を呈しており、床面の両小口部分に木棺小口板を固定するための溝状の掘り込みを有する。この掘り込みは中心間で約2.0mを測り、上面では隅丸長方形をした木棺痕跡を確認している。

予備調査で検出した弥生土器壺（第8図1）はこの土壙墓から出土したものと想定される。

###### ST03（第7図）

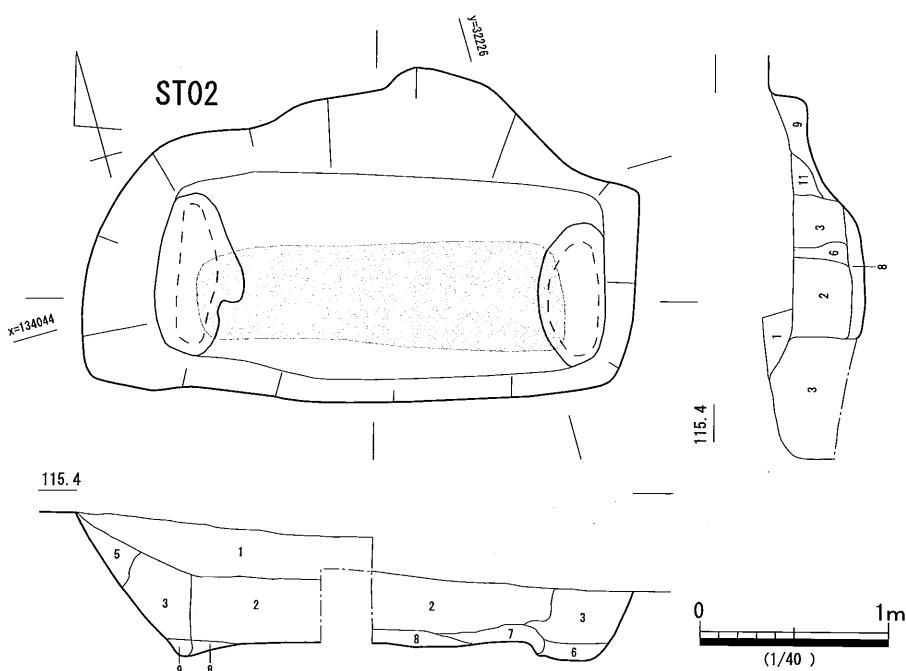
ST03は調査区中央部の西寄り、標高約114mで検出した木棺墓である。現代の搅乱土坑によって西約1/3を失っているが、遺存した部分から平面形態は隅丸の長方形を呈していたと想定できる。長軸約2.3m以上、短軸約1.3m、深さ0.58mを測る。長軸方向はN13°Eとおおむね南北方向を取り、尾根稜

ST01



- 1 棚痕 5Y7/2 灰白色シルト～細砂 5YR5/6 明赤褐色シルトブロック含  
 2 地山 5YR6/8 橙色岩盤碎片と 2.5Y8/1 灰白色シルト～細砂  
 3 5YR7/4 にぶい橙色細砂  
 4 2.5Y7/6 朝黄褐色シルトと 2.5Y8/1 灰白色細砂層  
 5 木棺痕跡 2.5Y7/4 淡黄色岩盤碎片と 2.5Y7/2 灰黄色細砂  
 6 2.5Y8/2 灰白色シルト～細砂

ST02

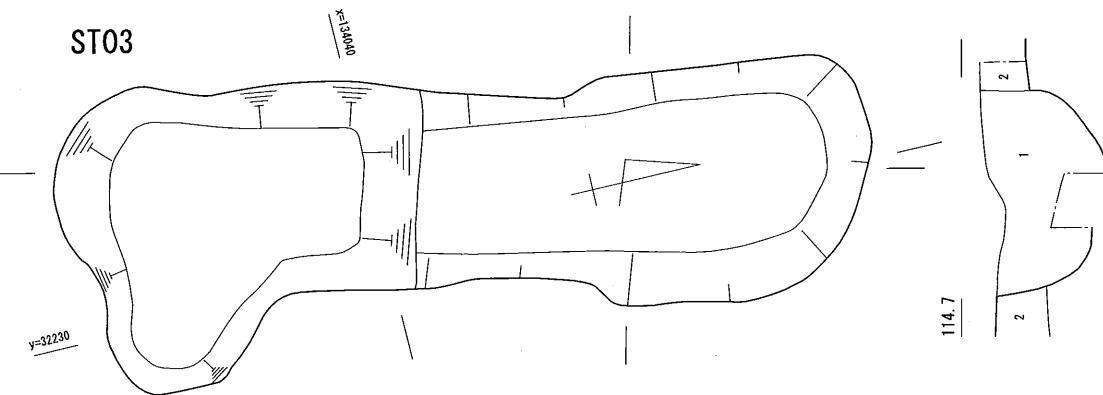


- 1 5Y8/2 灰白色シルト～細砂  
 2 木棺痕跡 N7/0 灰白色シルト～細砂  
 3 5Y8/3 淡黄色細～粗砂と 5Y8/1 灰白色細～粗砂  
 4 —  
 5 5Y8/2 灰白色シルト～細砂と 5Y8/1 灰白色シルト～細砂  
 6 5Y8/2 灰白色～ 7.5YR7/8 黄橙色粗砂  
 7 7.5YR8/3 淡黄褐色細～粗砂  
 8 2.5Y7/1 灰白色細砂と 10YR7/8 黄橙色岩盤ブロック  
 9 2.5Y7/1 灰白色細砂  
 10 —/ 5Y7/1 灰白色シルト～細砂  
 11 10YR8/3 淡黄褐色シルト～細砂層

※アミは木棺痕跡

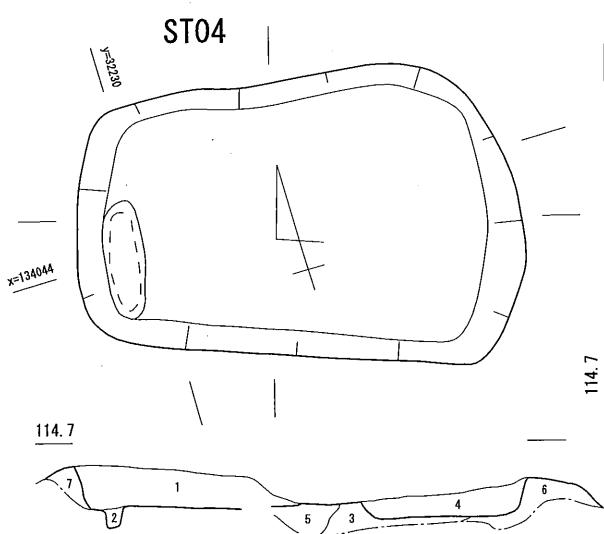
第6図 ST01・02 平・断面図(1/40)

ST03



- 1 7.5Y8/2 灰白色～10YR8/6 黄橙色シルト～細砂  
地山の再堆積  
2 地山 2.5Y7/4 浅黄色シルト 白色角礫 ( $\sim 2\text{cm}$ ) 含む  
3 地山 10YR8/2 灰白色シルト  
4 5YR8/4 淡橙色シルト～細砂  
5 5Y8/1 灰白色シルト～細砂と 7.5YR7/4 にぶい黄橙色シルト～細砂の混層  
6 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトと 7.5YR8/1 灰白色シルトブロックの混層 (現代搅乱)  
7 5Y7/1 灰白色細砂層

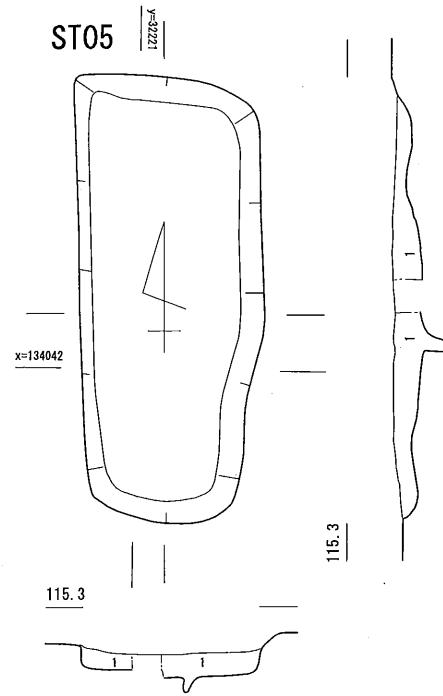
ST04



- 1 5Y7/2 灰白色シルト～細砂  
2 1に 5Y8/3 淡黄色粗砂混じる  
3 7.5YR8/3 浅黃橙色シルト (地山)  
4 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト～細砂 (1cm 以下の角礫含む)  
5 10YR5/8 黄褐色シルト (地山)  
6 2.5Y8/3 淡黄色シルト～細砂 (地山)  
7 10YR8/4 浅黃橙色シルト (地山)

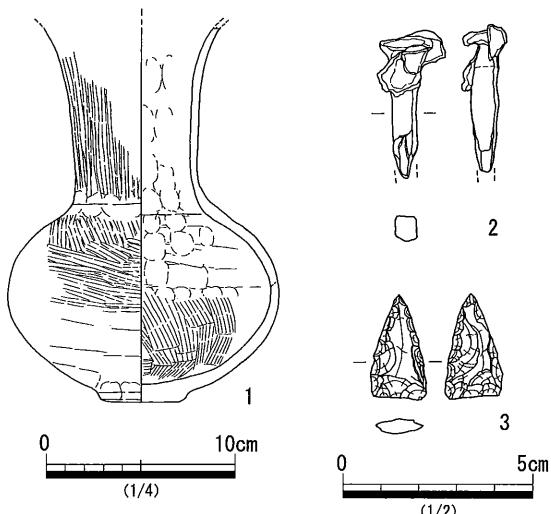


ST05



- 1 2.5Y7/3 浅黄色シルト～細砂

第7図 ST03～05 平・断面図 (1/40)



第8図 ST02～04出土遺物実測図(1/2・1/4)

ST02～04は調査区中央部の北端寄り、標高約113mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.6m、短軸約1.0m、深さ約0.41mを測る。長軸方向はN80°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にはほぼ平行する。

土壙内からサヌカイト製の打製石鏃（第8図3）が出土している。

#### ST05（第7図）

ST05は調査区西半部、標高約115mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.3m、短軸約1.0m、深さ約0.17mを測る。長軸方向はN2°Wと南北方向を取り、尾根稜線方向にはほぼ直交している。断面形状は逆台形を呈しており、床面に溝状の掘り込みなどは認められない。

#### ST06（第9図）

ST06は調査区中央部、標高約114mで検出した木棺墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.6m、短軸約1.0m、深さ約0.41mを測る。長軸方向はN82°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にはほぼ並行している。断面形状は逆台形を呈しており、床面の西小口部分に木棺小口板を固定するための溝状の掘り込みを有する。

#### ST07（第9図）

ST07は調査区西半部、標高約115mで検出した土壙墓である。現代の搅乱土坑によって西端を失っているが、遺存した部分から平面形態は隅丸の長方形を呈していたと想定できる。長軸約1.8m以上、短軸約0.9m、深さ0.38mを測る。長軸方向はN80°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にはほぼ平行する。断面形状は逆台形を呈している。床面に溝状の掘り込みなどは認められない。

#### ST08（第9図）

ST08は調査区中央部の北端寄り、標高約113mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形

線方向にはほぼ直交する。断面形状は長軸方向は箱形、短軸方向がU字形を呈している。床面に溝状の掘り込みなどは認められない。

土壙内から鉄釘（第8図2）が出土している。木質の遺存などは認められないが、木棺に使用された可能性があり、そこからST03を木棺墓と判断している。

#### ST04（第7図）

ST04は調査区中央部の西寄り、標高約114mで検出した木棺墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.4m、短軸約1.5m、深さ約

0.23mを測る。長軸方向はN73°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にはほぼ並行している。

断面形状は逆台形を呈しており、床面の西小口部分に木棺小口板を固定するための溝状の掘り込みを有する。

土壙内からサヌカイト製の打製石鏃（第8図3）が出土している。

#### ST05（第7図）

ST05は調査区西半部、標高約115mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.3m、短軸約1.0m、深さ約0.17mを測る。長軸方向はN2°Wと南北方向を取り、尾根稜線方向にはほぼ直交している。断面形状は逆台形を呈しており、床面に溝状の掘り込みなどは認められない。

#### ST06（第9図）

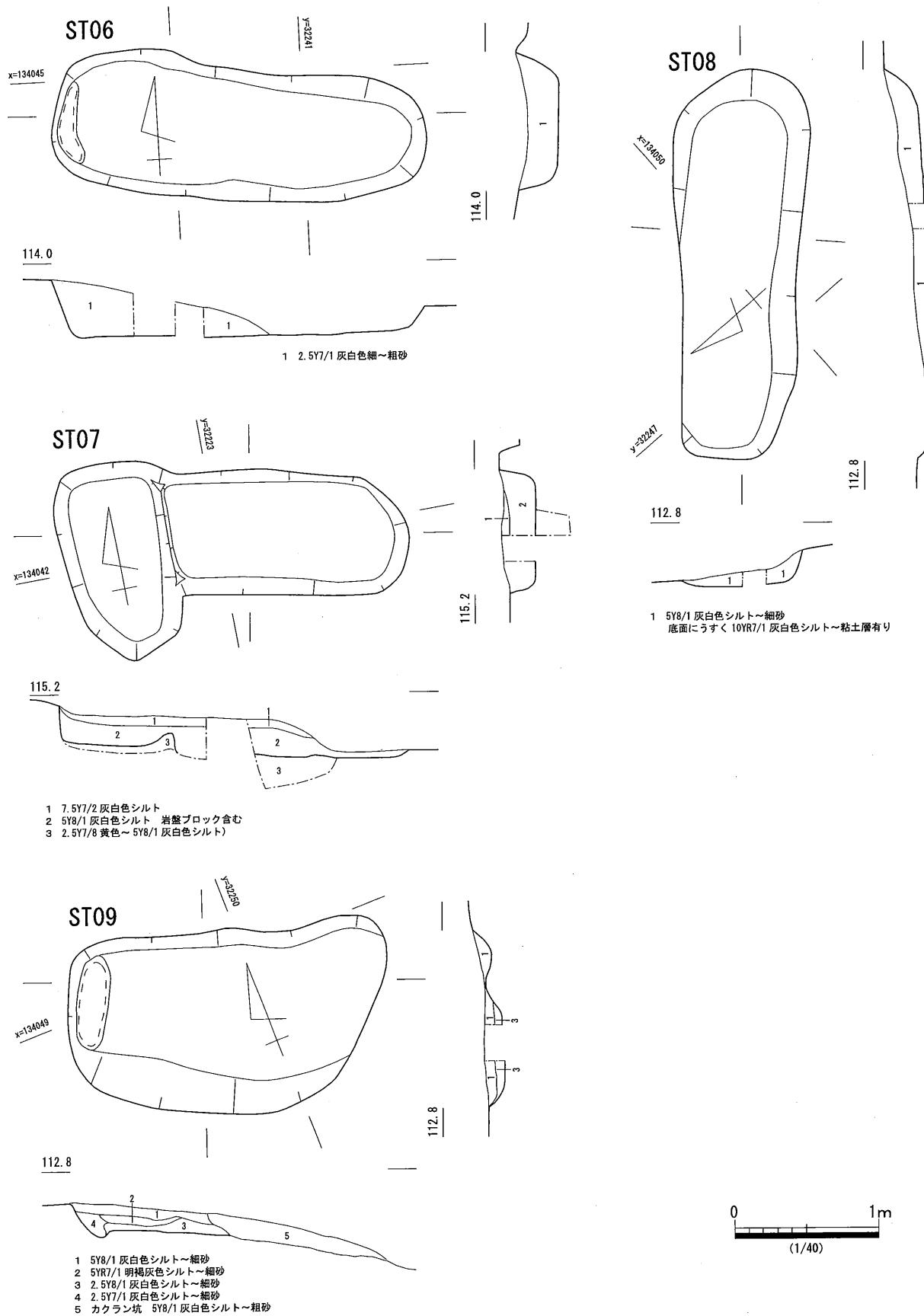
ST06は調査区中央部、標高約114mで検出した木棺墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.6m、短軸約1.0m、深さ約0.41mを測る。長軸方向はN82°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にはほぼ並行している。断面形状は逆台形を呈しており、床面の西小口部分に木棺小口板を固定するための溝状の掘り込みを有する。

#### ST07（第9図）

ST07は調査区西半部、標高約115mで検出した土壙墓である。現代の搅乱土坑によって西端を失っているが、遺存した部分から平面形態は隅丸の長方形を呈していたと想定できる。長軸約1.8m以上、短軸約0.9m、深さ0.38mを測る。長軸方向はN80°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にはほぼ平行する。断面形状は逆台形を呈している。床面に溝状の掘り込みなどは認められない。

#### ST08（第9図）

ST08は調査区中央部の北端寄り、標高約113mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形



第9図 ST06～09 平・断面図(1/40)

を呈しており、長軸約2.7m、短軸約0.95m、深さ約0.3mを測る。長軸方向はN46°Wであり尾根稜線方向には斜行するが、この部分の等高線には平行している。断面形状は逆台形を呈している。床面に溝状の掘り込みなどは認められないが、人頭大の安山岩塊石1つが東側の小口付近に認められる。

#### ST09（第9図）

ST09は調査区中央部の北端寄り、標高約113mで検出した木棺墓である。後世の山道によって東端を失っているが、遺存した部分から平面形態は隅丸の長方形を呈していたと想定できる。長軸約2.1m、短軸約1.7m、深さ約0.2mを測る。長軸方向はN79°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にほぼ平行する。断面形状は逆台形を呈しており、床面の西小口部分に木棺小口板を固定するための溝状の掘り込みを有する。

#### ST10（第10図）

ST10は調査区中央部、標高約114mで検出した土壙墓である。平面形態は北側の長側辺がやや歪な隅丸の長方形を呈しており、長軸約3.6m、短軸約1.6m、深さ0.56mを測る。長軸方向はN79°Wとほぼ東西方向を取り、尾根稜線方向にほぼ平行する。断面形状は逆台形を呈している。床面に溝状の掘り込みなどは認められない。

#### ST11（第10図）

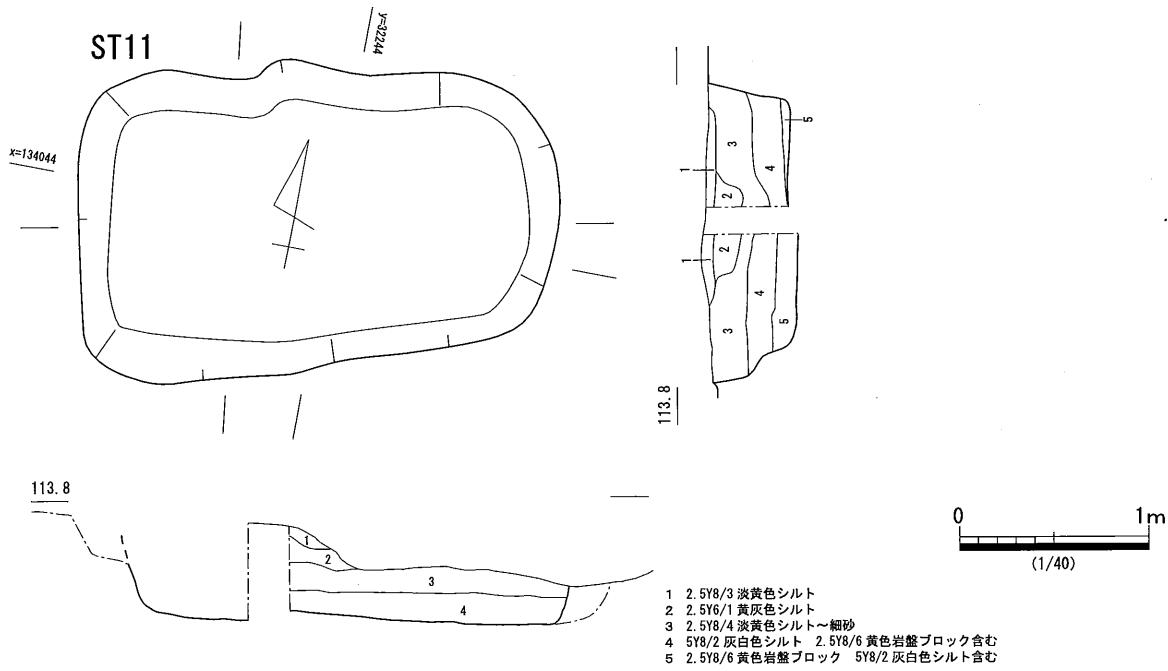
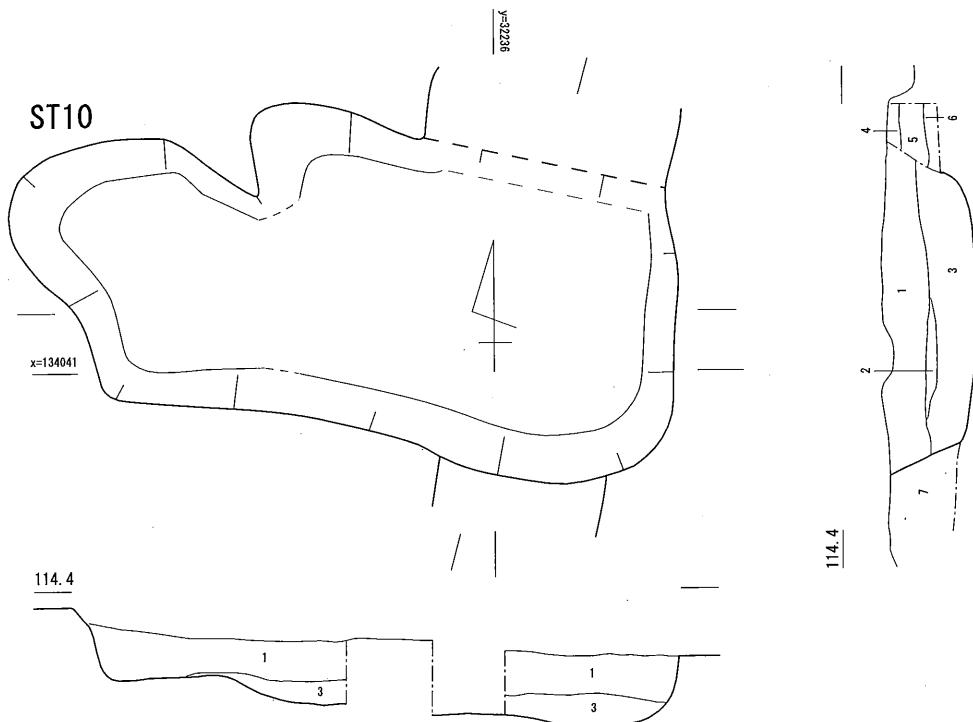
ST11は調査区中央部、標高約114mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸約2.5m、短軸約1.7m、深さ約0.6mを測る。長軸方向はN81°Wとほぼ東西方向を取り、尾根稜線方向にほぼ平行する。断面形状は逆台形を呈している。床面に溝状の掘り込みなどは認められない。

#### ST12（第11図）

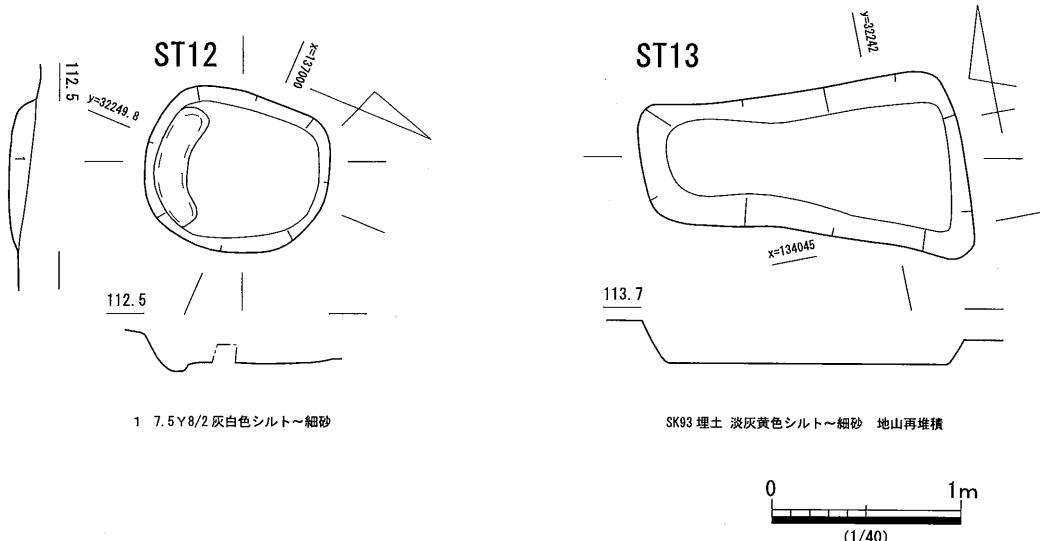
ST12は調査区中央部の北端寄り、標高約112mで検出した木棺墓である。平面形態は隅丸方形を呈している。長軸約1.0m、短軸約0.9m、深さ約0.16mを測る。長軸方向はN17°Wとおおむね南北方向を取り、尾根稜線方向およびこの地点の等高線にほぼ直交する。断面形状は逆台形を呈しており、床面の南小口部分に木棺小口板を固定するための溝状の掘り込みを有することから、本来は南北に長い隅丸方形を呈していたものと想定される。

#### ST13（第11図）

ST13は調査区中央部、標高約113mで検出した土壙墓である。平面形態は隅丸の長台形を呈しており、長軸約1.7m、短軸約1.0m、深さ約0.23mを測る。長軸方向はN79°Wとおおむね東西方向を取り、尾根稜線方向にほぼ平行する。断面形状は逆台形を呈している。床面に溝状の掘り込みなどは認められない。



第10図 ST10・11 平・断面図(1/40)



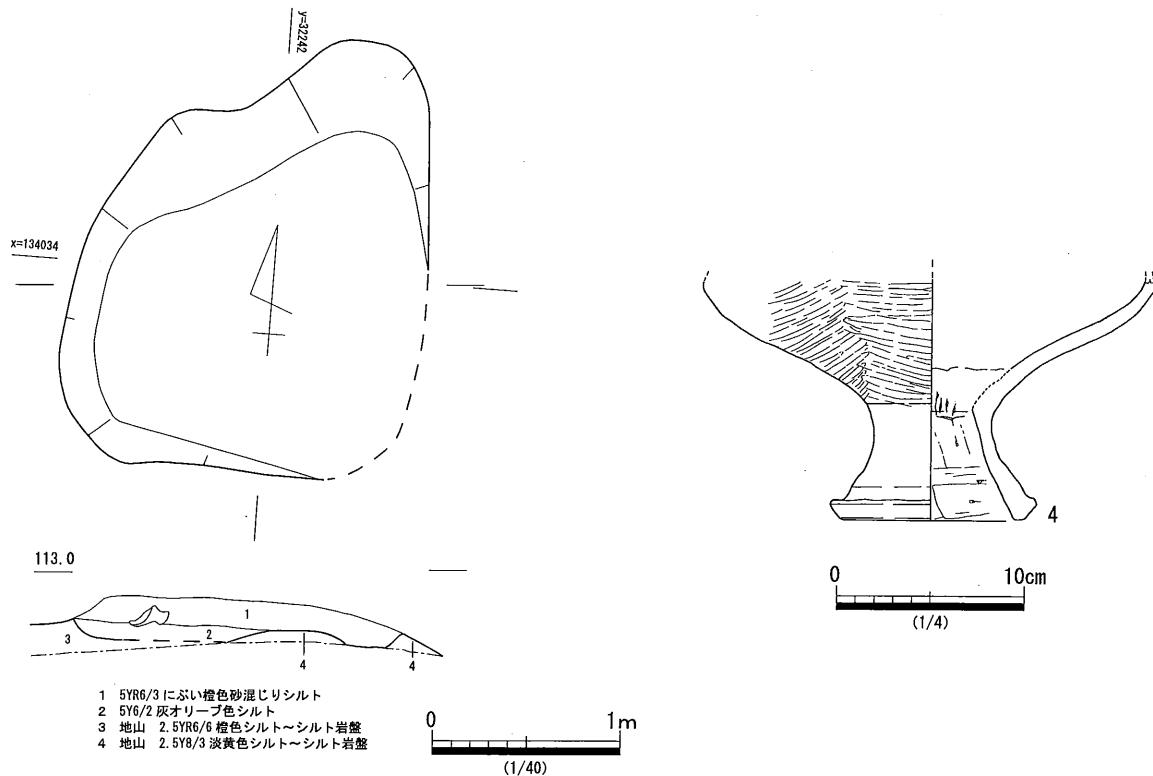
第11図 ST12・13 平・断面図(1/40)

## 土坑

### SK01 (第12図)

SK01は調査区中央部、標高約113mで検出した土坑である。後世の山道による削平で東端を失っているが、平面形態は不整楕円形を呈しており、長径約2.3m、短径約1.7m、深さ0.27mを測る。断面形状は浅い皿形を呈している。

埋土中から弥生土器高杯（第12図4）が出土している。弥生時代後期前半の時期が想定される。



第12図 SK01平・断面図(1/40)、出土遺物実測図(1/4)

## 溝状遺構

### SD01 (第13図)

SD01は調査区中央部南壁沿いで検出した溝状遺構である。おおむね等高線に平行する東西の方向をしているが、途中で直角に近く屈曲して等高線にはほぼ直交しながら調査区外へ続いている。断面形状は浅いU字形で、検出長約7.5m、幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。図化できなかつたが弥生時代後期に想定できる弥生土器細片がわずかに出土している。

### SD02 (第13図)

SD02は調査区中央部、標高約114mで検出した溝状遺構である。おおむね東西方向を有しており、検出長約4.5m、幅約1.2m、深さ約0.2mの規模を測る。断面形状は逆台形を呈し、底面は平坦になっている。底面は緩やかに尾根稜線方向に傾斜しているため東端は明瞭な立ち上がりを持たず、開いた状態となっている。

内部よりサヌカイト製石鏃3点(第13図5～7)が出土している。

### SD03 (第13図)

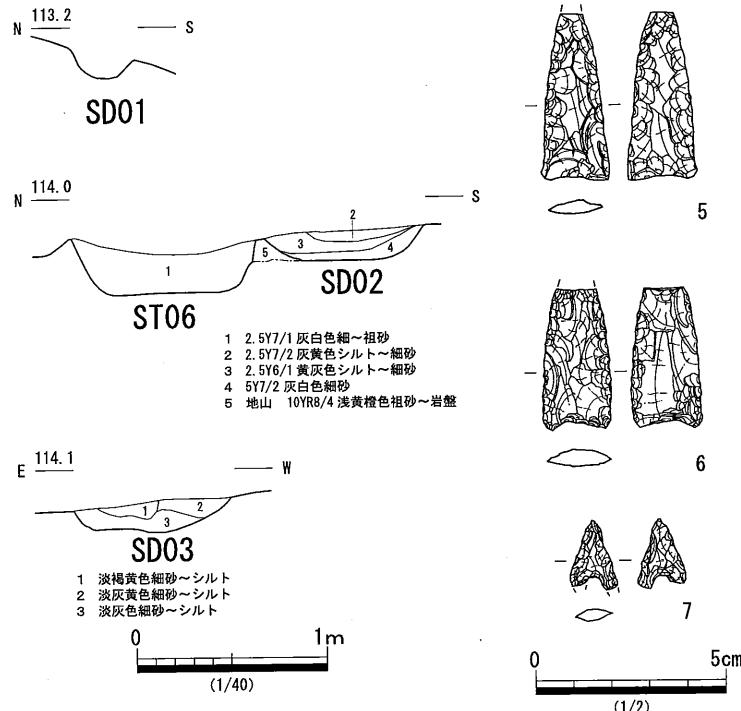
SD03は調査区中央部、標高約114mで検出した溝状遺構である。おおむね南北方向を有しており、検出長約4.7m、幅約1.3m、深さ0.2mを測る。断面形状は逆台形を呈し、底面は平坦である。遺構の重なり具合から、土壙墓ST10に先行する溝状遺構とわかる。SD03は先述したSD02と連続はないもののほぼ直交し、その南側には土壙墓ST01が存在するというこの3者の位置関係から、溝状遺構SD02・03は方形台状墓の区画溝の可能性がある。今回の調査では南・東側の区画溝は検出されず、尾根自体の風化作用で消失してしまったことも想定しうるため、ここでは可能性を指摘するにとどめておく。

## 古墳

### 室塚1号墳

#### 立地

室塚1号墳は尾根の稜線からわずかに南斜面に下った標高113～111mの緩斜面に存在している。この場所からは西・北の眺望が全く利かず、石室の開口する南は後世に造られた溜池・大池を挟んで中津山が存在している。調査前は明瞭なマウンドや石室石材と思しき石の散布も見られず、古墳の存在を暗



第13図 SD01～03 断面図(1/40)、SD02出土遺物実測図(1/2)

示するような状況は全く確認できなかった。調査の最初に調査区内を横切っていた山道部分を精査したところ若干の石材が顔を出したことから、トレーナー3本を設定して石材を抜き取られた横穴式石室と墳丘盛土を確認した。

### 周溝・墳丘

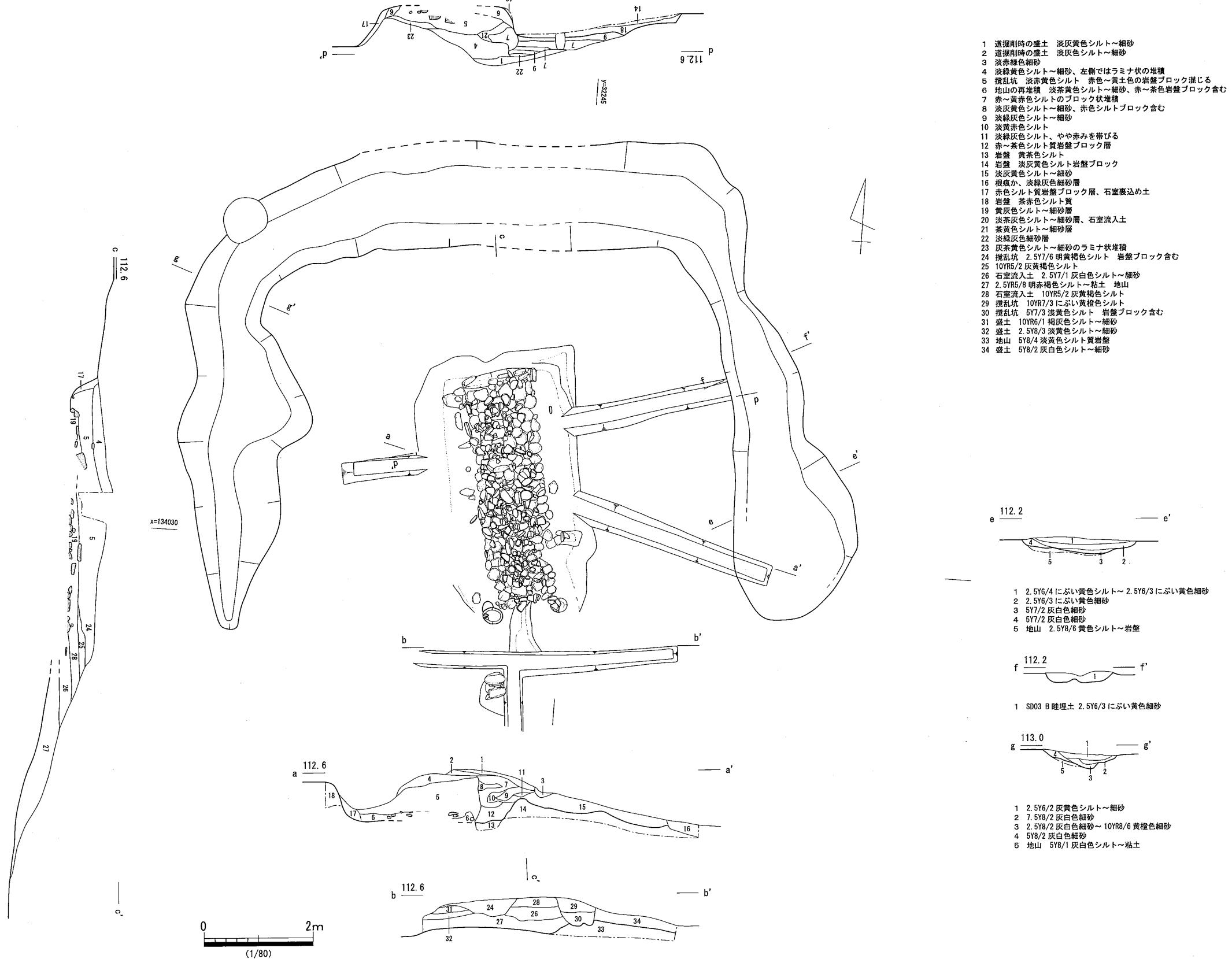
周溝は墳丘西・北・東の3方向を「コ」字形に囲むような状態で確認した。それぞれの周溝はほぼ直交し、北側でN84° Eの方向で尾根稜線の方向とは大きく異なっており、正方位を志向したものと思われる。規模は、北側で上面幅約2.0mを測り、若干の幅の違いはあるものの、西・東側でも約2.4m程度である。断面形状は浅い三角形や逆台形を呈する部分があるなど一定しておらず、底面も若干の凹凸が見られるようである。深さは北側で約0.7m、西・東側で約0.3mを測る。西・東側の端部はともに石室の玄門付近のあたりで等高線に吸収されてしまうように途切れてしまう。東西の周溝間の距離は内側で8.4m、外側で11.6mを測る。周濠内からは須恵器椀の底部破片（第22図12）が1点出土している。

墳丘は周溝の形状から方墳とわかり、その墳丘規模は東西の周溝間の距離から一辺約8.4mと判断される。この古墳が属する古墳時代終末期の方墳には、地形の緩斜面を利用して古墳の前面に階段状の段を設けたものが存在することが知られている。室塚1号墳には前面の段などの施設はみられず、かえってそれが前面の墳裾を不明瞭にしている。等高線を観察すると古墳前面がやや張り出している感もあり、その下の傾斜変換点あたりを墳裾とみれば、ほぼ正方形の墳丘が復元できる。墳丘の盛土は後世の削平や著しい搅乱によってかなり失われているが、墳丘南東部、特に石室に近い部分が比較的よく残っていた。土層観察からは、古墳築造前の腐葉土（表土層）が見られない、地山層上面がほぼ平坦になっている、石室近くでは約20cmの厚さのシルト～細砂層を数回積んでいるなどがうかがえる。これらの状況から、古墳の築造にあたってはまず全体を平坦に削り出し、石室部の墓坑を掘り下げて石室基底石を設置して裏込め土と墳丘盛土を積む。その際には、周溝を掘った土を盛土に利用した可能性はおおいに想定される。その後、石室側壁の石を1～2段積むごとに裏込め土と盛土を積むことを繰り返して古墳を構築していくことが想定できる。

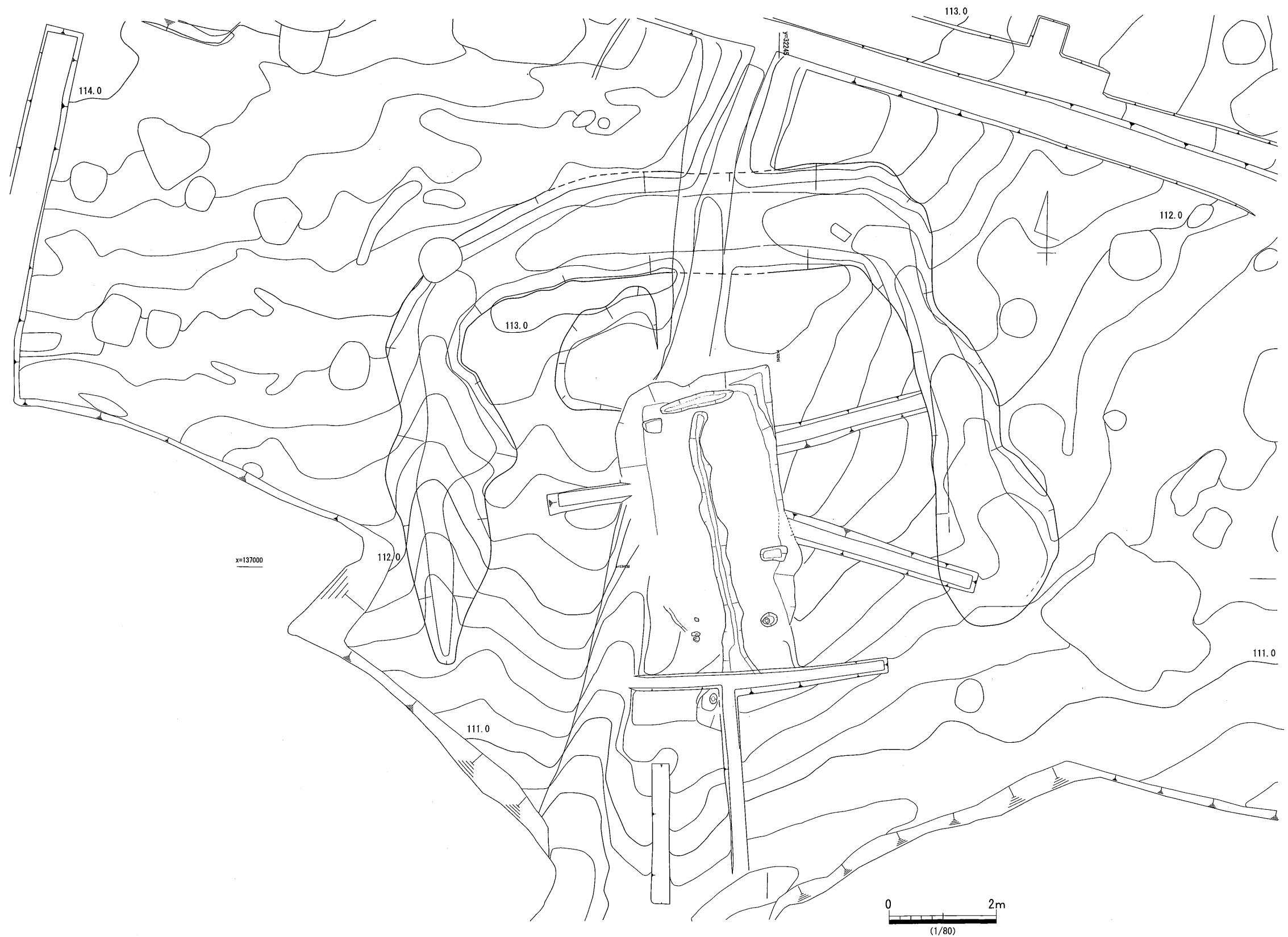
### 埋葬主体

主体部は横穴式石室で、主軸方向がN11° Wとほぼ南方向へ開口している。石室石材の遺存状況は極めて悪く、天井石はおろか側壁の基底石まで失っているため、石室の構造や平面形態を判断することがたいへん困難となっている。床面には径20cm前後の扁平な円礫を使用した敷石が見られるが、それよりも大きな円礫が少量ながら搅乱坑から出土しており、これらが側壁を構築していた石材の可能性が高いと調査時の所見には記されている。敷石南端から約1.2mの位置に残存した羨道側壁と見られる3石（長径40cm前後）と同規模の石材が使われたのであろう。調査区周辺にこれらの石材の散布や転用した構造物等はみられないことから、石材は離れたところまで持ち去られたものと思われる。

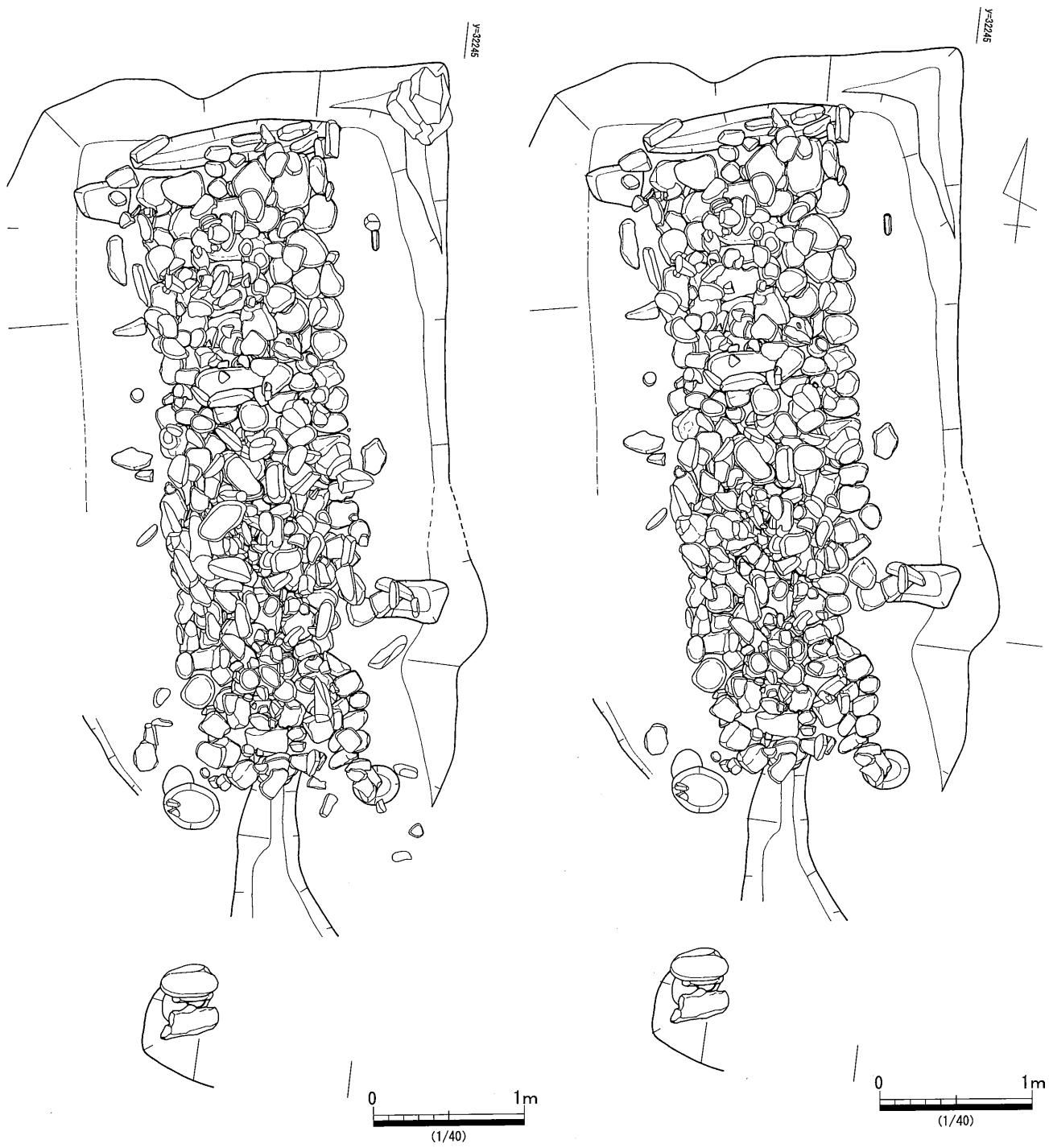
墓坑は敷石部分の南端で幅約1.9m、北端で約3.0mを測り、羽子板状の平面形を呈している。南端より南は古墳築造時に造成した平坦面につながっており、明瞭な掘り込みは見られない。深さは北端で約0.8m、中央付近で約0.6m、南端で約0.1mを測る。墓坑には側壁基底石を据え付けるための掘り込みは基本的に見られない。これは、比較的小ぶりで扁平な石材を小口積みするために掘り込みを設け



第14図 室塚1号墳丘平・断面図(1/80)



第15図 室塚1号墳完掘状況平面図(1/80)

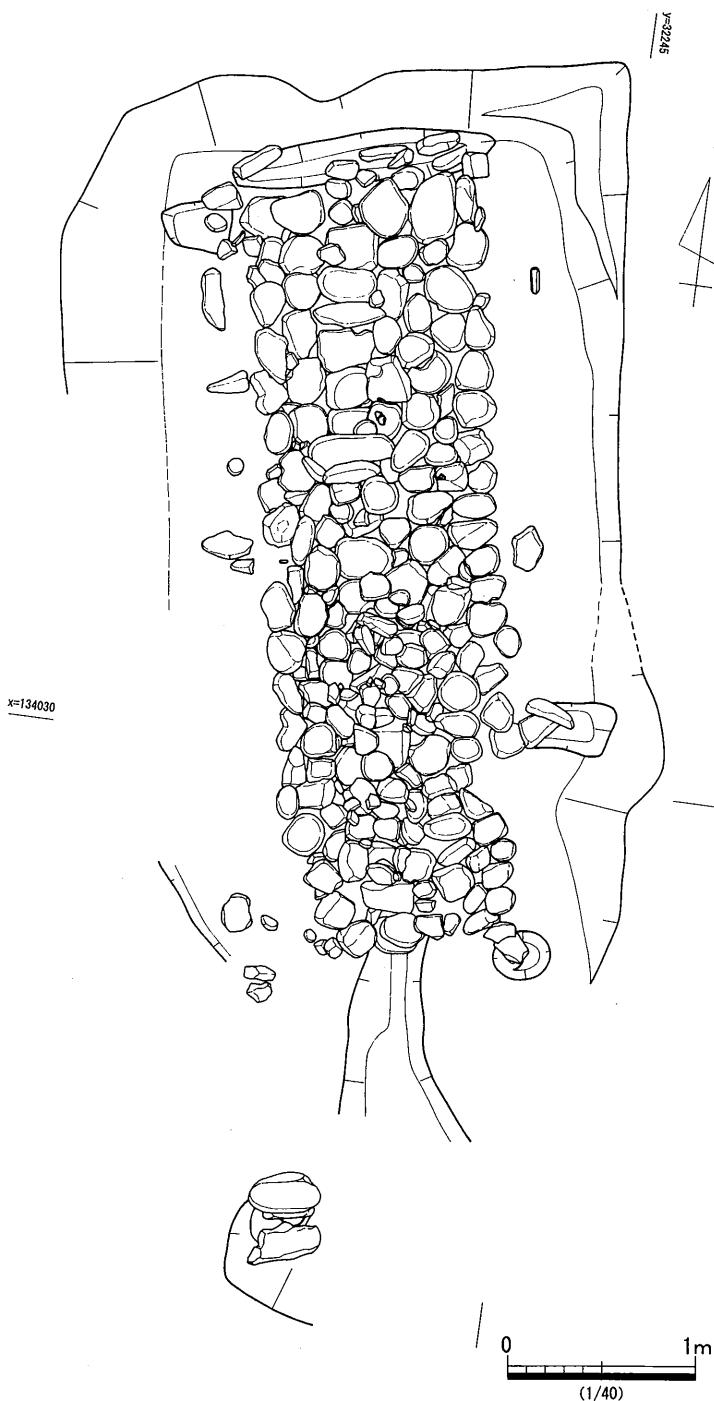


第16図 室塚1号墳  
敷石検出状況平面図(1/40)

第17図 室塚1号墳  
上面敷石検出状況平面図(1/40)

なくとも安定して配置することができたからであろう。ただし、北壁（奥壁）部分には長さ約1.3m、幅約0.3m、深さ約5cmの溝状の据え付け穴が穿たれており、両側壁とは異なる板状の石材1石を据えて奥壁基底石にしたことが想定できる。

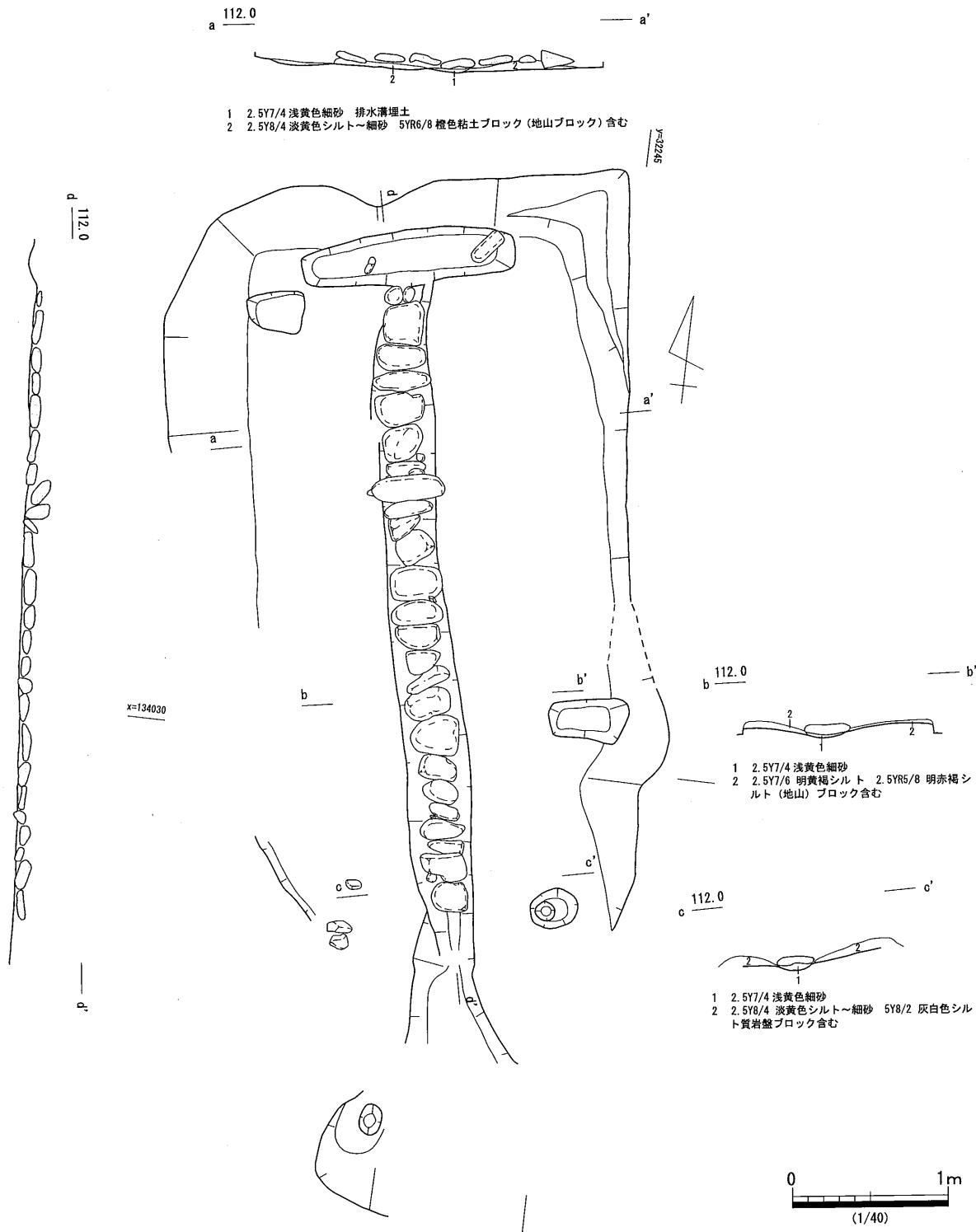
現状から石室の構造を判断するのは極めて難しい。床面に敷石を行う場合、玄室には設けるが羨道に



第18図 室塚1号墳下面敷石検出状況平面図(1/40)

ていたことがうかがえる。東壁については羨道部の石材が全く残っていないため判断に苦しむが、玄門立柱の据え付け穴が袖を形成するように大きく内側に入り込んでいないことから、西壁と同様に玄室も羨道も面を揃えていたものと理解したい。以上の点を踏まえると、石室構造は玄門部がわずかに内側に張り出しが玄室と羨道の壁面は揃っている無袖式の横穴式石室に復元することができる。その規模は、石室長6.0m以上、玄室長約4.3m、玄室奥幅(=最大幅)約1.2m、玄門部推定幅約0.8m、羨道長1.7

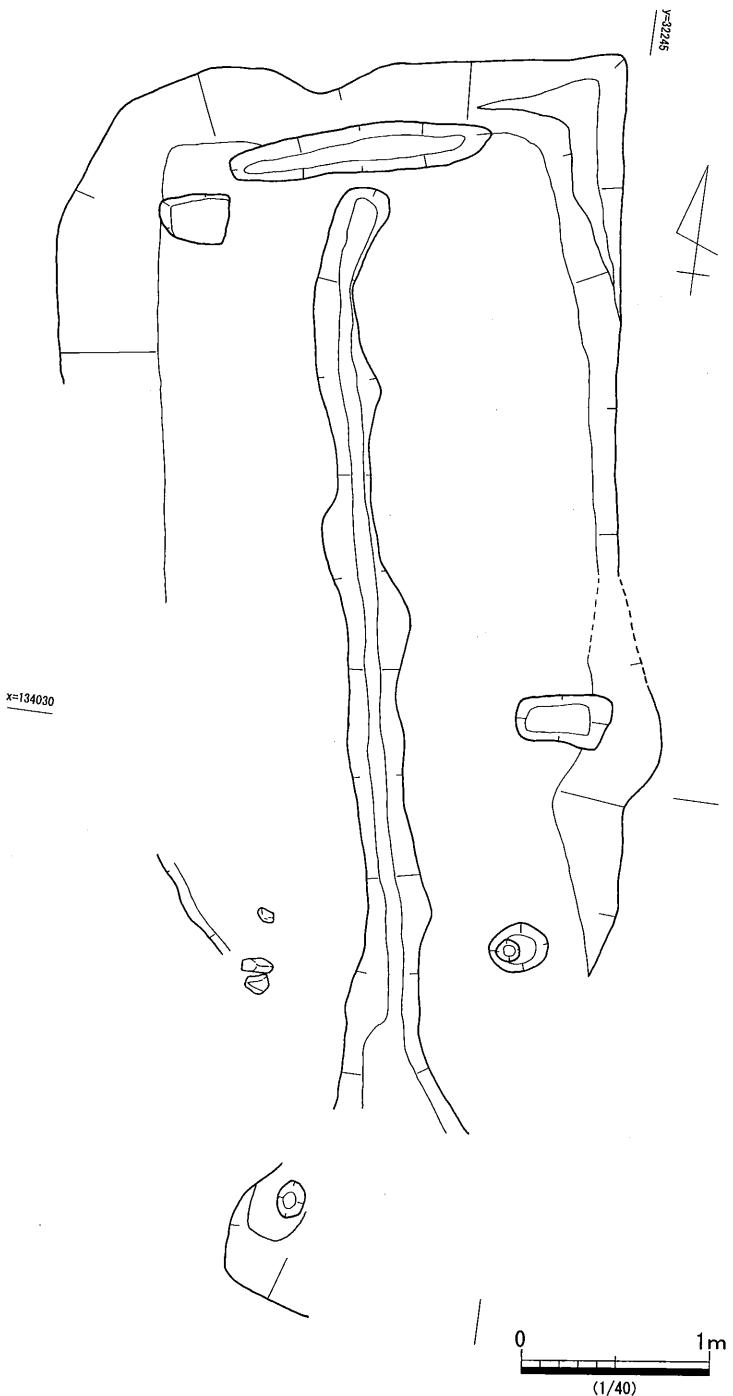
は設けないことが多い。敷石の南端東側には床面に穴が掘り込まれており、これを基底石の据え付け穴と捉えた場合、側壁の基底石とは異なる石材の積み方をしたと見ることができる。すなわち、石の平積みではなく、柱状の石材を立てて使用した玄門立柱を据えるための掘り込みが想定できる(註1)。また、敷石南端付近で墓坑の掘り込みの幅が狭まり、掘り込みも浅く不明瞭になるなど、この位置が何らかの区画を意図した可能性は高いと言える。玄室と羨道の床面に段差がない場合、玄門部床面には闕石を設けて区画することが多いが、室塚1号墳では見られなかった。おそらく闕石は存在していたと思うが、後述する排水溝が存在したことから床面を掘り込んで据え付けることができず、単に置いただけのものであつただろう。羨道側壁の残存である3石以外、大きな石材は全てなくなってしまい、その際に闕石も持ち去られたものとみられる。敷石の四辺は直線的に残っており、北端の幅が約10cmとわずかに広いだけで、ほぼ長方形を呈している。西辺の延長上には羨道側壁の3石の内面がピタリと位置する。このことから、西壁については玄室も羨道も面を揃え



第19図 室塚1号墳排水溝検出状況平面図(1/40)

m以上、推定幅約1.1mを測る。現状では玄室長に対して羨道長が短すぎることから、もともとの羨道はもっと長かったと思われる。

玄室の敷石は部分的に2～3段重なった状態で検出したが、基本的には2段重ねであり、調査時には



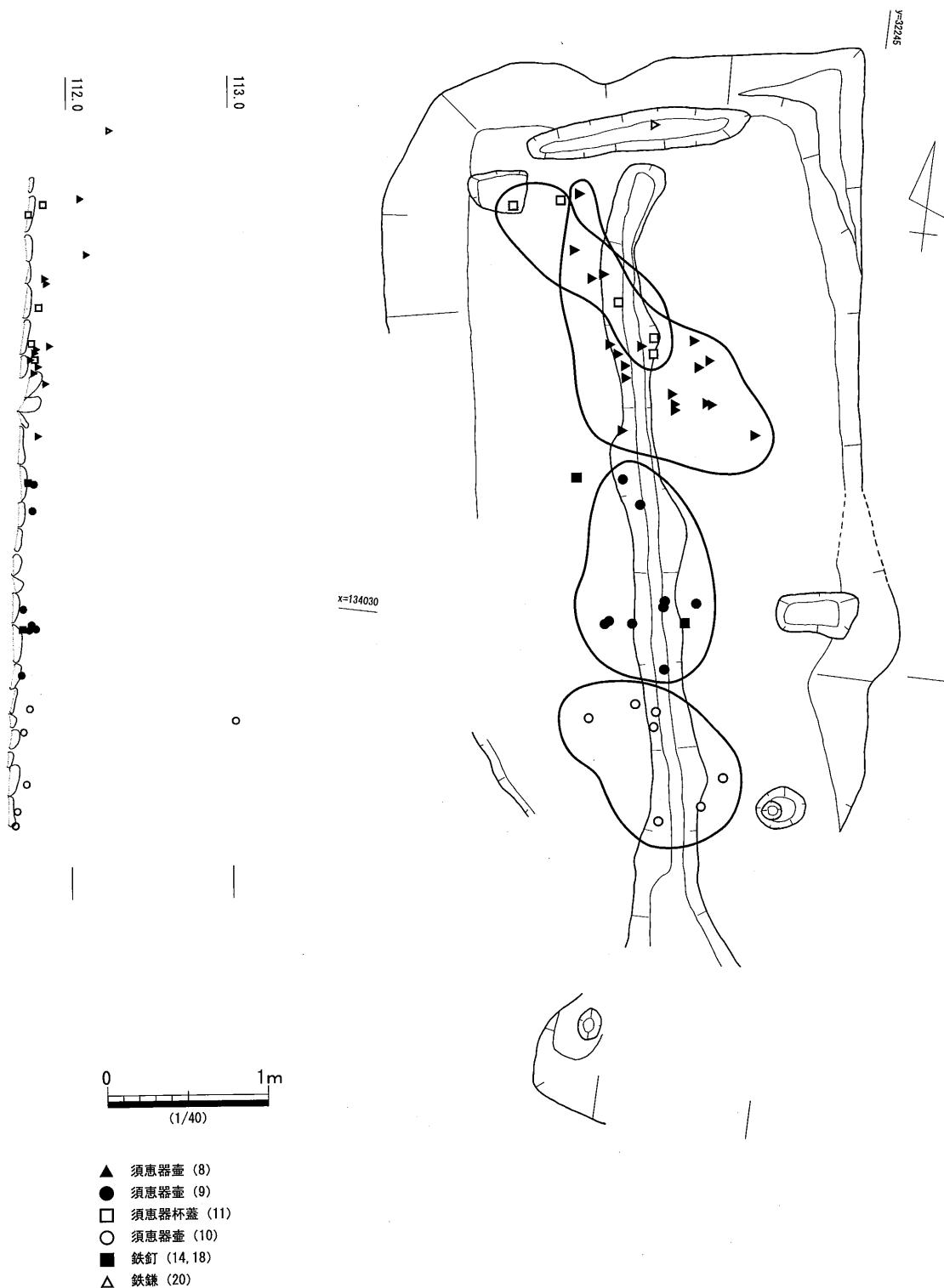
第20図 室塚1号墳墓壙完掘状況平面図(1/40)

ており、その蓋石は下面の敷石の一部を兼ねている。奥壁から9番目の石材は他が平置きなのに対して立てて置かれているが、その目的については定かではない。また羨道部分に蓋石があったかについても現状で判断しうる材料はない。

石室内の遺物は、羨道部分からの出土ではなく、玄室からわずかな量の須恵器、鉄製品（鉄釘、鉄鎌）が大半が細片となって出土している。その出土状況であるが、垂直方向の分布では石室の埋土中や後世の搅乱土中に含まれているものがわずかにみられるものの、ほとんどが下面敷石上面で検出している。

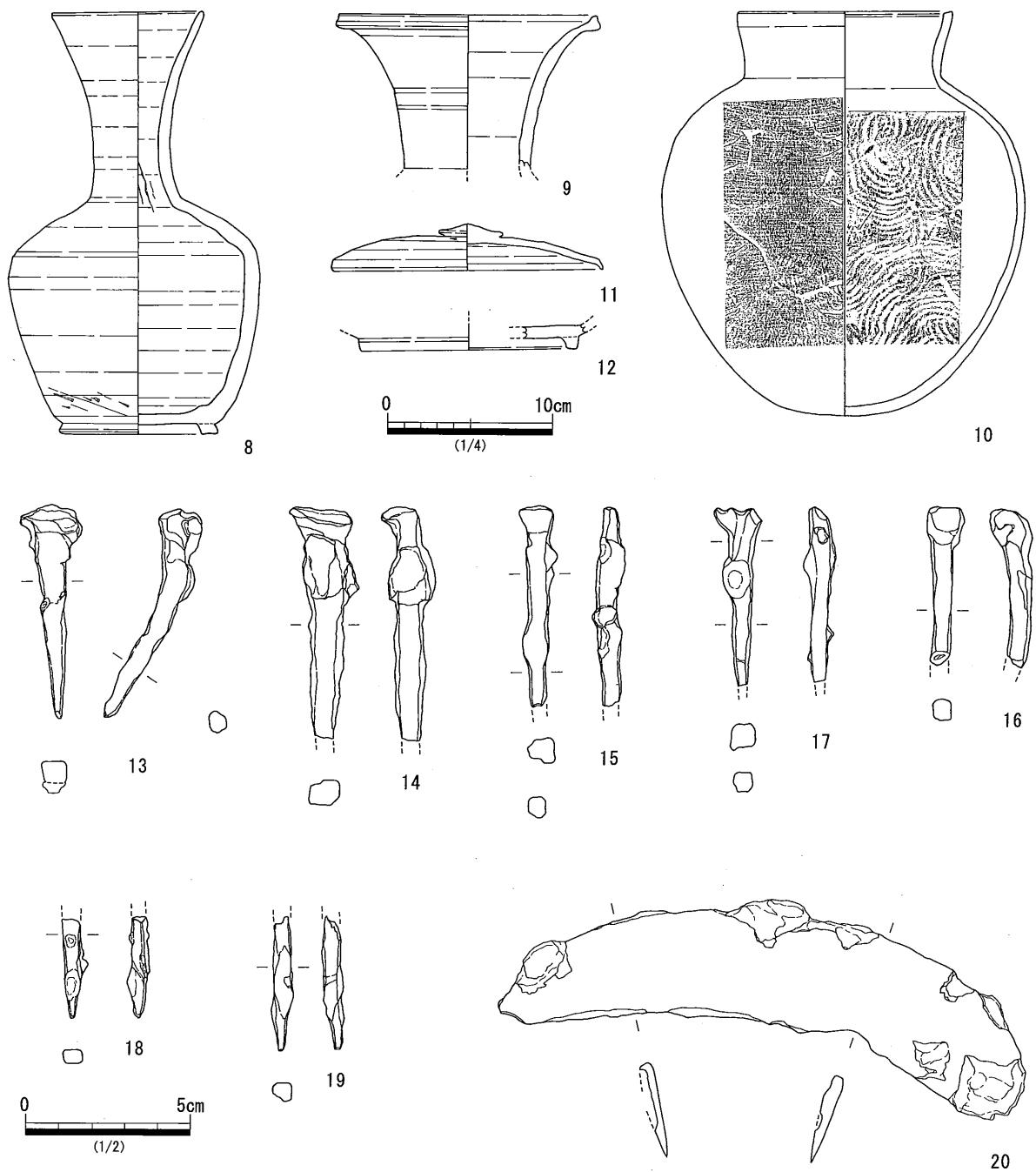
上面、下面と分離して図面実測等の作業を行っている。これは追葬の可能性を想定したものと思われる。しかし、遺物の出土状況をみるとほとんどの遺物は下面敷石上でから出土しているものの、上面より上位の埋土から出土した遺物と接合できたものも見られることや、上面の敷石は部分的に見られなかつたり重なつていたりとかなり乱れた状態で検出している。これらから、敷石は初葬時にやや大きめの円礫を敷いた上に小ぶりの円礫を敷いたもので追葬時に重ねて敷いたものではないと判断したい。また、棺台として石を据えたような状況は確認できていない。

玄室から羨道にかけての床面には排水溝が掘られていた。断面形状は浅いU字形を呈し、検出長約5.0m、幅0.5m、深さ5~10cmの規模を測る。玄室奥壁（北壁）の溝状の石材据え付け穴から推定玄門部を越えて羨道側へ約1.0mの地点で削平を受けた羨道床面と同化している。玄室部分には下面の敷石よりやや大きめの円礫を用いて蓋がかけら



第21図 室塚1号墳遺物出土位置平・断面図(1/40)

また、水平方向の分布では4個体分の須恵器片が一部は重なるものの、それぞれのまとまりを持っていることがうかがえる。これらの状況は4個体の須恵器が石室内に土が流入する前の段階で破損した場所を示すものであり、本来の埋納位置を示すものではないといえよう。9の壺の胴部や11の蓋とセットに



第22図 室塚1号墳出土遺物実測図(1/2・1/4)

になる身（椀）が見られないなど、玄室内が荒らされたことを示す傍証となろう。鉄釘は木棺の板材固定に使用されたものであるが、破片2点（第22図14、18）が下面敷石上面で、頭部片（第22図17）が搅乱土坑内から出土した以外はすべて石室埋土中からの出土であり、須恵器と同様の状況を示している。したがって、現状では棺や土器群の配置位置、土器群の内容（種類、数量など）を復元することは不可能と言わざるを得ない。

8～12は玄室から出土した須恵器である。8は長頸壺である。肩の張った胴部に細長い口頸部が付く。9は広口壺の口頸部である。中位外面に2条の太い沈線が巡る。10は球形の胴部に短く立ち上が

る口縁部を持った甕である。内面には成形時の當て具痕が明瞭に残る。11は蓋である。口縁端部を折り返しており、扁平なつまみが付く。12は周溝から出土した須恵器碗の底部である。

13～20は鉄器である。14・18は玄室床面、17は攪乱土坑、それ以外は玄室の埋土中から出土している。13～19は鉄釘である。13・14・17の頭部は折り曲げによって作り出されている。20は鉄鎌である。刃部も峰も緩やかに内弯するもので、先端を欠損している。

須恵器の年代観から、室塚1号墳は7世紀後半に築造された古墳時代終末期の古墳といえる。

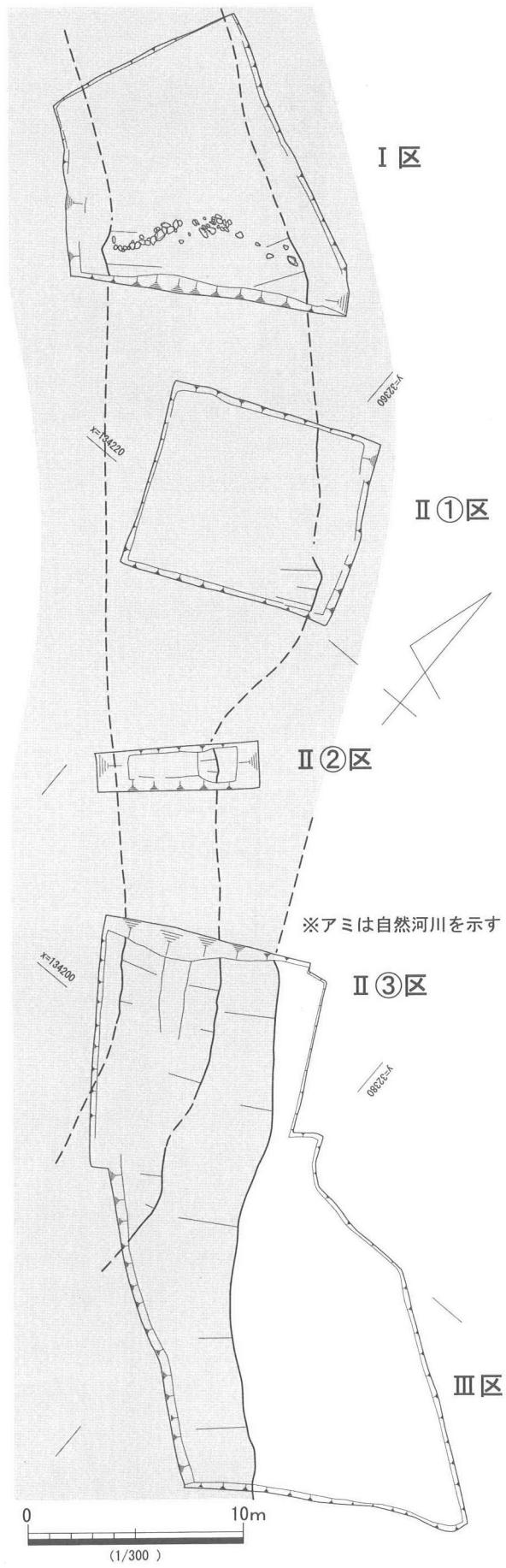
## 第2節 B調査区の遺構・遺物

### 1. 調査区の概要

B調査区は西山裾部の緩傾斜地で、A調査区の立地する尾根とは、現在溜池となっている谷を隔てて約200m北の地点に位置する。B調査区の北方には西山から東に派生する尾根と南に開けた谷があり、B調査区はこの谷筋上の標高84～82m部分にあたる。調査前は等高線に沿って棚田状に開墾された水田が連なっていた。平成11年度の予備調査において弥生時代後期前半の土器を含んだ河川跡を1条確認しており、それを含む保護措置の必要な範囲988m<sup>2</sup>をB調査区とした。なお、水田の筆単位によって調査区を三分割して、西から順に①～③の呼称を付けて調査を行なっている。

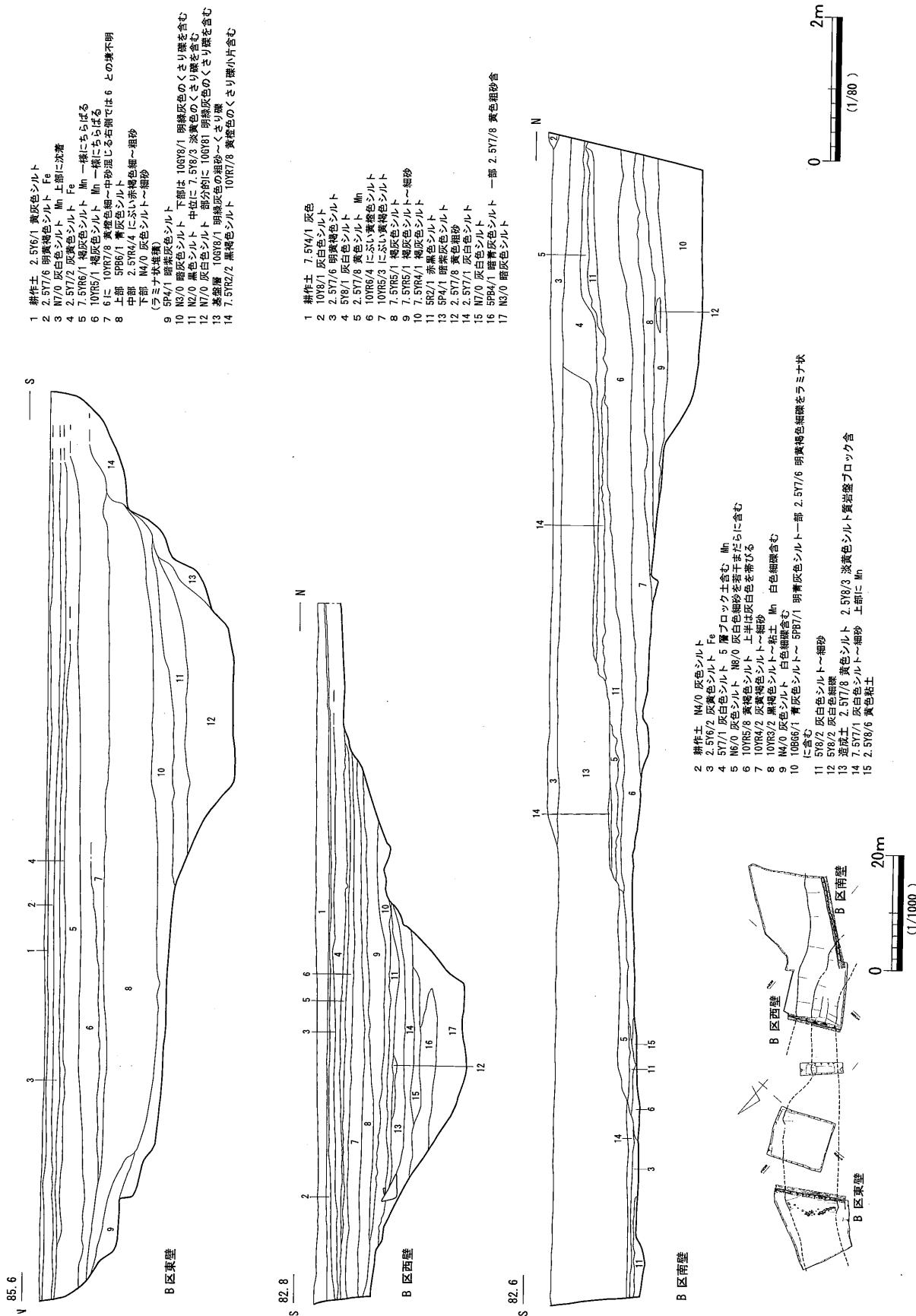
土層序であるが、調査区の大半が河川跡であり、その内部はシルト層と砂層がセットでいくつかの単位を成しながら堆積している。一方、河岸部分は現代の耕作土の下には地山層である黄色系粘土層が認められる。また、B③区のように現代の耕作土の下に分厚い造成土が見られる箇所もある。

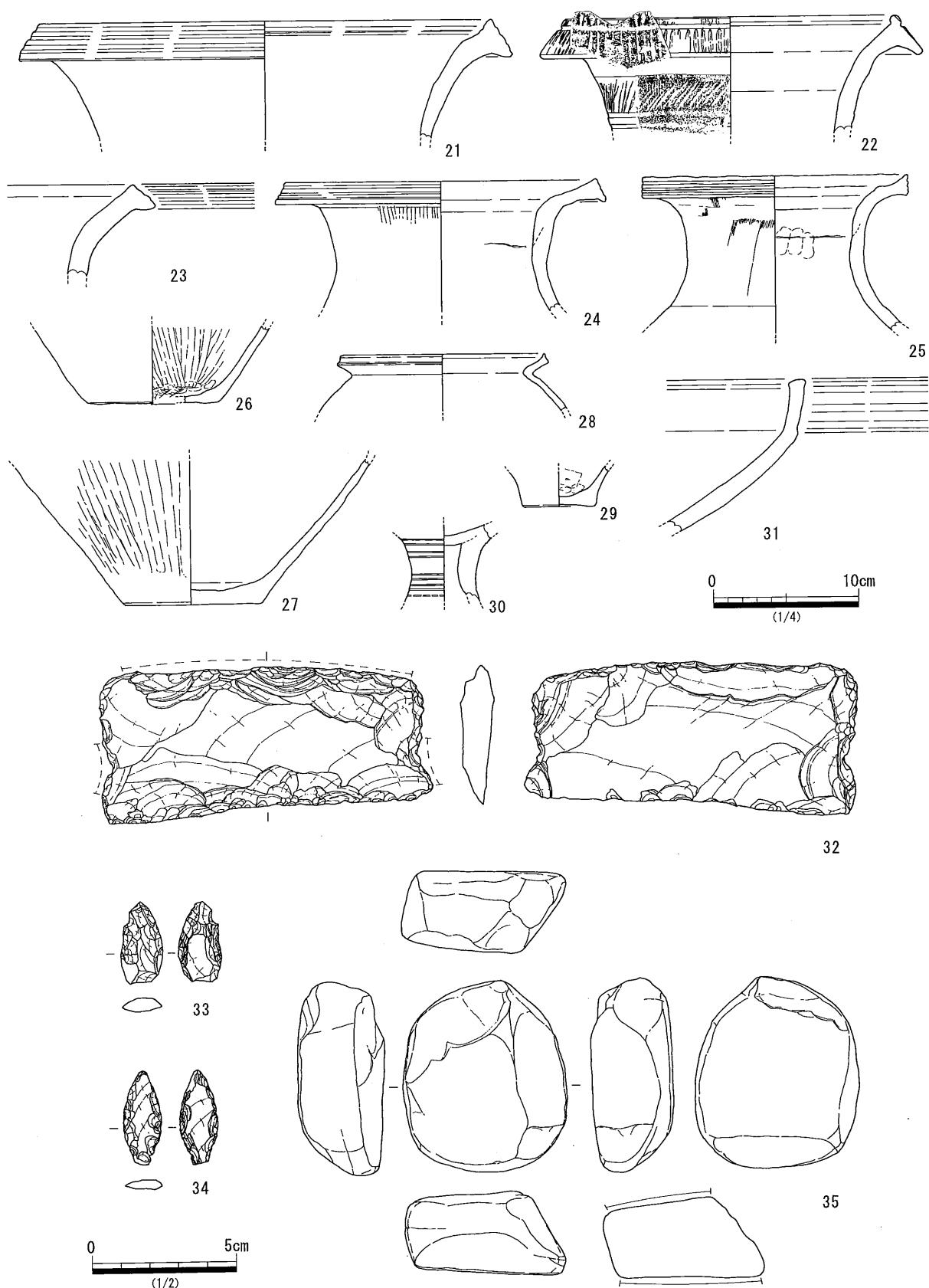
調査の結果、自然河川跡、近世以降の溝状遺



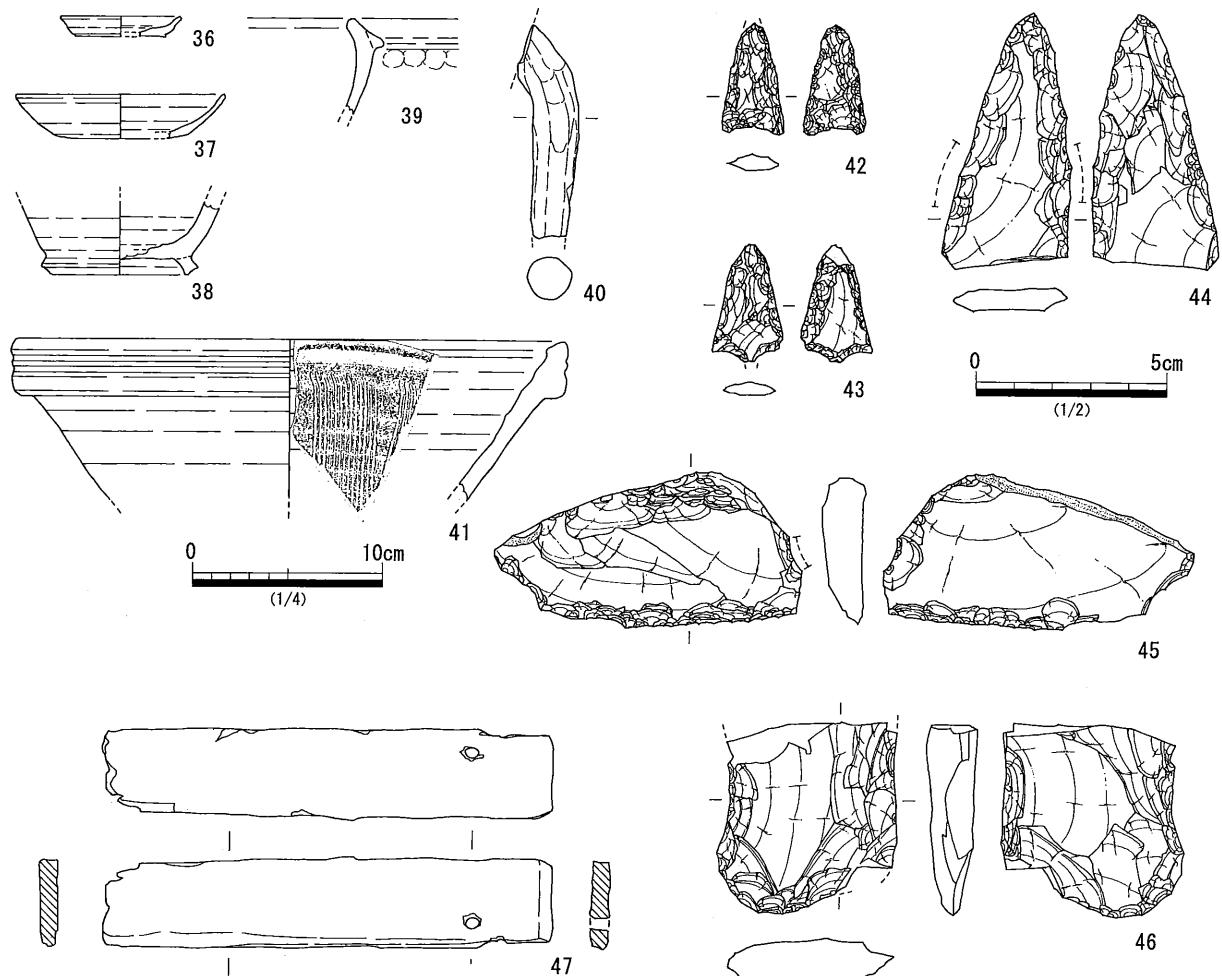
第23図 B調査区遺構配置図(1/300)

第24図 B調査区土層断面図(1/80)





第25図 SR01 上層出土遺物実測図 (1/2・1/4)



第26図 SR01 上層出土遺物実測図(1/2・1/4)

構を検出した。自然河川跡からは弥生時代および中世の土器が出土している。

## 2. 遺構・遺物

### 自然河川

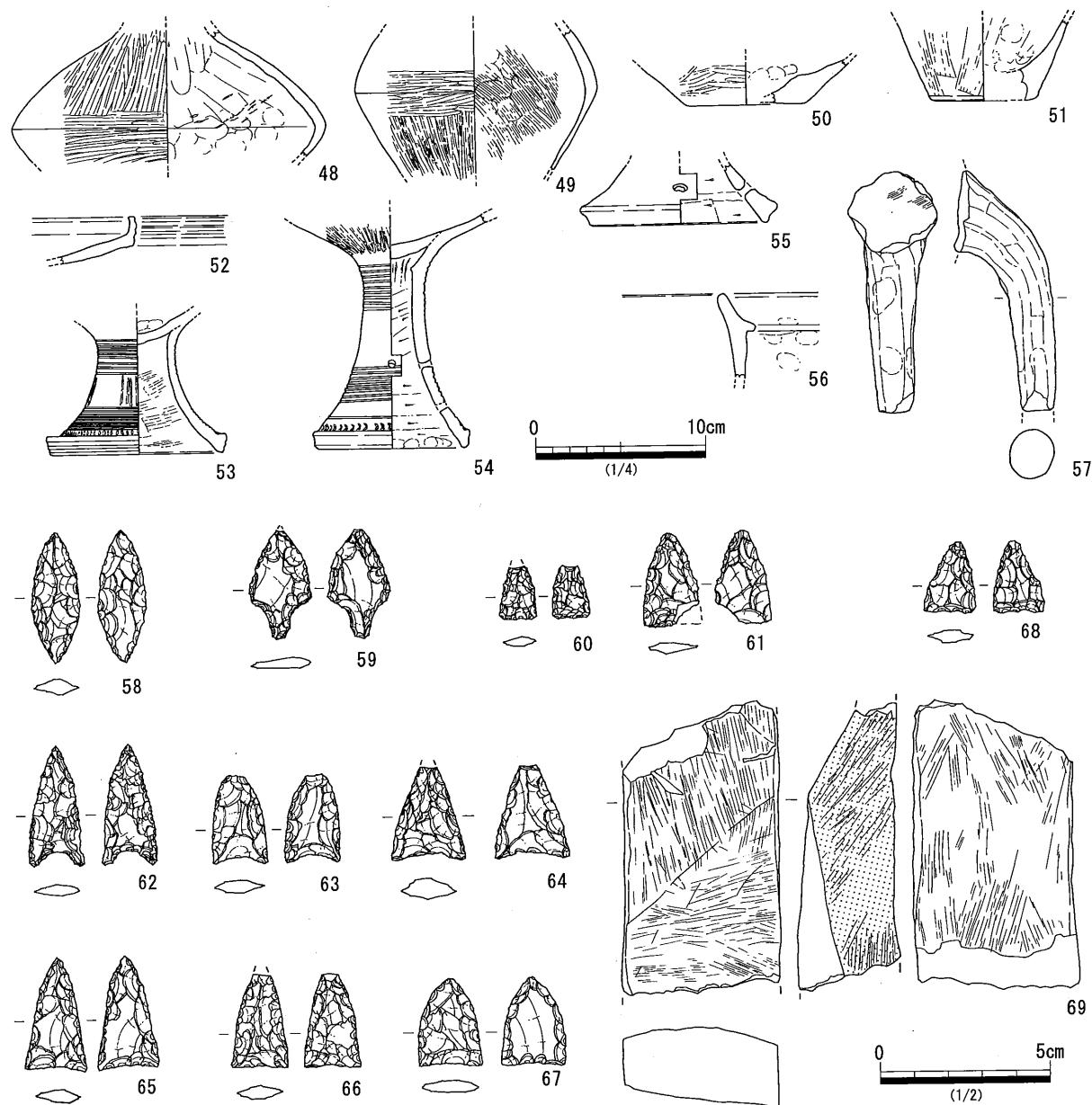
#### SR01 (第23・25・26図)

SR01はB調査区のほぼ全面にわたって検出した自然河川跡である。調査区との対比でいえば、B①・②区全面とB③区西半分が河川域にあたっている。検出長約66.8m、幅7.0m以上、深さ約1.8mの規模を測り、わずかに西方向へ湾曲しながら北から南へ向かって流下している。埋土は大きく二分することができるが、総じてシルト層と砂層が混在して堆積しており、流水と滯水を幾たびも繰り返しながら埋没していく様子がうかがえる。上層の下半部において流路方向に直交する石列を検出している。拳大～人頭大の亜角礫・亜円礫を並べるように置いたものであり、石を組んだ様子はうかがえない。流れを堰き止めるというよりは、対岸に渡るための飛び石的な目的が想定される。検出層位から中世以降の時期が考えられる。

遺物は量的には少ないものの、上層からは弥生土器・石器・中世土器などが、下層からは弥生土器・

石器が出土している。上層から出土した弥生土器や石器は、下層に埋まっていたものが流水などで洗い出され、上層に混入したものであろう。

21～35は下層から出土した遺物である。21～27は弥生土器の壺である。21～25はいずれも口縁端部を上下に拡張して細い凹線文を施している。22は頸部に斜線文を配している。22・24・25は外面にハケ目が認められる。28・29は弥生土器の甕である。口縁端部を鈍く肥厚させつつ摘み出している。口縁部の折り返しは強い。30は弥生土器の高杯である。脚部上半には平行する沈線文が施されている。杯部底面は円盤充填によるものである。31は弥生土器の鉢である。鈍く屈曲して立ち上がる口縁部で、端部をやや肥厚させている。外面には弱い凹線文が施されている。32はサヌカイト製の打製石庖丁である。両端に抉りを入れている。33・34はサヌカイト製の打製石鎌。35は緑色片岩製とみられる砥石である。2面を砥面として使用している。これらは土器の形態から弥生時代中期後半の年代が想定される。



第27図 包含層出土遺物実測図(1/2・1/4)

る。

36～47は上層から出土した遺物である。36は土師器の小皿である。38は須恵器の壺の底部で、ハの字形に外方へ踏ん張る高台を付している。39・40は土師質土器の足釜である。41は備前焼の擂鉢である。これらの土器の形態から13～16世紀の年代が想定される。42～46は石器である。42・43はサヌカイト製の打製石鏸である。42は凹基式、43は凸基式である。44はサヌカイト製の打製石槍である。基部付近の両側縁部に柄を緊縛するための敲打痕が認められる。45はサヌカイト製の打製石庖丁である。46はサヌカイト製の打製石斧で基部を折損している。47は針葉樹製の短冊状の板材である。穿孔が1個認められるもので、何らかの部材の一部であろう。

出土遺物からみて、SR01は弥生時代中期末から中世にかけて、徐々に埋没しながらも機能していた自然河川とみられる。川の規模に対して出土した遺物の量が少ないことから、近辺で人間の営みがあつたことは間違いないが、それは小規模で短期間なものであったとみることができよう。

### 第3節 包含層他の遺物

ここでは、A・B両調査区の遺構以外から出土した遺物を紹介する（第27図）。

A調査区の包含層および現代の搅乱土坑埋土から出土した遺物としては、48～56の土器と58～67の石器がある。48～55は弥生土器である。48は細頸壺の胴部で、外面のヘラミガキ調整が顕著である。49は形態から甕の胴部と判断した。50は壺、51は甕の底部である。52～55は高杯である。52は屈曲して短く立ち上がる口縁部を持つ杯部で、口縁部外面には凹線が施されている。53・54の脚部は多条沈線や垂線、刺突文などをほどこした装飾性の高い脚部である。55はそれらの装飾を配したシンプルな脚部である。いずれも端部を拡張気味に肥厚させている。これらの弥生土器はその形態から弥生時代中期末から後期前半に位置付けられる。56は土師質土器の足釜である。形態から14世紀代のものと想定される。58～61はサヌカイト製の打製石鏸である。58は柳葉形、59は有茎式、60・61は平基式、62～67は凹基式である。これらはその形態や規模などから弥生時代のものと位置付けられるが、60はかなり小型の石鏸であり前代に遡る可能性がある。

B調査区の包含層から出土したのは57の土師質土器足釜の脚と、69の手持ち砥石がある。砥石は安山岩製で、3面を底面として使用している。68はサヌカイト製の打製石鏸で、SR01から出土しているが層位不明なため、ここに掲載した。57と69は中世以降に位置付けられるもので、68は弥生時代のものが混入したのであろう。

## 第4章 まとめ

### 第1節 遺構の変遷

前章ではA・B両調査区の遺構・遺物について説明した。ここではこれらのデータを基に、室塚遺跡の変遷を明らかにしたい。なお、出土遺物がなく直接時期比定ができなかった遺構については検出方位、位置、埋積状況、他の遺構との先後関係を考慮して該当時期を推定したものもある。

#### 第1期 弥生時代後期前半

この時期の遺構は、A調査区では木棺墓7基（註2）・土壙墓5基、土坑1基、溝状遺構3条が、B調査区では谷を流れる自然河川1条があげられる。木棺墓と土壙墓はおおむね尾根の稜線付近に集中して、墓域を形成している。墓の中でも尾根の突端部に位置する木棺墓ST01は溝状遺構SD02・03で区画された方形台状墓の主体部になる可能性がある。この墓域には土器棺墓はみられない。この墓域に葬られた人々の集落は、尾根の東に広がる小盆地縁辺の山裾あたりに存在していたものと思われる。B調査区の自然河川の下層からは弥生時代中期末の遺物が出土しており付近に集落の存在を予感させるが、出土した遺物量の少なさからみて、小規模ないし短期間の集落であったものと思われる。

#### 第2期 古墳時代終末期

この時期の遺構は、A調査区の室塚1号墳があげられる。横穴式石室を内部主体とした周溝を有する方墳である。室塚1号墳に先行する後期古墳が西山山塊や中津山山塊に存在しており、古墳時代後期以降、これらの山は墓域として意識されていたものと思われる。

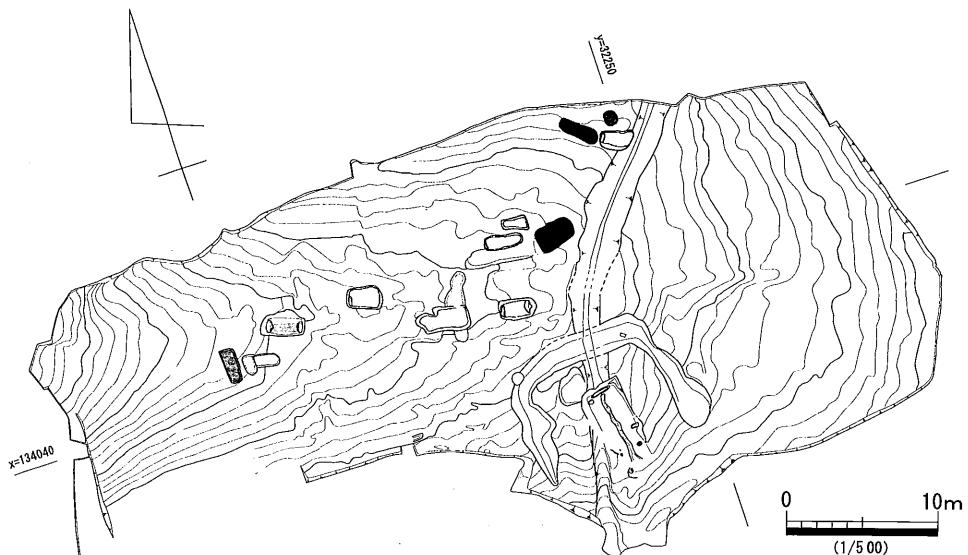
#### 第3期 中世

この時期の遺構には、B調査区の自然河川がある。埋土の上層から少量ではあるが中世の遺物が出土している。また、河川を横切るように並べた石列も見られることから、付近での人の営みが想定される。A調査区の包含層からもわずかに当該期の遺物が出土しているが、遺構は確認できていない。

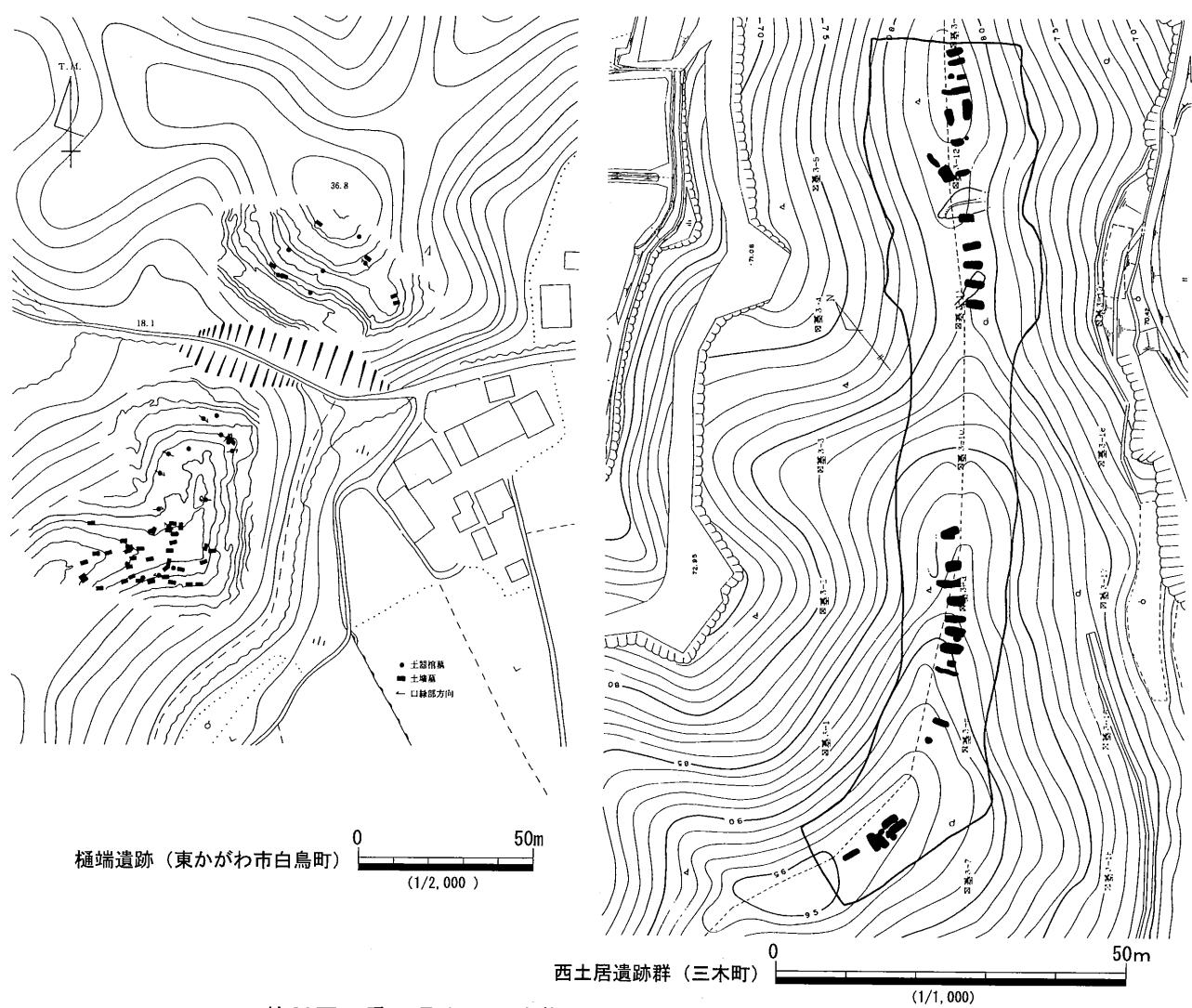
### 第2節 弥生時代後期の墓群について

今回の室塚遺跡の調査では、木棺墓と土壙墓を合わせて12基からなる墓群を検出した。木棺墓ST01は周囲に方形の区画溝を有する方形台状墓の可能性を残すが、それ以外の墓には区画溝やマウンドなどは認められない。これらの墓からはほとんど遺物が出土していないため明確な時期比定が困難である。時期の判明する弥生土器壺が出土したのは木棺墓ST02だけだが、土器は予備調査の際に掘り出されており、埋納状況については判然としない。壺はその形態から、弥生時代後期前半に位置付けられるものである。

一方、墓の分布状況に目を向けると、区画溝の可能性を持つ溝状遺構の埋没後に掘り込まれた木棺墓ST06と土壙墓ST10以外は、重なりあったものは認めらない。このことは重なりあうこれら2基以外の墓が比較的短期間に造営されたことを示すものと理解できよう。



第28図 A調査区墓群主軸方向模式図(1/500)



第29図 香川県内の土壙墓群平面図(1/2,000・1/1,000)

次に墓の主軸方位を見てみる。いずれの墓も頭位の判明したものはないため主軸方向だけでの判断になってしまふが、その方向で大きく3つのグループにまとめることが可能である。Aグループは概ね東西方向の主軸を持つもので、木棺墓ST01・02・04・06・09、土壙墓ST07・10・13の計8基がある。Bグループは概ね南北方向の主軸を持つもので、木棺墓ST12、土壙墓ST05の2基がある。Cグループはそれ以外の方向を持つもので、木棺墓ST11、土壙墓ST08の2基がある。墓域が立地する尾根の稜線方向は概ね東西方向をしており、各グループとの関係は、Aグループが稜線と同じ方向、Bグループが稜線と直交する方向、Cグループはそのいずれでもないものと言い換えることができる。すなわち、A・Bの両グループについては墓の主軸方向は尾根の稜線に規制されていることがわかる。しかも、圧倒的にAグループの方向（=稜線と同じ方向）が多数派を占めていることがわかる。一方のCグループについてであるが、地形を微細に観察すると尾根の稜線はST01のやや東方において北東方向と南東方向に分岐しているようである。この北東に伸びる稜線の方向と木棺墓ST11の主軸はほぼ同じで、土壙墓ST08はほぼ直交する主軸を有していることがわかり、Cグループも尾根の稜線の方向に規制されていると言うことができよう。A・Cグループでは尾根稜線の方向が異なることを除けば、室塚遺跡の墓12基は、尾根稜線に並行するもの9基、直交するもの3基で、稜線方向に並行するものが多数を占めるという傾向が窺える。副葬遺物がほとんど見られないという資料的な制約から、これらが時間的な先後関係を示すものなのか、別の原理に基づくものなのかを現状で判断する資料はない。

ほぼ同時代の土壙墓群が調査された例として、東かがわ市白鳥町の樋端遺跡と木田群三木町の西土居遺跡群がある。樋端遺跡では、南北2つの丘陵の互いに向かい合う尾根や斜面上に土壙墓と土器棺墓で構成される弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての墓域が2つ見つかっている。北丘陵の墓域は土壙墓と土器棺墓が場所を分離しながら作られていたものが次第に混在して存在するようになるという傾向が、一方、南丘陵では土器棺墓の造営後に土壙墓が造営されるという傾向がうかがえ、造墓意識の違いが存在することが指摘されている。土壙墓の主軸方向をみると、北丘陵では尾根上のものは稜線直交方向、斜面のものは等高線に並行する方向を、南丘陵では尾根稜線と並行する方向を志向する傾向がうかがえる。言い換えれば北丘陵では稜線直交方向（=等高線並行方向）優位、南丘陵では稜線並行方向が優位ということである。なお、土器棺墓の主軸（口縁部）方向に規則性は認められないようである。

西土居遺跡群では、南西から北東方向へ伸びる丘陵尾根上に土壙墓と土器棺墓で構成される弥生時代後期の墓域が見つかっている。墓域はそのまゝりから3つのグループに分けることができ、その主軸方向は、南のグループ（報告書のC群）では稜線に並行方向と直交方向がほぼ半々、中のグループ（報告書のB群）ではほぼすべてが稜線直交方向、北のグループ（報告書のA群）では稜線に直交方向が大多数を占めるという状況である。南のグループと、中・北のグループでは尾根方向が屈曲しているが、それぞれのグループが立地する場所での稜線の方向に対して並行・直交していることから、稜線の方向が強く意識されていたことは間違いないだろう。

以上、3つの遺跡の墓域の観察から、弥生時代後期から古墳時代初頭の墓域の造営に際しては稜線の方向という地形的な方向性が強く意識されたことが見えてきた（註3）。これを一つの視点として、稜線並行・直交の違いや両者が混在する場合の背景を解明して行くことが、今後の課題と言えるだろう。

### <註>

- 註1： 敷石南端の西側に据え付け穴が見られないのは、柱状の石材を立てて使用しなかったからであろう。玄門部側壁の片側には柱状の石材を立てて使用し、反対側は側壁同様に石材を小口積みで築く例は神越2号墳（さぬき市白鳥町）などの例がある。
- 註2： 木棺墓のうちST03からは鉄釘が1本出土している。現在のところ弥生時代の木棺に鉄釘の使用例はないため、ST03は古墳時代以降に属する可能性がある。年代の判明する遺物が出土していないため、ここでのカウントからは外している。
- 註3： 穂線の方向は尾根によってまちまちであり、巨視的に見た場合には墓の主軸方向に統一性は見えてこないはずであり、弥生時代後期の墓の主軸は小地域によるまとまりはあっても、香川県全体で見た場合はばらばらであろう。一方、香川県の前期古墳は埋葬主体部の方向が圧倒的に東西方向優位という地域性が知られている。とすれば、弥生時代後期の墓（特に墳丘墓の主体部）に東西方向を志向するものが小地域のまとまりを越えて出現してきた段階に、何らかの社会的・政治的な動きがあったといえないだろうか。

### <参考文献>

- ・香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第43冊 横端遺跡』2002.12
- ・香川県教育委員会『一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 羽間遺跡』2007.3
- ・香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター他『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』2000.3
- ・香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター他『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成12年度』2001.3
- ・満濃町・満濃町誌編さん委員会・満濃町誌編集委員会『新修 満濃町誌』2005.5
- ・三木町教育委員会『西土居遺跡群』2003.3

## 遺物観察表・土器

報文番号	遺構名	種類	器種	色調				胎土				法量			調整		内部		残存率	備考
				外面		内面		石漠・ 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	その他 (cm)	外部			
1	ST02	弥生土器	壺	赤褐色 (5YR4/6)	淡黃色 (2.5Y8/4)	中・並				中・並			—	4.5	—	4.5	—	指揮え→ヘラケ ガキ・板ナデ	6/8	外面に黒斑
4	SK01	弥生土器	高杯	橙色(5YR7/6)	橙色(5YR6/6)	中・並				細・少			—	—	9.3	—	—	ヘラミガキナデ ナデ・ミコナデ	8/8	円盤充填、磨滅 が著しい、一部 が自然形
8	石室	塞塚1号墳 石室	須恵器	壺	灰色(N6/)	灰色(N6/)					中・多	9.1	25.1	9.3	—	—	回転ナデ・ヘラ ケスリーナデ	回転ナデ	7/8	ほぼ自然形、一部 に付着
9	塞塚1号墳 石室	須恵器	壺	灰色(N6/)	灰白色(5Y7/1)					中・多	(15.6)	—	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	6/8	内外面に自然釉 が付着
10	塞塚1号墳 石室	須恵器	壺	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)					細・少	13.0	24.5	—	—	—	回転ナデ・叩き 目一カキ目	回転ナデ・当て 具良	7/8	ほぼ完形	
11	塞塚1号墳 石室	須恵器	蓋	灰色(N6/)	灰色(N6/)					粗・多	16.3	2.85	—	—	—	回転ヘラ削り・ 回転ナデ	回転ナデ	8/8		
12	塞塚1号墳 周溝	須恵器	皿	灰色(N6/)	灰色(N6/)					中・少	—	—	(13.0)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	1/8		
14	SR01下層	弥生土器	壺	灰黄色 (2.5Y7/2)	黒色(5Y2/1)	中・多	細・並				(21.2)	—	—	—	—	—	磨滅(ハケメ)	磨滅	2/8	内面に黒斑、磨 滅が著しい
21	SR01下層	弥生土器	壺	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	粗・多	中・少				(31.0)	—	—	—	—	—	ヨコナデ・磨滅	磨滅	2/8	端部に凹線文
22	SR01下層	弥生土器	壺	灰褐色 (7.5YR5/3)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	中・並				細・少		(22.4)	—	—	—	—	ヨコナデ・ハケ メ→ナデ	ヨコナデ	1/8	端部と腹部に刻 目、凹線文
23	SR01下層	弥生土器	壺	灰黃褐色 (10YR6/2)	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	中・多					—	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	破片		
25	SR01下層	弥生土器	壺	灰黃色 (2.5Y7/2)	灰白色 (10YR8/2)	粗・多						(18.0)	—	—	—	—	磨滅(ハケメ)	磨滅(板ナデ)	2/8	
26	SR01下層	弥生土器	壺	明黄褐色 (10YR7/6)	明褐色 (7.5YR6/6)	中・多	粗・少					(9.0)	—	—	—	—	ヨコナデ・ハケ メ	ヨコナデ	1/8	
27	SR01下層	弥生土器	壺	灰黄色 (2.5Y7/2)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗・多					—	—	9.6	—	—	ヘラミガキ	磨滅	8/8	磨滅が著しい	
28	SR01下層	弥生土器	甕	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	中・並	中・少					(14.0)	—	—	—	—	磨滅	磨滅	2/8	磨滅・剥落が著 しい
29	SR01下層	弥生土器	甕	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	中・並					—	—	4.8	—	—	指揮え→板ナデ	接合部 磨滅	8/8	磨滅が著しい	
30	SR01下層	弥生土器	高杯	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR6/6)	中・並	中・並				—	—	—	—	—	接合部 磨滅	磨滅	8/8	磨滅・剥落が著 しい、円盤充填	
31	SR01下層	弥生土器	鉢	橙色(5YR6/8)	灰黃褐色 (10YR8/2)	中・多	中・並				—	—	—	—	—	ヘラ刃	回転ナデ	破片		
36	SR01上層	土師器	小皿	灰黃褐色 (10YR6/2)	灰黃褐色 (7.5YR8/4)					細・少	(6.2)	1.1	(4.7)	—	—	回転ナデ・回転	回転ナデ	3/8	外面に鉄分が沈 着	
37	SR01上層	土師器	杯	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)					細・少	(11.0)	2.3	(6.0)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	2/8		
38	SR01上層	須恵器	壺	灰色(N6/)	灰色(N4/)					細・少	—	—	(7.0)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	3/8		
39	SR01上層	土師質土器	土釜	明黄褐色 (10YR6/6)	灰白色 (2.5Y8/2)					中・多	—	—	—	—	—	ヨコナデ・指揮 え→ナデ	ナデ	破片		
40	SR01上層	土師質土器	足金	明黄褐色 (10YR6/6)	灰白色 (2.5Y8/2)					中・多	—	—	—	—	—	直径 2.4	ナデ・板ナデ	6/8	磨滅が著しい	
41	SR01上層	陶器	すり鉢	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)					粗・少	(29.0)	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	2/8	御し目は13条で 1単位	
48	A区包含層	弥生土器	細頸壺	橙色(5YR6/6)	灰オリーブ色 (5Y6/2)	細・少				細・少	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	押え→板ナデ	2/8		

遺物観察表・土器

報文番号	遺構名	種類	器種	色調			胎土			法量			調整		内部	残存率	備考	
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)				
49	A区包含層	弥生土器	壺	にふい橙色 (7.5IR7.4)	橙色 (7.5IR7.6)	細・並				—	—	—	頭径 (14.2)	ヘラミガキ	ハケメ	2/8	外面に黒斑・直 口縁か?	
50	A区包含層	弥生土器	壺	明赤褐色 (5IR5.6)	明赤褐色 (5YR5.6)	中・並				—	—	(7.0)	—	ヘラミガキ・ナ デ	指押え→ナデ	3/8		
51	A区包含層	弥生土器	甕	にふい薄橙色 (10YR6.4)	薄灰色 (10YR5.1)	中・並	粗・少	細・少		—	—	(6.0)	—	ハケメ・ナデ	板ナデ	2/8	磨滅が進む。	
52	A区包含層	弥生土器	高杯	明赤褐色 (5IR5.6)	橙色 (7.5IR6.6)	細・多		細・少		—	—	—	—	磨滅		2/8	凹線文・磨滅が 進む。	
53	A区包含層	弥生土器	高杯	橙色 (7.5IR6.6)	橙色 (7.5IR6.6)	中・並		細・多		—	—	10.1	—	ナデ	ナデ・板ナデ	8/8	沈線文・凹線文 円盤充填・穿孔・ 刺突文	
54	A区包含層	弥生土器	高杯	橙色 (7.5IR6.6)	橙色 (7.5IR6.6)	細・少				—	—	(8.6)	—	ヘラミガキ・ナ デ・ヨコナデ	指押さえ・絞り	1/8	目・ヘラケズリ	
55	A区包含層	弥生土器	高杯	黄灰赤色 (2.5Y4.1)	黄橙色 (10YR8/6)	中・並				—	—	(10)	—	磨滅	ヘラケズリ	2/8	外間に黒斑・磨 滅・剥落が著し く。	
56	A区包含層	土師質土器	土釜	橙色 (7.5IR6.6)	橙色 (7.5IR6.6)					中・多	—	—	—	—	ナデ・指押え→ ナデ	ナデ	2/8	
57	B区包含層	土師質土器	足釜	橙色 (7.5IR7/6)	浅黄橙色 (10YR8/4)					粗・多	—	—	—	直径 2.9	ナデ・板ナデ	ナデ	6/8	磨滅が進む。

遺物観察表・鉄器

報文番号	遺構名	器種	法量	法量			材質	鍛金	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)			
2	ST03	釘	37	14	6.5	—	鉄	なし	頭部を欠損
13	室塚1号墳石室	釘	69	18	7	—	鉄	なし	途中で折れ曲がる
14	室塚1号墳石室	釘	70	20	8	—	鉄	なし	頭部を欠損
15	室塚1号墳石室	釘	61	11	7	—	鉄	なし	先端部を欠損
16	室塚1号墳石室	釘	54	14	6	—	鉄	なし	頭部と先端部を欠損
17	室塚1号墳石室	釘	49	11	6	—	鉄	なし	先端部を欠損
18	室塚1号墳石室	釘	29	6	4	—	鉄	なし	先端部を欠損
19	室塚1号墳石室	釘(曲刃)	41	5	6	—	鉄	なし	鋸による表面の剥落・荒れが著しい、 先端部を欠損
20	室塚1号墳石室	鍼(曲刃)	163	35	5	—	鉄	なし	

遺物観察表・木器

報文番号	遺構名	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	燃種	木取り	紐目	穿孔1つあり	備考
47	SR01上層	板材	11.8	2.4	0.5	金葉樹				

遺物観察表・石器

報文 番号	遺構名	器種	法量			材質	備考
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)		
3	ST04	石鏃	27.2	14.5	3.9	1.4	サヌカイト 平基式・完形
5	SD02	石鏃	44.0	18.0	3.5	2.8	サヌカイト 回基式・先端部を欠損・風化が進む
6	SD02	石鏃	37.0	18.0	5.0	3.6	サヌカイト 回基式・先端部を欠損
7	SD02	石鏃	19.0	12.0	3.0	0.5	サヌカイト 回基式・基部の一部を欠損
32	SRO1下層	石庖丁	115.0	53.0	11.0	94.1	サヌカイト 刃部調整は片側のみ(未製品か)
33	SRO1下層	石鏃	28.0	14.0	5.0	1.9	サヌカイト 平基式・側縁の一部を欠損
34	SRO1下層	石鏃	32.0	13.0	3.0	1.5	サヌカイト 有茎式・基部の先端を欠損
35	SRO1下層	磨り石	99.0	84.0	41.0	582.8	緑色片岩? 部分的にあちこちの面を使用
42	SRO1上層	石鏃	29.0	17.0	4.5	1.8	サヌカイト 回基式・先端部を僅かに欠損
43	SRO1上層	石鏃	31.0	19.0	3.5	1.8	サヌカイト 凸基式・先端部を欠損
44	SRO1上層	石槍	67.5	33.5	7.0	17.1	サヌカイト 下半部に僅かな磨耗痕あり
45	SRO1上層	スクリーバー	81.5	41.0	12.0	40.4	サヌカイト 自然面を残す・石包丁の転用品か
46	SRO1上層	石斧	46.0	46.0	11.0	35.6	サヌカイト 基部を欠損・部分的に強い磨耗痕が残る
58	A区包含層	石鏃	38.0	13.0	4.5	2.0	サヌカイト 切妻形・完形
59	A区包含層	石鏃	32.0	18.0	3.0	1.5	サヌカイト 有茎式・先端を僅かに欠損
60	A区包含層	石鏃	16.0	11.0	3.0	0.5	サヌカイト 平基式・基部の一部を欠損・風化が進む
61	A区包含層	石鏃	27.0	15.0	3.5	1.3	サヌカイト 平基式・基部の一部を欠損
62	A区包含層	石鏃	34.0	16.0	3.0	1.5	サヌカイト 切妻形・側縁の一部を欠損
63	A区包含層	石鏃	26.0	16.0	3.5	1.6	サヌカイト 切妻形・完形
64	A区包含層	石鏃	27.0	21.5	6.0	2.7	サヌカイト 回基式・先端部を欠損
65	A区包含層	石鏃	33.5	18.6	4.0	2.2	サヌカイト 回基式・完形
66	A区包含層	石鏃	27.5	17.0	4.0	1.7	サヌカイト 回基式・先端の一部を欠損
67	A区包含層	石鏃	25.5	18.0	3.5	1.8	サヌカイト 回基式・完形
68	SRO1層位不明	石鏃	21.0	16.0	3.0	0.9	サヌカイト 回基式・完形・風化が進む
69	B区包含層	砥石	85.0	46.0	23.0	151.4	安山岩 棒状・両端を欠損・底面は1面



一般国道319号善通寺バイパス建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊

## 生野原遺跡



## 第1章 調査に至る経緯と経過

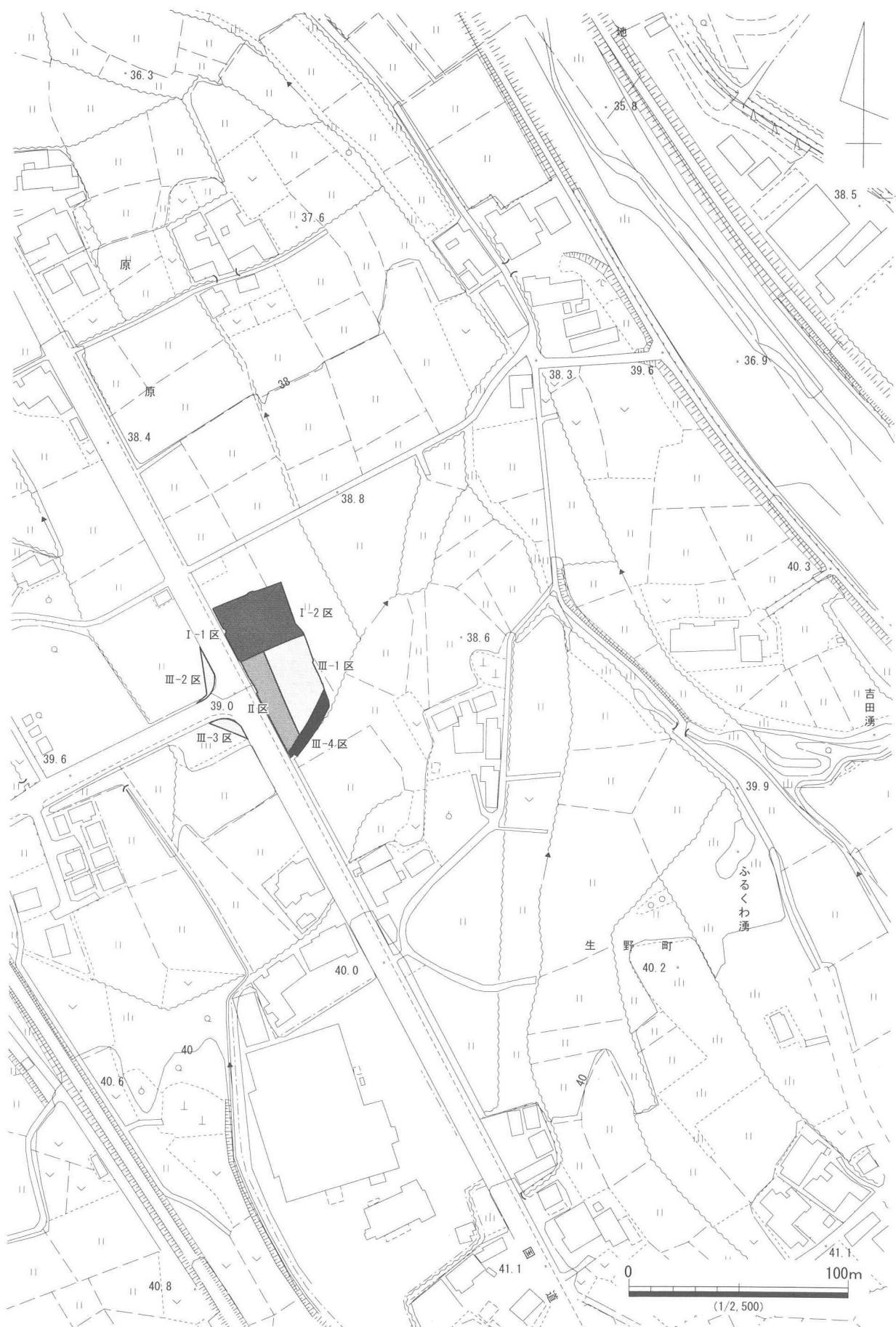
### 第1節 調査に至る経緯

一般国道319号は坂出市を基点とし、善通寺市、琴平町を経由して四国中央市にいたる延長63kmの幹線道路であるが、現存の国道では交通量の増加により慢性的な渋滞が生じている。こうした交通状況を緩和するために、国土交通省四国地方整備局により善通寺市原田町から善通寺市大麻町まで延長7.5kmについて善通寺バイパスの改良工事が計画された。

これを受けた香川県教育委員会では、同路線の周辺に多数の埋蔵文化財包蔵地が所在しているため、協議を進め適宜、保護措置を実施してきた。今回の調査地周辺にも弥生時代、中世の集落跡や古墳群などが周知されていることや当該地の地形なども考慮に入れて、埋蔵文化財の有無を確認するために平成15年6月に試掘調査を実施した。その結果、当該地において弥生時代、古墳時代の遺構・遺物を確認し、当該期の集落跡の存在が予想された。この結果に基づき、2,317m<sup>2</sup>の範囲について文化財保護法に基づく適切な保護措置を講ずる必要があると判断した。このため香川県教育委員会と国土交通省四国地方整備局香川工事事務所が協議を行い、この範囲について発掘調査を実施することで合意した。



第1図 遺跡位置図



第2図 調査区位置図(1/2,500)

## 第2節 調査の経過

発掘調査は試掘調査の結果を受けて平成16年に本調査を実施することになり、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。調査は平成16年10月1日に着手し、平成17年1月31日に終了した。

調査地は調査工程に従い、第2図のようにI区からIII区の調査区設定した。また各調査区名にはさらに1、2という小区画名に細分して調査を実施した。（I-2区など。）本報告でも必要に応じてこの小調査区名を使用している。

## 第3節 整理作業の経過

出土品の整理作業は平成19年6月1日～7月31日までの2ヶ月間で実施した。

作業は出土品の多数を占める古墳時代土師器の図化を中心として、原稿執筆、遺物復元、実測遺物抽出、遺物実測、遺構・遺物図面トレース、遺物写真撮影、台帳整理、収納の順序で進行した。

## 第4節 発掘調査及び整理作業の体制

平成16年度の発掘調査及び平成19年度の整理作業の体制は以下のとおりである。

### 平成16年度（調査）

文化行政課		香川県埋蔵文化財センター					
総括	課長	北原 和利	総括	所長	中村 仁		
	課長補佐	森岡 修		次長	渡部 明夫		
総務	主任	香川 浩章	総務課	課長	野保 昌弘		
	主任	堀本 由紀		係長	松崎日出穂		
	主任主事	八木 秀憲		主査	塩崎かおり		
埋蔵文化財	課長補佐	大山 真充	調査課	課長	藤好 史郎		
	主任	山下 平重		主任技師	長井 博志		
	文化財専門員	松本 和彦		主任技師	新谷 政徳		
				調査技術員	宮武 直人		

### 平成19年度（整理）

生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター					
総括	課長	鈴木 健司	総括	所長	渡部 明夫		
	課長補佐	武井 壽紀		次長	廣瀬 常雄		
総務	副主幹	古田 泉	総務課	課長	野口 孝一		
	主任	林 照代		主任	宮田久美子		
	主任	植松 隆		主任	嶋田 和司		
	主任主事	高橋 未央		主任	古市 和子		
	主任主事	西本 優子	資料普及課	課長	廣瀬 常雄	（調査課長兼務）	
文化財	課長補佐	藤好 史郎		文化財専門員	長井 博志		
	副主幹	林 文夫		嘱託	葛西 薫		
	主任	白井 洋二			加藤 恵子		
	文化財専門員	森 格也			川井 佐織		
	文化財専門員	信里 芳紀			北濱 敦子		
					工藤 勇太		

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

生野原遺跡は善通寺市生野町に所在する。善通寺市は香川県の西部に位置するが、地形について大きく見ると南端、西端部に山塊や独立丘陵が連なり、その北側と東側には平野が広がる。これらの地形を細かく見ると山塊、丘陵については南側で大麻山が、西側では我拝師山などの独立丘陵群がそびえており、西から南側にかけて接する三豊市三野町、高瀬町と地形的に画される。なお、我拝師山から北東へは同じく独立丘陵である筆ノ山、香色山が並び、平野に迫り出す。

次いで平野であるが、これは県下で最大規模をもつ丸亀平野の南西部に当たる。この平野は弘田川、金倉川、土器川の沖積作用によって形成されており、3河川はいずれも北流し瀬戸内海へ注ぐ。このうち、善通寺市域を流下するのは東側の金倉川と西側の弘田川の2つである。金倉川はほぼ直線的な流路をとるが、現在の地割でも近接した位置に大きな旧河道の痕跡が見られる。また弘田川は南方にある大麻山と南西方に位置する我拝師山、筆ノ山、香色山の間を北東方向へ流下した後、平野に面した香色山の麓で流路を北西へ変える。なお丸亀平野では生野原遺跡の付近も含めて広域に渡り条里型地割を確認できる。

### 第2節 歴史的環境

#### 〈縄文時代〉

永井遺跡（1）では縄文時代後期中葉から晩期前半の旧河道を検出し、多量の土器、石器、植物遺体が出土した。このうち石器では多量の打製石斧と一定量の磨り石・石皿が、植物遺体では多量のイチガシが見られる。よって生業において根茎類とドングリ類の採集が占める割合が高かったと考えられる。

また、稻木遺跡（2）では旧河道より縄文時代晩期の土器が出土している。

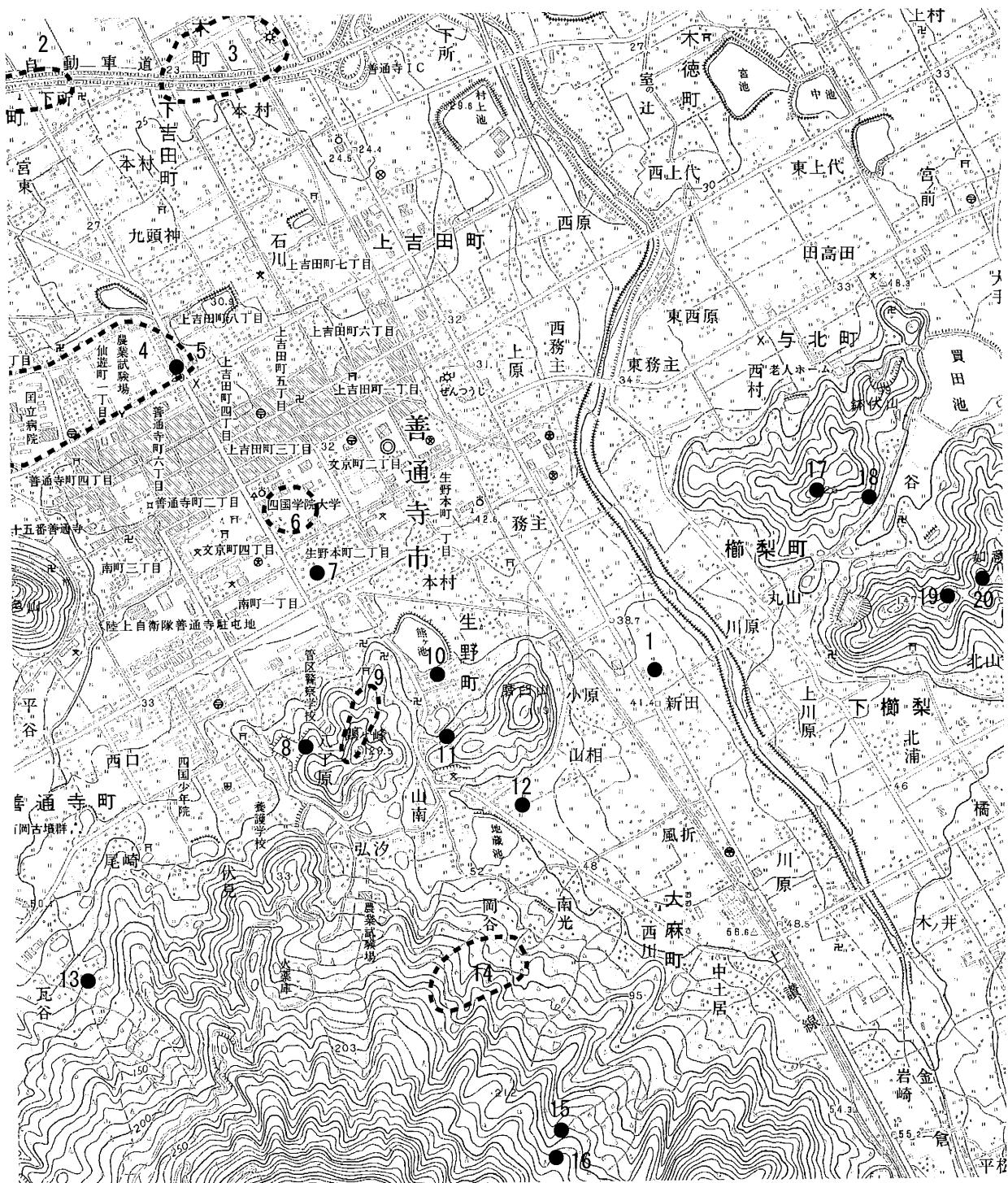
#### 〈弥生時代〉

前期から中期初頭には旧練兵場遺跡（3）や山南遺跡（4）で少数の遺構や遺物が見られる。

中期中葉にはこの地域の拠点的大集落である旧練兵場遺跡において集落が形成され始め、以後終末期まで存続する。また稻木遺跡、山南遺跡などでも弥生後期の集落跡が確認されており、特に後期後半以降では多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土器棺墓などが検出されている。なお、与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・中細形銅剣5口・中細形銅矛1口の計8口が出土している（5）これらのこととはこの地域の繁栄を示す1つの傍証である。

#### 〈古墳時代〉

生野原遺跡で確認した遺構、遺物の多くが属する時期である。集落と古墳に大別し、時期を追って説明する。まず集落については古墳時代前期の状況は不明瞭である。だが、旧練兵場遺跡の南にある善通寺西遺跡（6）ではこの時期の旧河道より多量の土器や木製品が出土している。古墳時代中期には旧練兵場遺跡で竪穴住居跡により構成される集落跡が見られる。竪穴住居跡は径5～6mを測る方形プランでカマドをもつものも含まれる。住居跡の中には滑石製の勾玉、管玉、臼玉などが出土するもある。古墳時代後期にはやはり旧練兵場遺跡で多数の竪穴住居跡が形成される他、その一角にある仲村廃寺（7）、稻木遺跡、四国学院大学構内遺跡（8）でも集落が形成される。



番号	遺跡名
1	生野原遺跡
2	永井遺跡
3	稻木遺跡
4	旧練兵場遺跡
5	伝導寺跡(仲村魔寺)
6	四国学院大学構内遺跡
7	生野本町遺跡
8	鶴峰4号墳
9	鶴峰古墳群
10	生野罐子塚古墳

番号	遺跡名
11	磨臼山古墳
12	山南遺跡
13	瓦谷遺跡
14	南光古墳群(岡・岡谷古墳群)
15	椀貸塚古墳
16	大麻山経塚古墳
17	与北城跡
18	陣山遺跡
19	櫛梨山城跡(日の出城跡)
20	如意山遺跡

第3図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

次に古墳についてであるが、善通寺市内では非常に多数が確認されている。特に有岡地区（北部を香色山・筆ノ山・我拝師山によって、南部を大麻山により挟まれた地区）では前期から後期にかけての前方後円墳が集中する。こうした古墳の基数や首長墓群の様相からは弥生時代以来の繁栄が継続された状況がうかがえる。時期を追ってその内容を見ると、前期には磨臼山古墳、野田院古墳（9）などが築かれる。前者は全長49mの前方後円墳で後円部からは剖抜式石棺が出土している。後者は大麻山の中腹に築造されている。これは前方部が盛土、後円部が積み石により形成されるという特異な構造をもつ。大麻山東麓には同じく積石塚である椀貸塚古墳も位置する。中期には生野罐子塚古墳や鷺井神社古墳（10）などが築かれる。ただ、埋葬施設などに関する詳細は不明である。後期には県内最古の横穴式石室をもつ王墓山古墳（11）が形成される。全長46mの前方後円墳であり横穴式石室内には石屋形が作り出されている。

#### 〈古代〉

生野原遺跡より北東に約1.2kmの位置に生野本町遺跡（12）がある。ここでは大型建物群が溝状遺構により区画された約55mの範囲内に企画性、計画性をもって配置、構築されており、多度郡衙の可能性が指摘されている（13）。遺跡の存続期間は7世紀後葉～8世紀前葉であり、丸亀平野において条里型地割が形成された7世紀末～8世紀初頭と時期的に近接する。

#### 〈中世〉

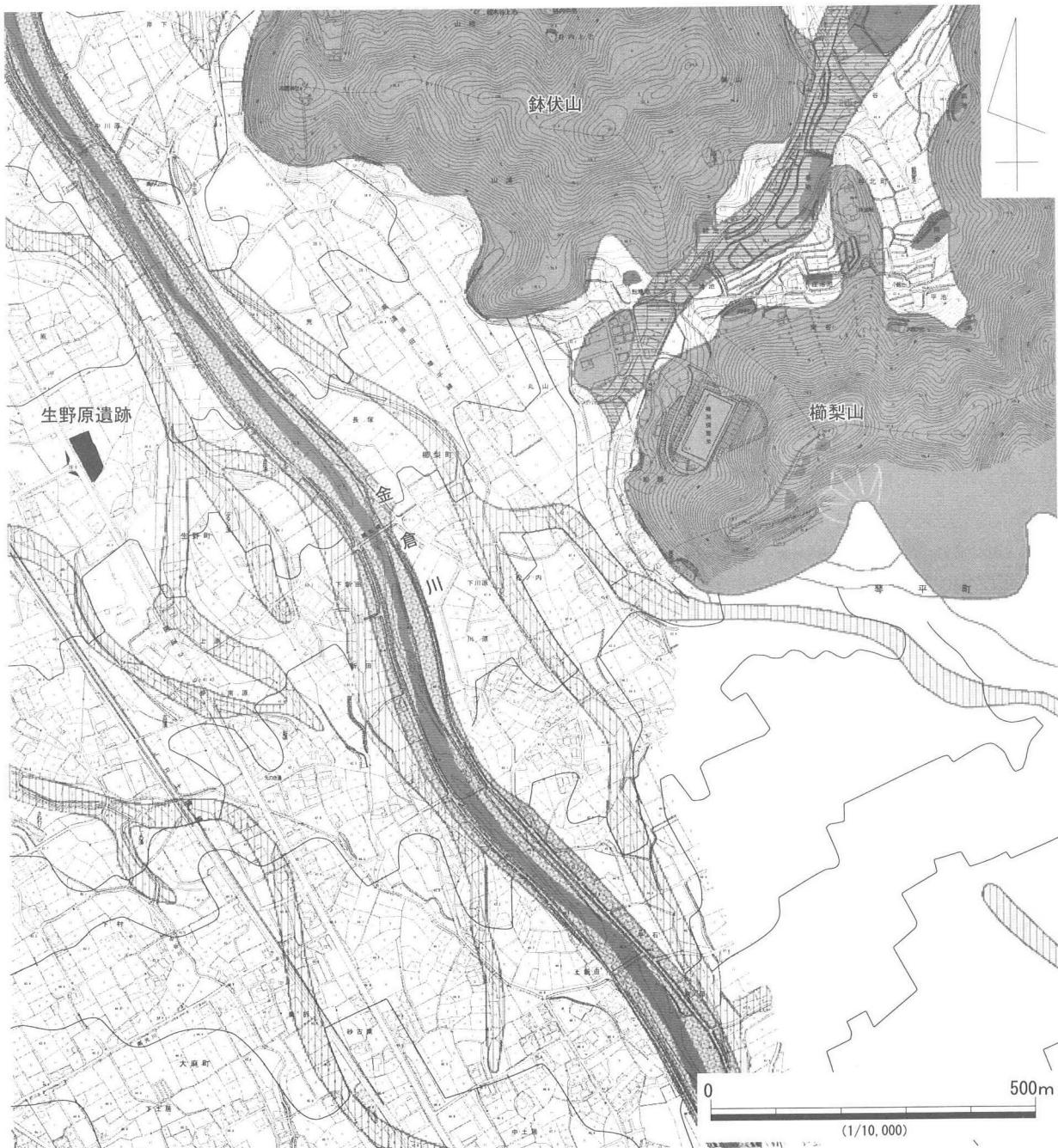
山南遺跡で12世紀～14世紀代に位置づけられる集落跡が見られる。検出された掘立柱建物跡、溝状遺構などは条里型地割に規制された主軸方向をとる。また生野原遺跡に近接する丘陵頂部に位置する与北城跡（14）、櫛梨山城跡（15）は中世城館である。

- (1) 渡部明夫『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊 永井遺跡』 香川県教育委員会（1990）
- (2) 西岡達哉『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 稲木遺跡』 香川県教育委員会（1989）
- (3) 信里芳紀他 「旧練兵場遺跡」『香川県埋蔵文化財センターワン報 平成16年度』 香川県埋蔵文化財センター（2005）
- (4) 真鍋昌宏『県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 山南遺跡』 香川県教育委員会（2003）
- (5) 松本敏三・岩橋孝『讃岐青銅器図録』瀬戸内海歴史民俗資料館（1983）
- (6) 『新編香川叢書考古編』 香川県教育委員会（1983）
- (7) 笹川龍一『仲村廃寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』 善通寺市教育委員会（1989）
- (8) 海邊博史『四国学院大学構内遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会（2003）
- (9) 笹川龍一他『史跡有岡古墳群（野田院古墳）保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会（2003）
- (10) 笹川龍一『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 青龍古墳発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会（1994）
- (11) 笹川龍一『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会（1992）
- (12) 國木健司『生野本町遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会（1993）
- (13) 佐藤竜馬『生野南口遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会（2003）
- (14) 『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』 香川県教育委員会（2003）
- (15) 註14文献に同じ

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 遺跡の立地と地形（第4図）

生野原遺跡では主に古墳時代中期の遺構、遺物が確認された。よって当時の旧地形について現地形、調査区内の微地形と遺構面レベル（I 区の遺構検出面は古墳時代中期と中世以降の2面あるが、以下の第1節内で単に「遺構面」と記載しているのは古墳時代中期遺構面を指す。）、旧河道の分布から検討する。



第4図 周辺微地形図(1/10,000)

## 遺跡の立地と現地形

生野原遺跡は善通寺市生野町に所在する。遺跡の西約300mの位置には磨臼山が、東約500mの位置に櫛梨山があり、2つの独立丘陵に挟まれている。そして2つの丘陵間には金倉川が北流（遺跡からは東へ約250mの位置）している。このように遺跡の立地は川が東西方向へ流路を変えられる範囲に制約がある位置にある。実際に遺跡の西側、南側では地割の乱れという形で複数の旧河道の痕跡が見られ、不安定な環境にあったことがうかがえる。だが、一方で遺跡の北側には条里型地割も確認でき、ある時期からは開発が進んだことも読み取れる。また遺跡周辺の現地形は金倉川により形成された沖積低地であり、地表面レベルは概ね東西方向には東へ、南北方向には北へ緩く下っている。

## 調査区内の微地形と遺構面レベル

大局的には調査区内の微地形は北側の谷地形と南側の平坦地の2つに区分できる。まず谷地形であるが、範囲を詳しく見るとI区で北西部を除く全体、II区では北端部、III-2区ではほぼ全体、III-3区で全体が該当する。土層断面でこれを確認するとI区北壁土層断面ではI-2区部分の西端で遺構面の落ちこみが、I・II区西壁土層断面でもI区部分の中央あたり、III-2区トレンチでは中央部で同じく落ちこみが見られる。これらはいずれも谷地形の北側の落ちである。これに対応する南側の落ちは北側より不明瞭であるが、I・II区西壁土層断面のII区西壁①の部分で緩やかに北へ下っている箇所が該当する。このように上記の範囲において大きな深い谷地形の存在がうかがえる。

その形成についてはI区の下層確認のため掘削したI-④、⑦、⑧トレンチ土層断面を使って説明する。これらの断面を見ると遺構面より約50cm下位に灰色砂礫が堆積している。この層はII、III区間の下層確認南北トレンチの土層断面（写真28）でも見られ、調査対象地全域に広がる。その性格は金倉川に近接する位置で検出した砂礫層であることから金倉川の旧河道堆積層であると考えられる。出土遺物は弥生後期土器のみであり、旧河道の時期は弥生後期に位置づけられる。そしてI-④、⑦、⑧トレンチ土層断面を見るとこの層の上面は谷地形の中央に当たるI区中央付近で窪み、遺構面のベース土である茶色粘質土の堆積時にはその窪みが完全に埋没、平坦化されていない。よって谷地形はこの灰色砂礫層の窪みに由来して形成されていると考えられる。

次いで南側の平坦地についてであるが、I・II区西壁土層断面を見ると遺構面が北へ、またIII-4区南壁土層断面を見ると遺構面が現在の金倉川がある東へ向かってごく緩く下っていることがわかる。

## 旧河道の分布

発掘調査により明確に古墳時代中期の旧河道と判断できる遺構は検出できなかった。（I区SR102は溝状遺構の可能性を持つ。また周辺地形図で調査地の南西から北東部にかけて地割の乱れとして観察できる金倉川の旧河道痕跡は時期不明。）だが、調査地の遺構面レベルは東へ下ること、現在の金倉川も調査地の東側を流下していることからこの時期にも同様な位置に金倉川が流下していたと推測される。

## 結び

以上の遺跡周辺の現地形、調査区内の微地形と旧河道の分布を考慮すると、生野原遺跡の古墳時代中期の旧地形として調査対象地の北側（I区・III-2、3区付近）に大きな深い谷地形があり、その南側に北と東へ向かって緩やかに下る平坦地が存在したと考えられる。また遺跡周辺の地理的環境を見ると東西に近接して磨臼山と櫛梨山という独立丘陵に挟まるが、2つの丘陵間を金倉川が北流している。このため遺跡の周辺は金倉川の氾濫の被害を受けやすい立地条件にあったと考えられる。調査対象地に

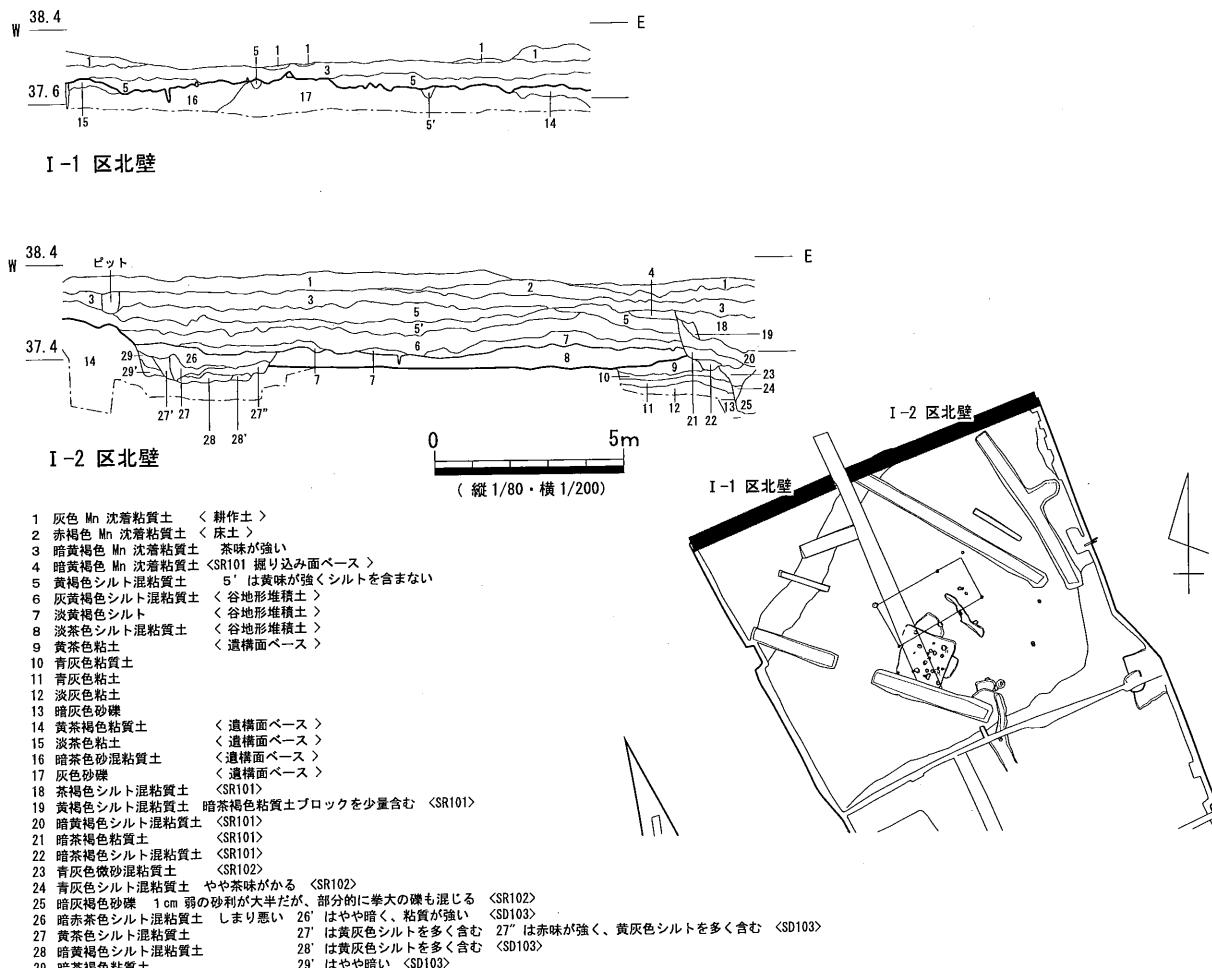
において検出した弥生時代後期の旧河道堆積層が灰色砂礫層であることはこれを如実に示す。だが、その後の堆積層は粘質土～シルトであり、遺跡の北側には条里型地割も確認できる。よって弥生時代後期以降は比較的安定した環境になり、古墳時代中期以降のある時期からは土地開発が進行したと考えられる。

## 第2節 土層序（第5～8図）

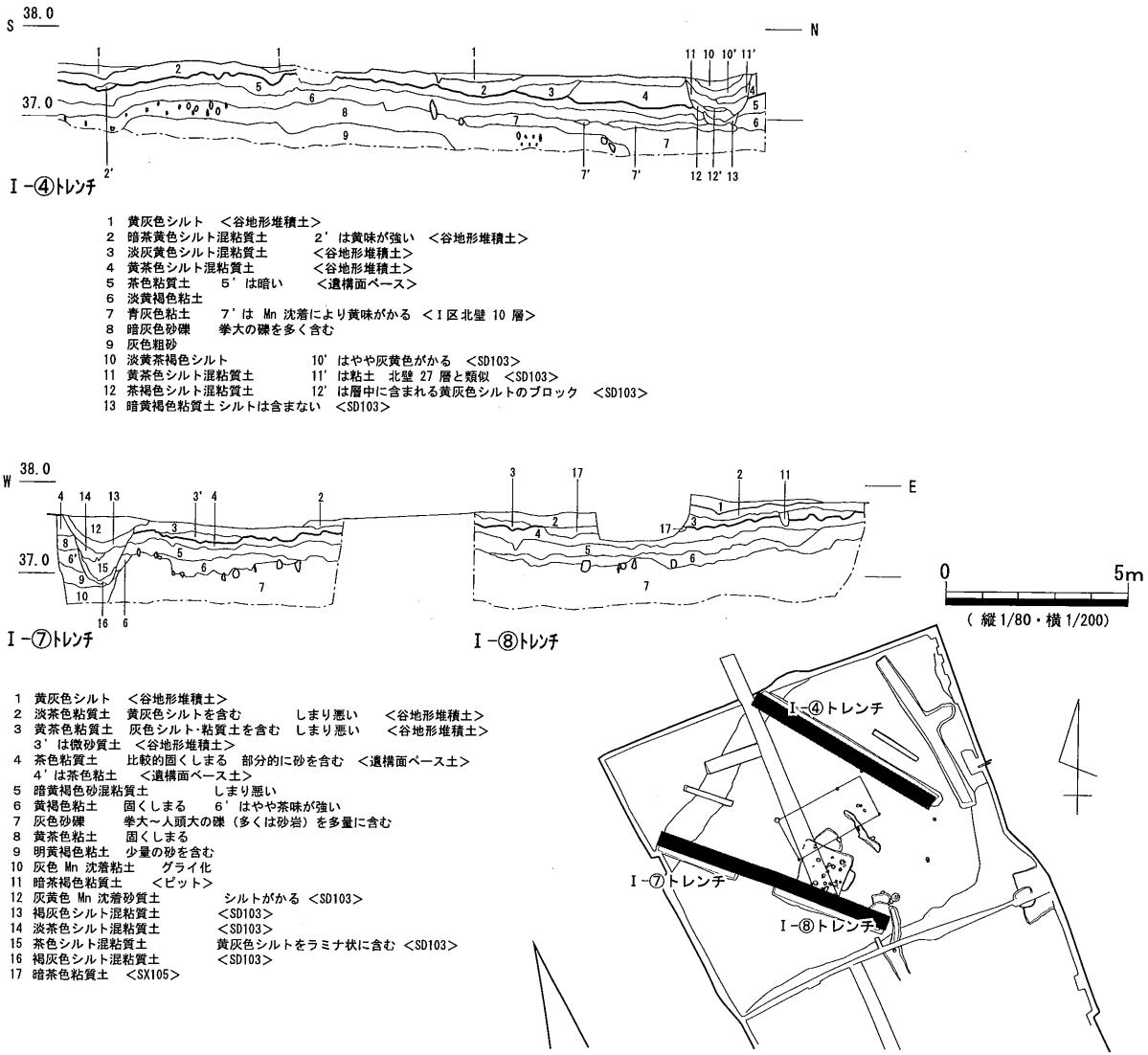
遺跡全体を通しての基本層序は、どの調査区についても概ね上から耕作土、床土、暗黄褐色系粘質土を経て遺構面のベース土である茶色粘質土や淡茶色粘土に至る。ただ、先述のとおり調査区内の微地形は北側の谷地形と南側の平坦地に大別できる。そして北側の谷地形内では、谷地形堆積土として遺構面のベース土上に暗茶灰色系粘質土や暗灰黄色系シルト、暗茶色シルト混粘質土などが見られる。よってこの微地形にも留意しながら各地点の土層序について説明する。

### （I-1、2区北壁）

I-1区部分でI区北西部の平坦地を、I-2区部分で北側の谷地形を図化している。どちらの微地形の部分も土層の堆積状況は概ね基本層序の通りであるが、I-2区部分の西側でSD103を、東側でSR101、102を図化している。これを見るとSD103の掘り込み面は淡茶色シルト混粘質土（8層）であることがわかる。これは古墳時代中期遺構面のベース土である茶色粘質土の直上に堆積する土層である。また今回、詳細な報告は行っていないSR101は、SD103よりさらに上位の堆積土を掘り込ん



第5図 I-1・2区北壁



第6図 I-4・7・8トレンチ

でいる事がうかがえる。

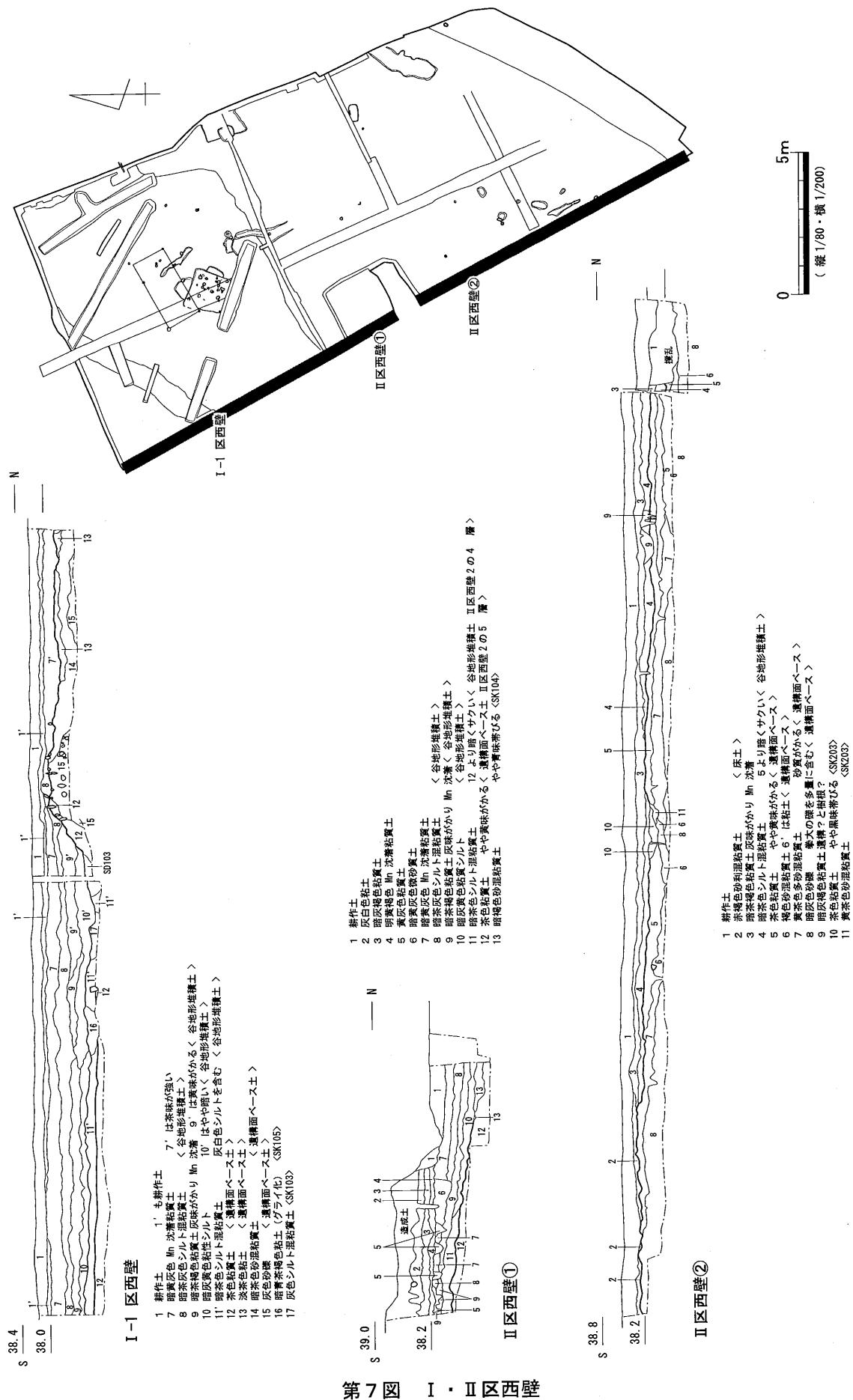
〈I-1区西壁、II区西壁〉

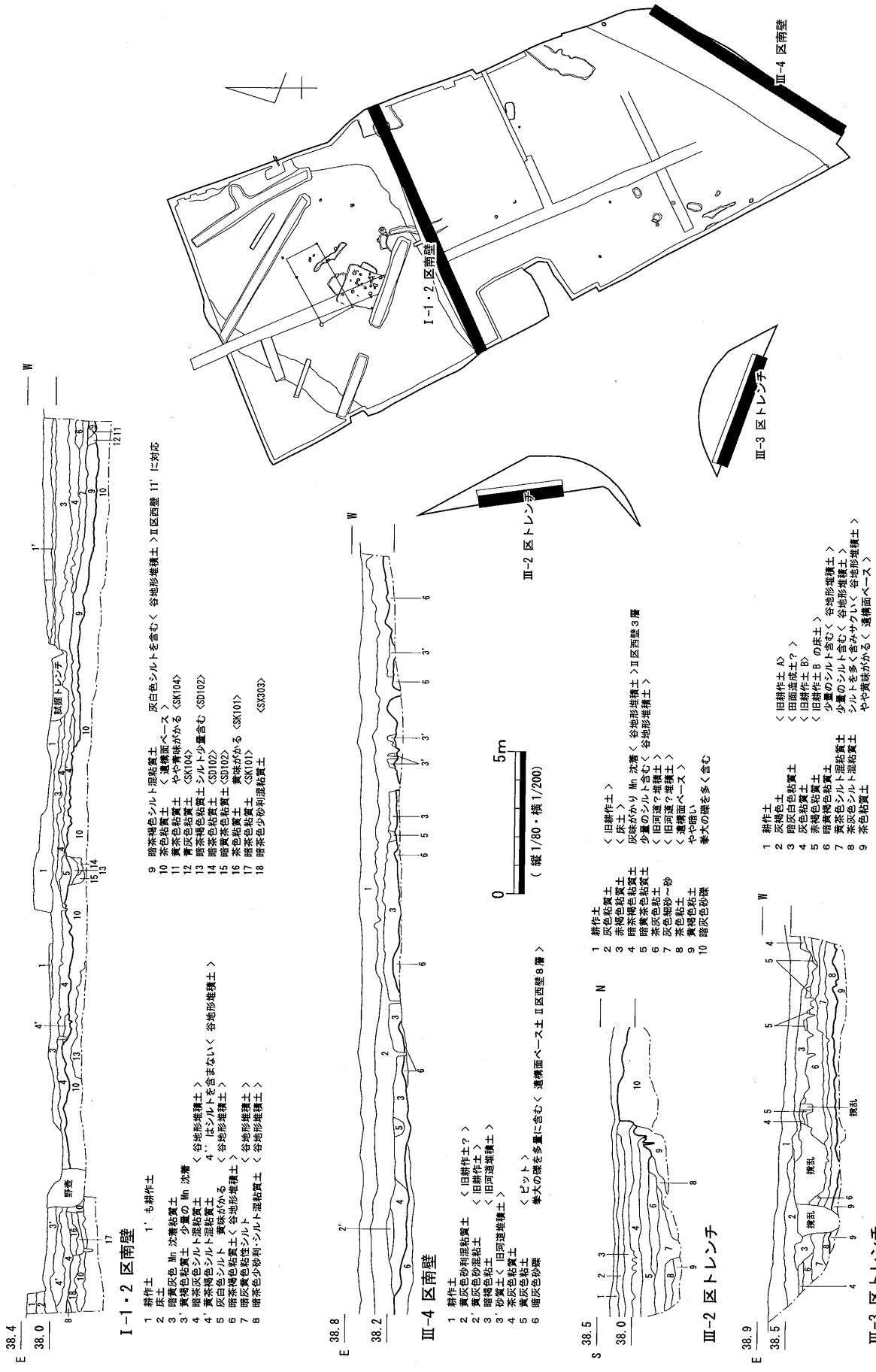
I-1区の北部でI区北西部の平坦地を、その南部とII区西壁①で北側の谷地形、II区西壁②で南側の平坦地を図化している。どの微地形の部分も土層の堆積状況は概ね基本層序の通りであるが、II区の南側では調査対象地の多くの部分で遺構面のベース土として確認される茶色粘質土が途切れ、下位に堆積する黄茶色多砂混粘質土（II区西壁②7層）や暗灰色砂礫（同⑧層）が見られる。これはこの部分がある程度削平を受けたためと考えられる。またSD103、SK103・105の掘り込み面は暗茶色シルト混粘質土（I-1区西壁11'層）である。これは古墳時代中期遺構面ベース土である茶色粘質土の直上に堆積している土層である。

〈I-1、2区南壁〉

北側の谷地形の内部を図化している。中央でやや隆起しており、谷地形内の凹凸の存在がうかがえる。土層の堆積状況はほぼ基本層序の通りである。

〈III-4区南壁〉





第8図 I・Ⅲ区南壁、Ⅲ区トレンチ

南側の平坦地を図化している。土層の堆積状況は耕作土直下で遺構面のベース（暗灰色砂礫。6層）に至り、調査対象地の大部分で遺構面のベースである茶色粘質土が見られない。このため、ある程度の削平を受けていると考えられる。また土層断面のほぼ全体で見られる浅い落ち込みの内部には、暗褐色粘土～砂質土が堆積する。この土層の性格については、周辺微地形図（第4図）においてこの地点のすぐ南側で旧河道の痕跡が見られるため、旧河道のオーバーフローと考えられる。

#### 〈III-2、3区トレンチ〉

III-2区トレンチでは北側でI区北西部の平坦地の続き、南側で北側の谷地形を図化した。谷地形内部では灰色細砂、砂（7層）が見られ、流水の痕跡と考えられる。またIII-3区トレンチの遺構面レベル（37.8m）は、III-2区トレンチの谷地形の底場レベル（37.7m）と類似する。このため、III-3区は谷地形の内部に位置すると考えられる。

### 第3節 I区の調査成果

#### (1) 調査区の概要（第10図）

I区は調査対象地の北側に位置する。立地は他の調査区と同様に南西から北東に僅かに下る斜面上にあるが、もっとも低位である。また「第1節 遺跡の立地と地形」で述べたとおりI区はほぼ全面が大きな深い谷地形の内部にある。検出遺構にはこの谷地形の底場から掘り込むものと、谷地形の埋没後に埋没土上面から掘り込むものがある。前者は今回報告する遺構の多数をしめ、時期的には古墳時代中期に位置づけられる。後者はSB101とSD103のみ報告するが、時期的には中世以降に属すると推定される。

#### (2) 古墳時代中期の遺構・遺物

##### 溝状遺構

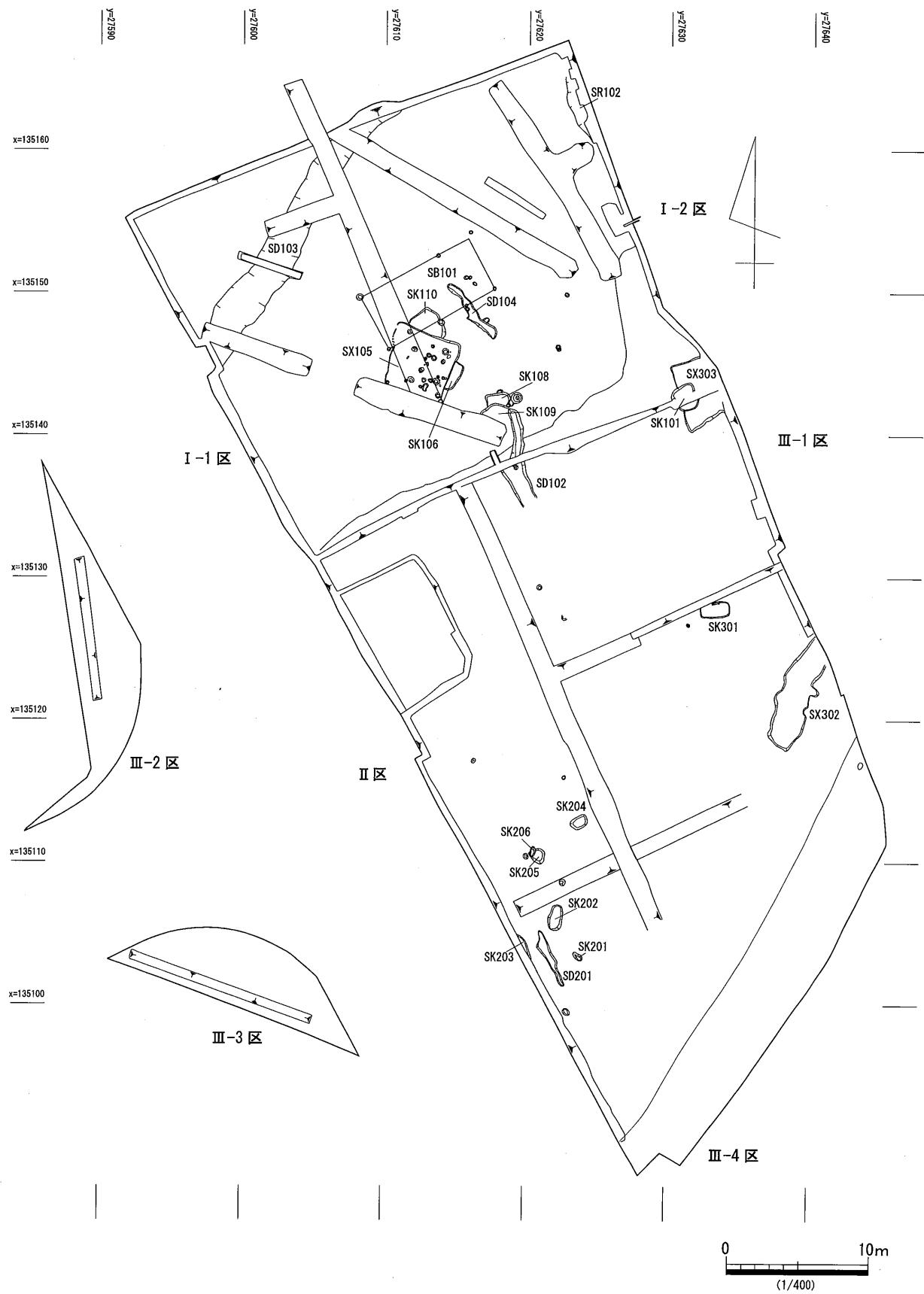
###### SD102（第11図）

調査区の南部で検出した溝状遺構である。南部はII区に3mほど延びて途切れる。これより北側で検出したSD104は延伸した位置にあり、埋土も類似するため同一の溝状遺構である可能性がある。SD102の断面形は南側では深い皿状、北側では箱形を呈する。幅0.73m～1.75m、深さ27cmを測り、底面レベルは地形と同様に北へ下る。埋土は暗茶色系粘質土である。

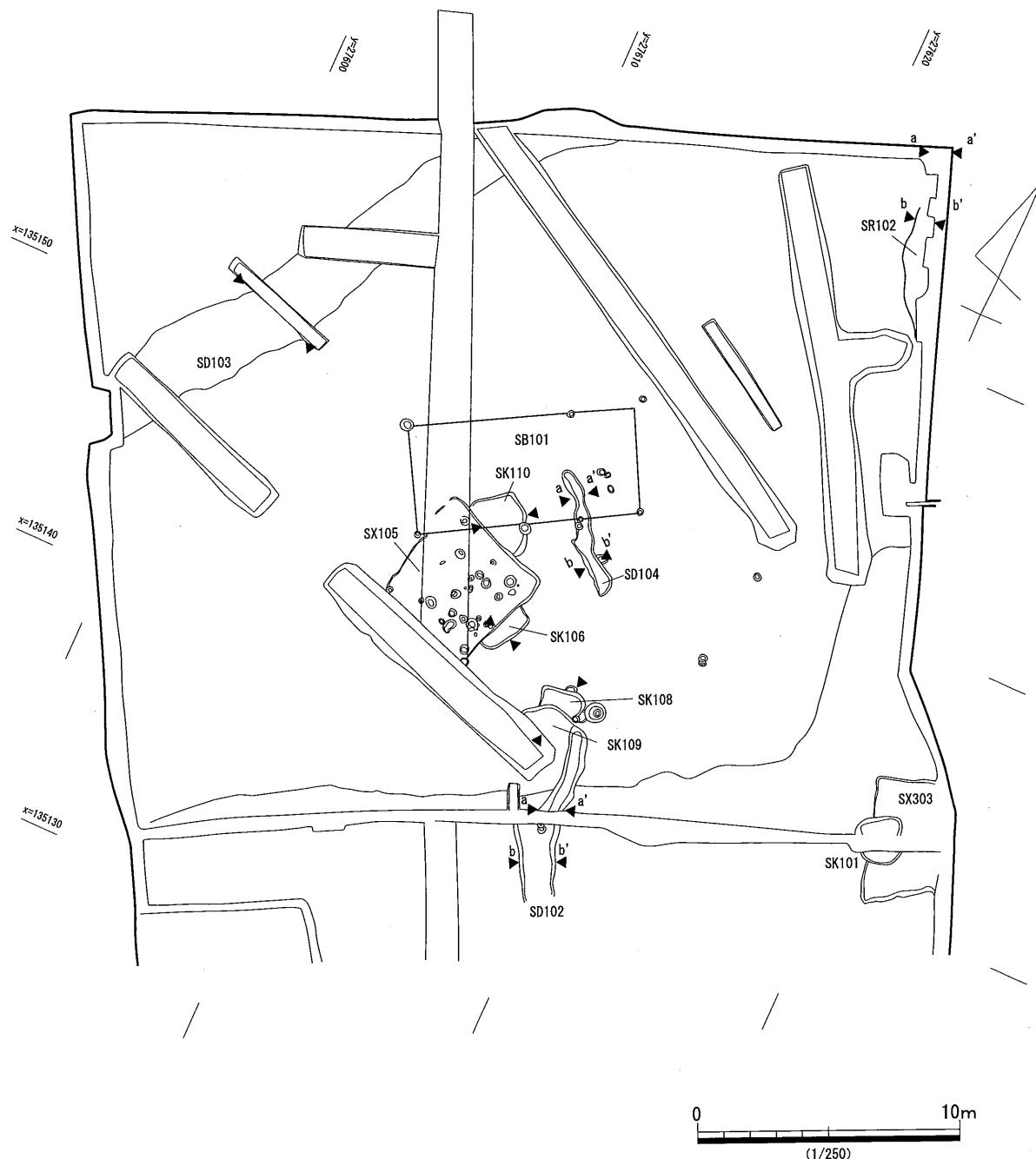
出土遺物には少量の弥生土器、土師器（1・2）がある。1は甌である。肩が張る器形を呈し、外面には細密な縦ハケ、内面には丁寧な指ナデを施す。2は高杯の脚部である。下位で強く屈曲し、ハの字状に開く。溝状遺構の時期は出土遺物と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考える。

###### SD104（第11図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。南側に近接するSD102は類似した埋土をもち、同じ溝状遺構の可能性がある。断面形は深い皿状であり、幅0.3m～0.83m、深さ9cmを測る。底面レベルは地形と同じく北へ下る。埋土は暗茶色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考える。



第9図 全体遺構配置図 (1/400)



第10図 I区遺構配置位置図 (1/250)

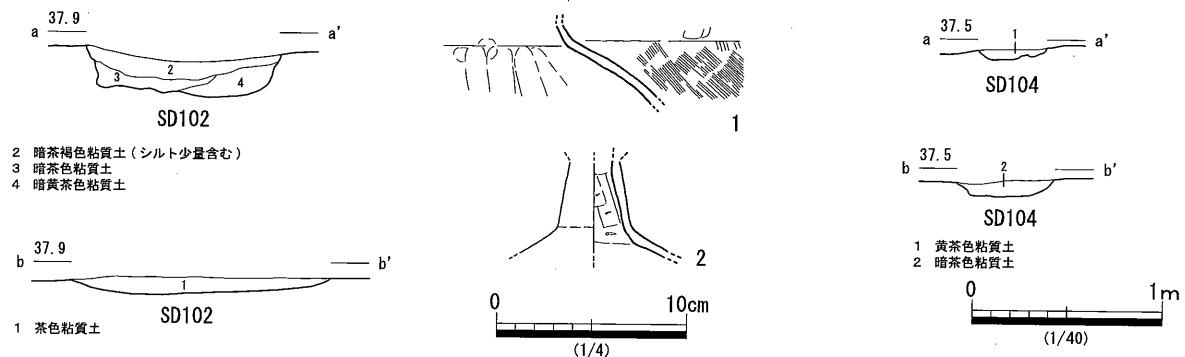
## 土坑

### SK101 (第24図)

調査区の南東部で検出した土坑である。SX303を切る。平面形はやや不揃いな隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈する。規模は東西1.74m、南北1.80m、深さ19cmを測る。埋土は2層に細分できるが、茶色系粘質土である。出土遺物はない。土壙の時期は埋土と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

### SK106 (第12図)

調査区の南部中央で検出した土坑である。SX105に西側を切られるが、平面形は隅丸方形、断面形は



第11図 SD102・104断面図(1/40)、SD102出土遺物(1/4)

皿状を呈すると推定される。規模は東西0.7m以上、南北2.0m、深さ11cmを測る。主軸方向はN-30°-Eである。埋土は2層に細分できるが、茶色系粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

#### SK108 (第12図)

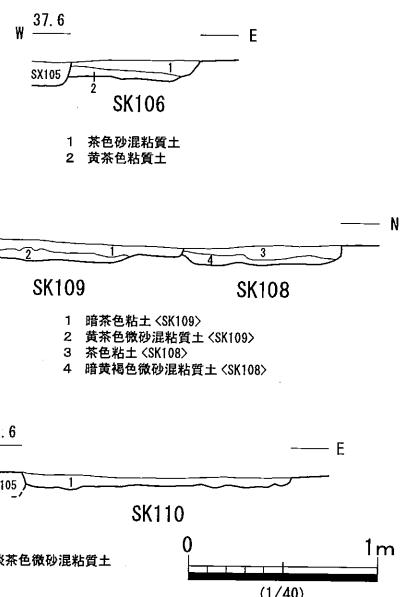
調査区の南部中央で検出した土坑である。SX105に西側を切られるが、平面形は方形、断面形は箱型であると推定される。規模は東西1.70m、南北0.75m、深さ10cmを測る。主軸方向はN-76°-Eである。埋土は2層に細分できるが、茶色系粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

#### SK109 (第12図)

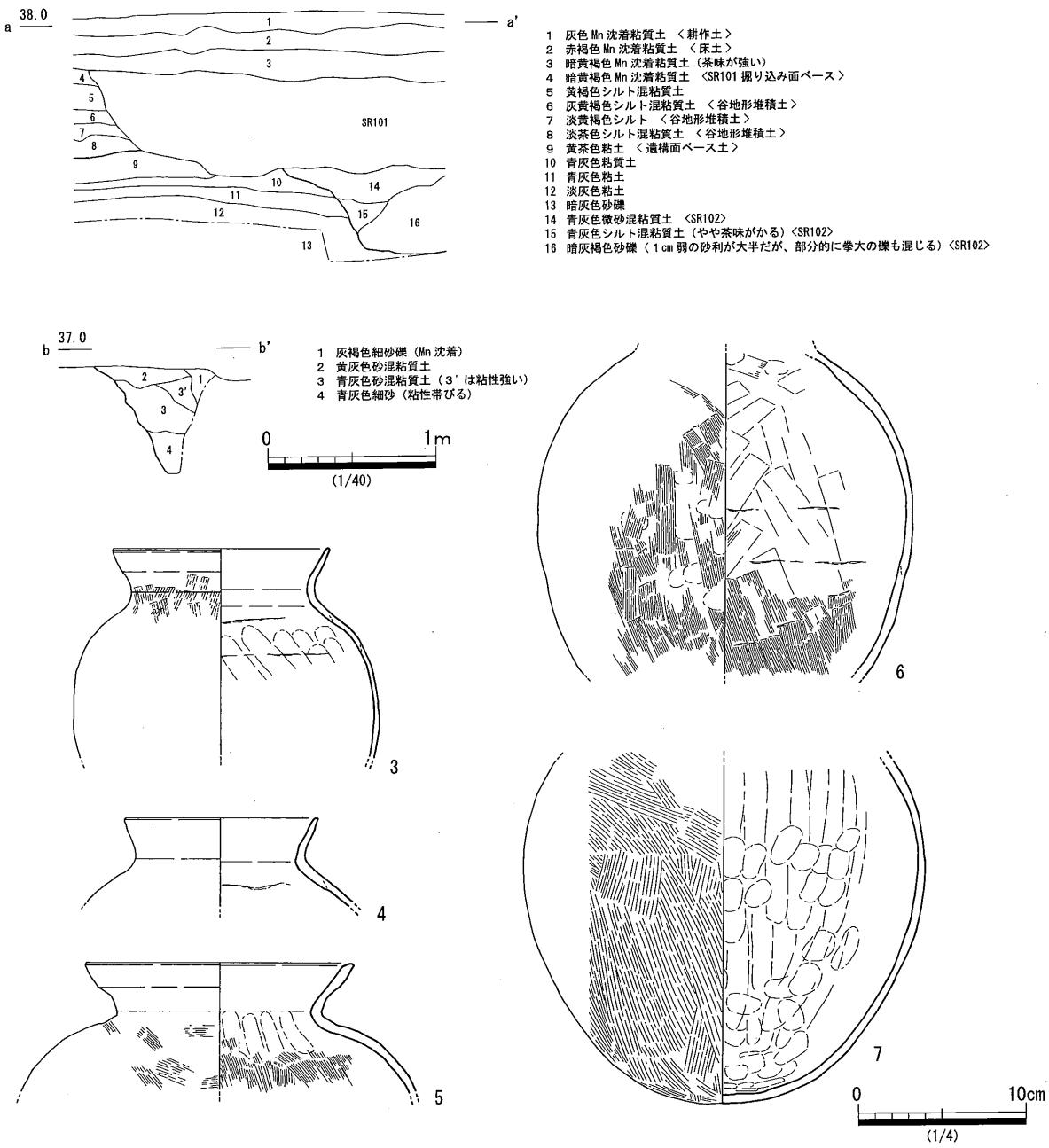
調査区の南部中央で検出した土坑である。北側でSK108を切る。また南西部を谷地形の確認トレンチ(I-⑧トレンチ)で破損し、東側をSD102により切られるが、平面形は不整方形、断面形は浅い皿状であると推定される。規模は東西1.88m以上、南北1.2m以上、深さ11cmを測る。埋土は2層に細分できるが、茶色系粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

#### SK110 (第12図)

調査区の南部中央で検出した土坑である。SX105に南側を切られるが、平面形は方形、断面形は浅い皿状であると推定される。規模は東西1.75m、南北2.40m、深さ8cmを測る。主軸方向はN-40°-Wである。埋土は淡茶色微砂混粘質土の単層である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。



第12図 SK106・108・109・110  
断面図(1/40)



## 旧河道

### SR102 (第13図)

調査区の北東隅で検出した旧河道である。西肩付近のごく小範囲を検出したにとどまるが、現在も東側に金倉川が近接し、南側では旧河道の痕跡が地割の乱れとして観察できる位置で検出したこと、埋土に砂礫層が見られることからこのように判断した。断面形は逆台形であり、幅1.0m以上、深さ62cmを測る。底面レベルは地形と同じく北へ下る。埋土は肩側で灰色系粘質土、中央側で灰褐色系砂礫である。

出土遺物には土師器甕 (3~7) などがある。3・4は直立気味に延びる口縁部が先端で小さく丸められている。内面には粘土紐接合痕が見られる。5は口縁端部の内面を面取りにより平坦に仕上げる。内面には細密なハケ目調整を加えるが、頸部直下は指ナデによりナデ消されている。6・7は外面に丁寧

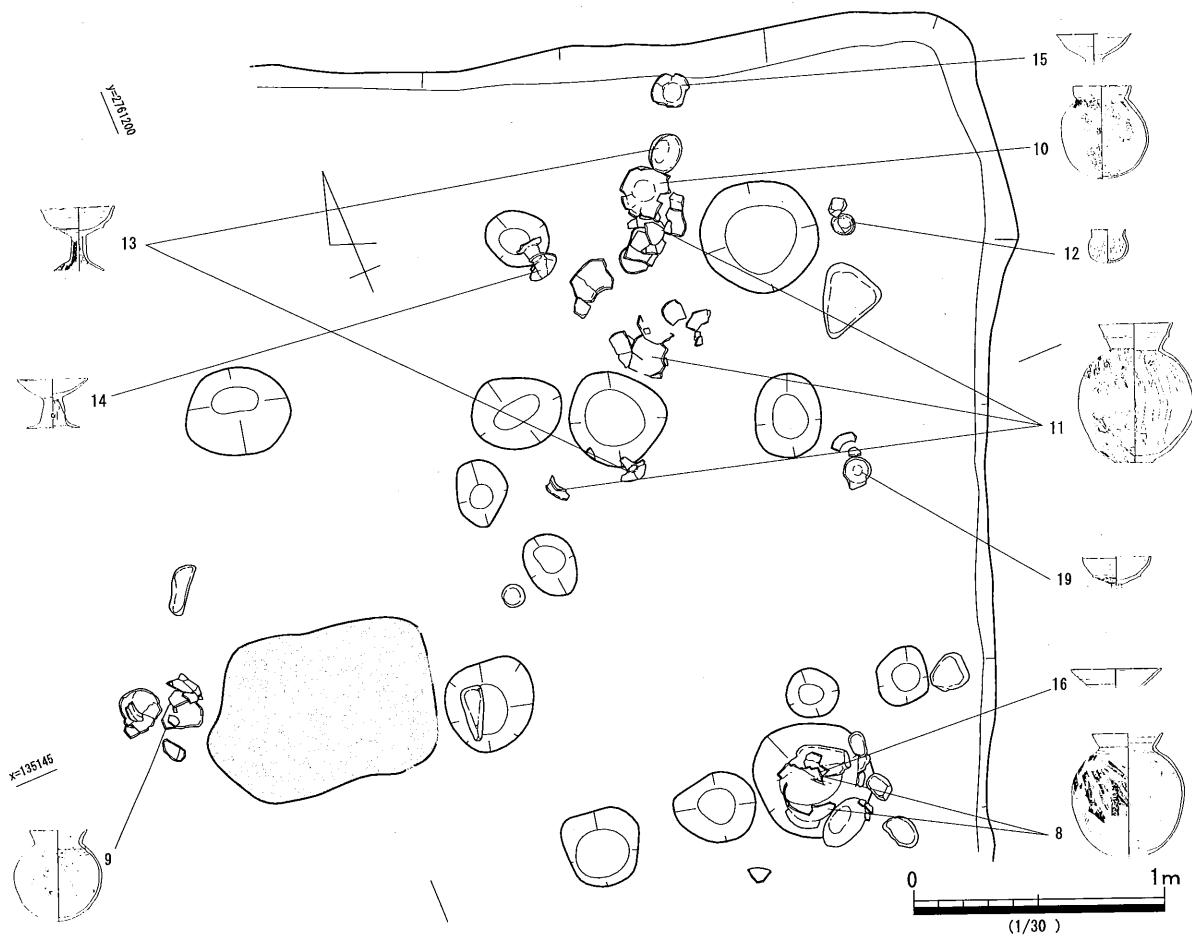
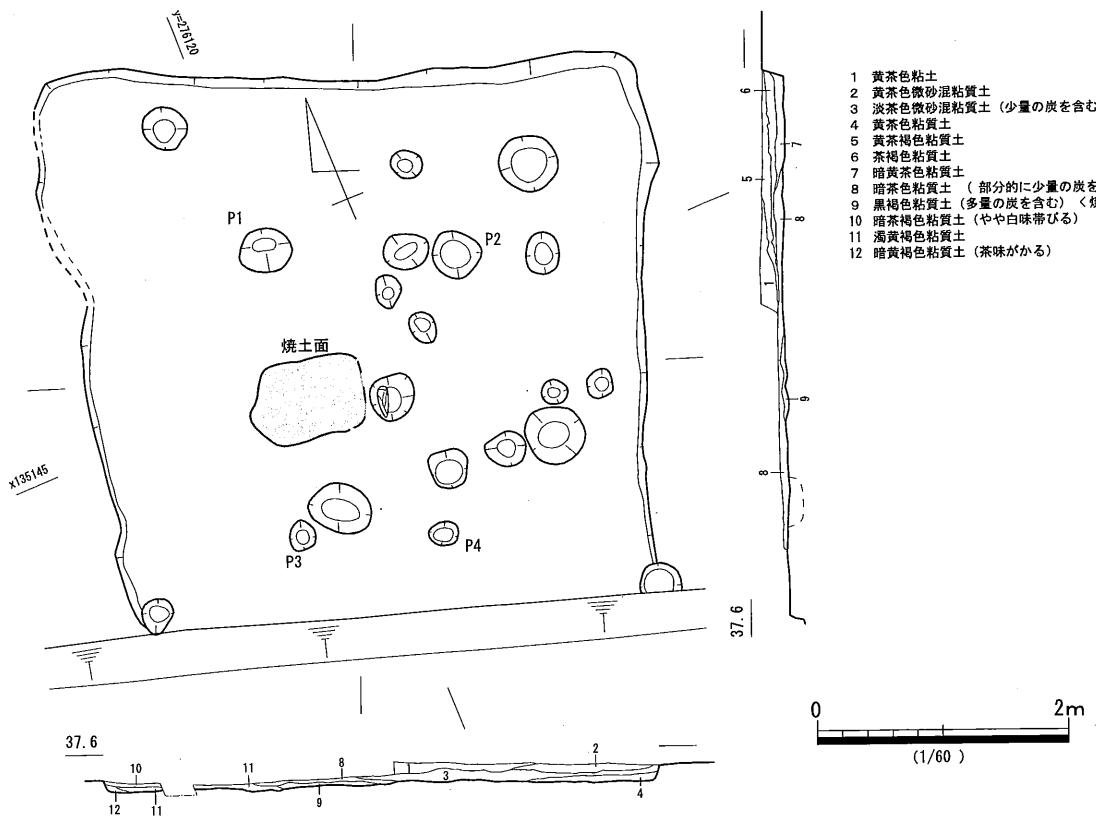
な縦ハケを密に加える。7は内面も丁寧に指ナデする。旧河道の時期は出土した土師器より古墳時代中期と考えられる。

### 性格不明遺構

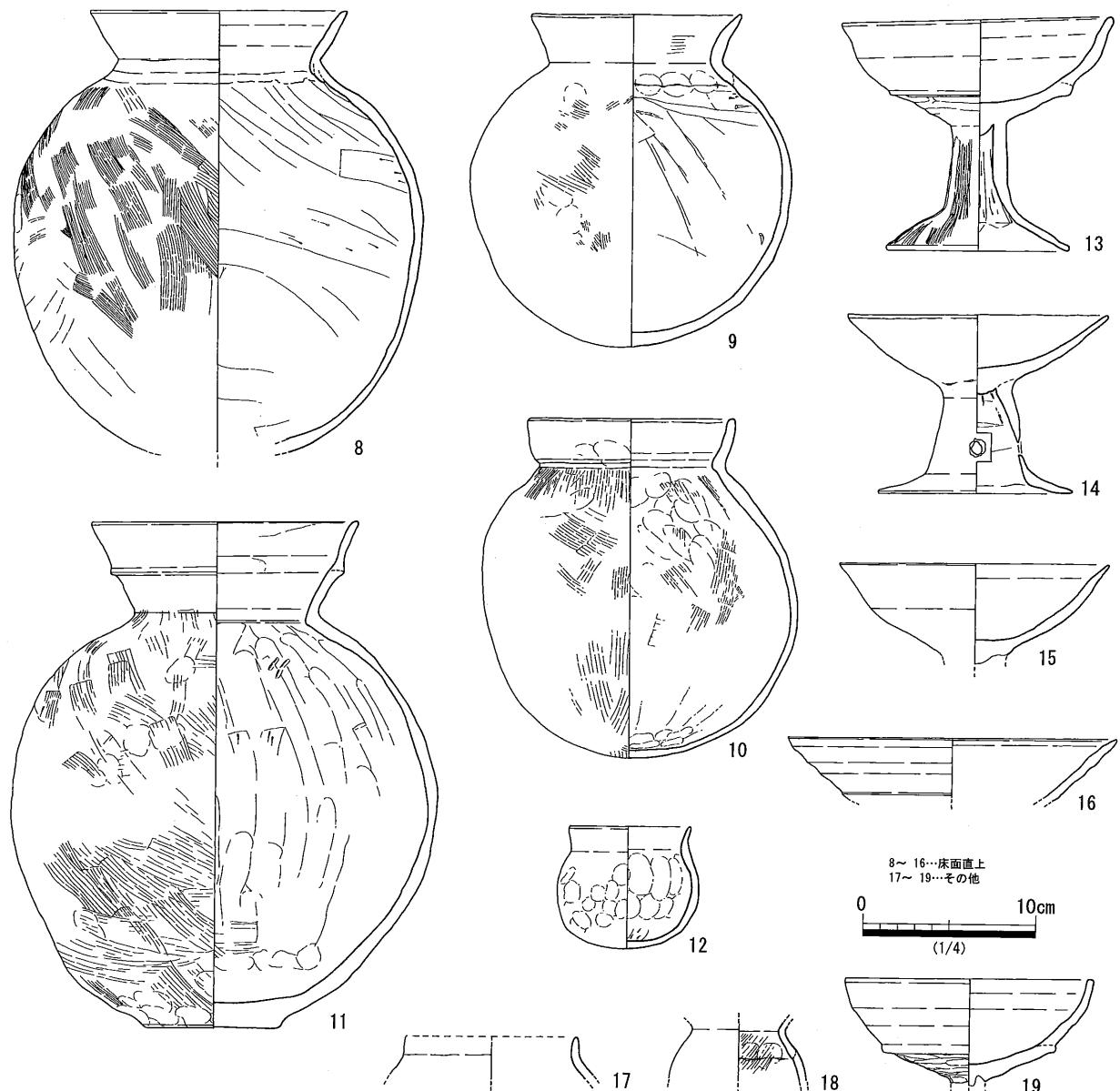
#### SX105（第14～16図）

調査区の南部中央で検出した遺構である。南端部を谷地形の確認トレンチ（I-⑧トレンチ）で破損するが、平面形は北西側でやや開く方形である。断面形は壁が直立気味に立ち、床面は西側でやや下がるもののが概ね平坦である。規模は東西4.5m、南北4.2m以上、深さ18cm、主軸方向はN-20°-Eを測る。遺構はI区の冒頭で述べた極めて浅い谷地形の中央に位置し、主軸方向はこの谷地形のそれと類似する。よって地形的に規制されていると考えられる。床面では焼土面とピット群を検出した。焼土面はほぼ中央に位置し、東西0.9m、南北0.65mを測る。断面形は極めて浅い皿状であり、床面は被熱により赤化している。内部には多量の炭と少量の焼土塊を含む黒褐色粘質土が堆積している。土層断面の観察では11層の濁黄褐色粘質土を切り込んで形成される。またピット群は東半部を中心に分布し、径0.2～0.48m、深さ約0.15～0.3mを測る。SX105の性格を4本主柱穴をもつ竪穴住居と仮定し、柱穴の候補を探すとP1～4となるが、これらの配置は不揃いであり、かつ柱穴規模が小さく深度も浅い。

出土遺物には土師器甕（8～10）、壺（11・12・17・18）、高杯（13～16・19）、石器（20・21）などがあり、遺存状況が良いものが多い。8～16・20・21は床面直上からの出土遺物、17～19は床面から浮いた遺物や出土層位不明遺物である。なお、床直出土遺物については床面から5cm程度浮いた遺物と接合するものがあるものの土層に乱れは見られない。このため比較的短期間でSX105の埋没が進行したと考えられる。8～10は球形の体部をもつ甕であり、9と10は法量的に類似する。8は体部外面には細かい縦ハケ、内面の頸部下位には強い指ナデを加える。9は内面の頸部付近では粘土紐接合痕、ヘラ削りが見られ作りは粗い。10はほぼ直立する口縁部をもち、体部の調整は内外面とも縦ハケである。11、12は壺である。11の口縁部はほぼ直線的に外上方に延びるが、中位を内面から強くナデて突帯状にしている。また体部は球形、底部は平底である。調整は体部外面で主に縦ハケを加えるが、底部付近では横方向のヘラ削りも見られる。また体部内面は全体的にヘラ削りを施す。12は小型丸底壺である。体部外面全体と内面の体部上半部では顕著な指オサエが見られる。13～16は高杯である。13の杯部は屈曲部から上位に直立気味に延びた後、口縁部を小さく外反させる。脚部は下位でハの字状に開くが、やや丸みを帯びる。14～16はいずれもほぼ直線的な杯部をもつが、器高の高低や形態上の微妙な屈曲の有無に違いがある。14はやや浅い杯部が緩やかに直線的に延び、筒が太い脚部をもつ。脚部には1ヶ所穿孔を加える。17・18は小型丸底壺である。18は粘土紐の接合痕と重なって指オサエが密に見られる。19は高杯の杯部である。床面から約10cm浮いた位置で出土した。器形と調整は13と類似しており、外面は上位で横ナデ、下位で密に横方向のヘラミガキを加える。20・21は石器である。20は研磨面とそれにはほぼ重なるように平行する条線が密集する箇所が見られる。21でも20と同様に平行する条線が見られる。またこれら的一部は斜めに交差しているが、これは平坦面を選んで使用しているためと考えられる。遺構の時期は出土した土師器から古墳時代中期（布留4式併行期）と考えられる。



第14図 SX105平・断面図及び遺物出土状況図 (1/60・1/30)



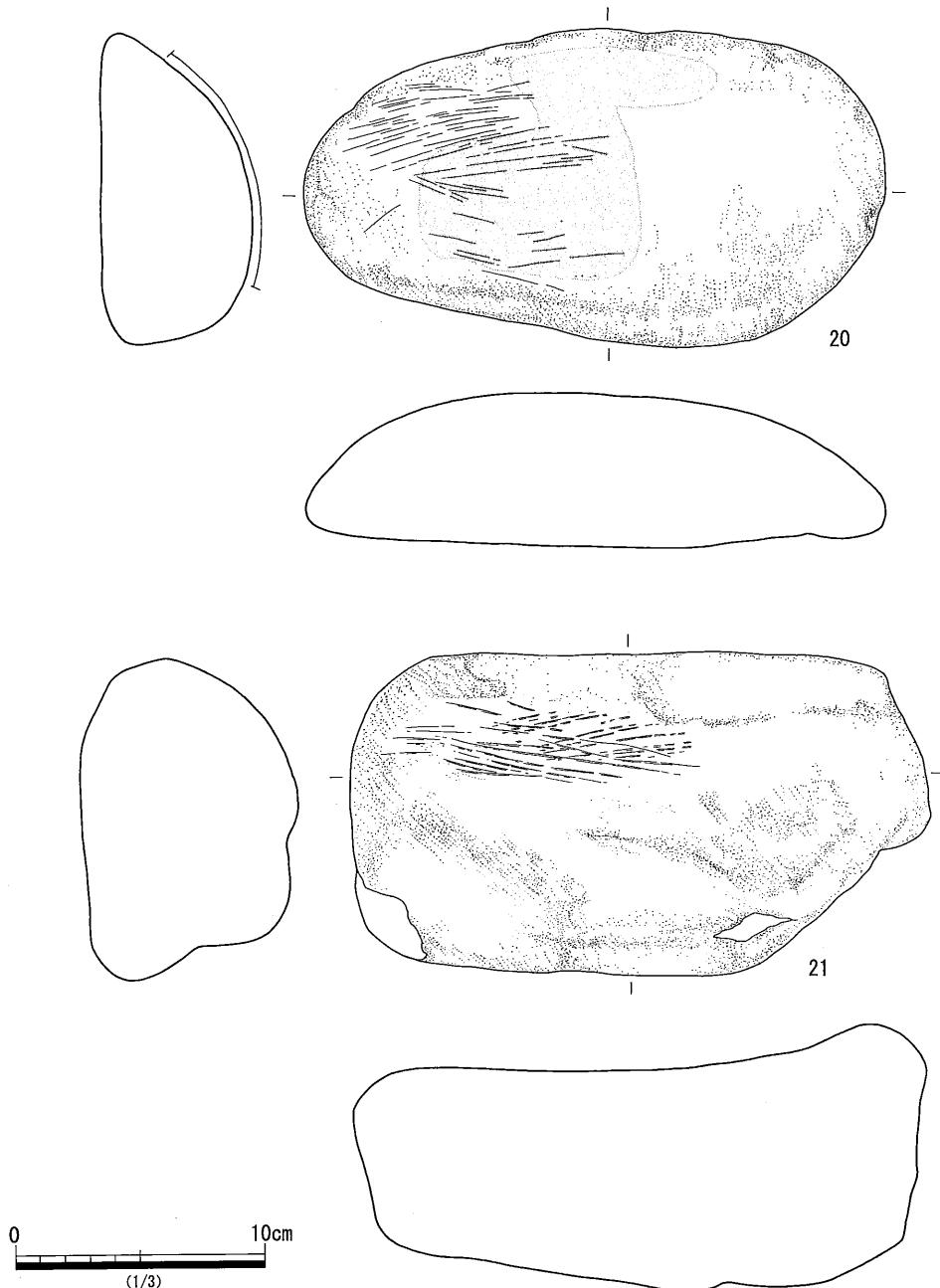
第15図 SX105出土遺物実測図① (1/4)

### (3) 中世以降の遺構・遺物

#### 建物跡

##### SB101 (第17図)

調査区の中央で検出した側柱建物跡である。規模は1間×3間 (4.17m×8.43m) である。主軸方向はN-61°-Eを測り、周辺に広がる条里型地割のそれと一致する。柱穴の平面形は円形であり、径0.18~0.48m、深さ5~15cmを測る。遺構の掘り込み面は古墳時代中期の遺構面のベース土より上位に堆積する淡茶色シルト混粘質土であり、遺構埋土は黄灰色シルトである。これは掘り込み面(ベース土)の直上に堆積する黄灰色シルトと類似する。出土遺物はない。遺構の時期は埋土の色調、土質から中世以降と考える。

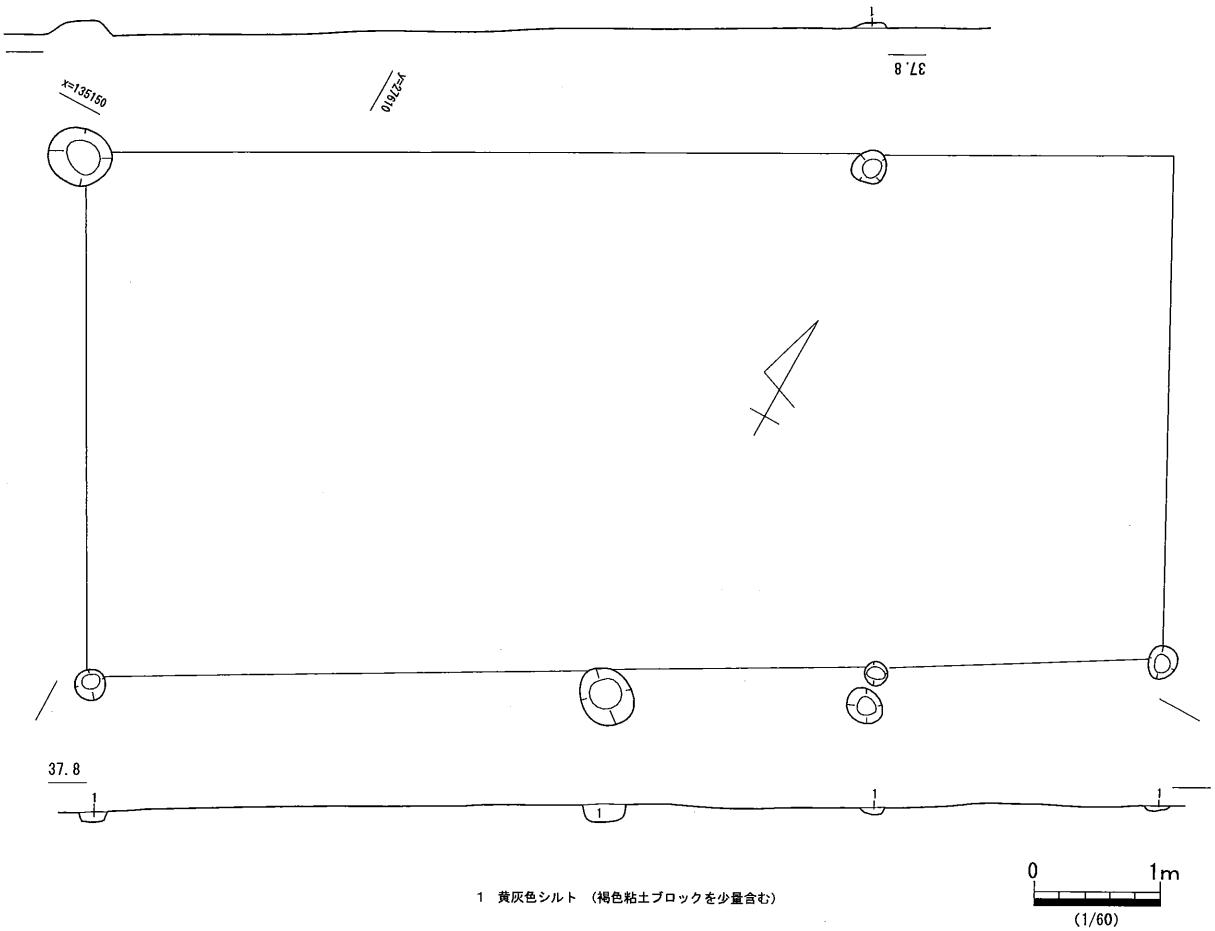


第16図 I区SX105出土遺物実測図② (1/3)

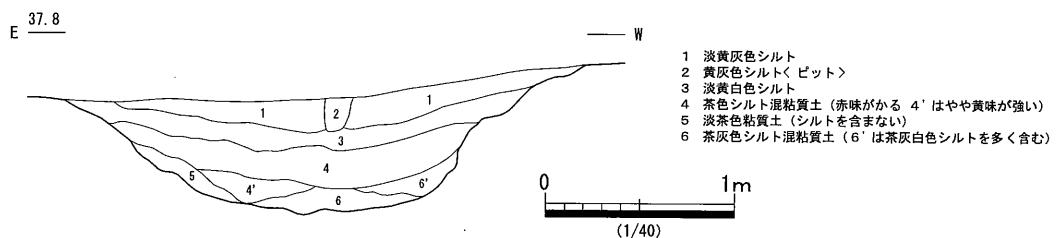
### 溝状遺構

SD103 (第18図)

調査区の北西部で検出した溝状遺構である。この遺構が掘削された時点ではI区のほぼ全体に広がる谷地形は埋没しておらず、その北側の肩に沿って形成されている（第5図のI区北壁土層断面）。両端は、いずれも調査区外に延び、断面形は逆台形を呈する。幅1.75m～2.77m、深さ78cmを測り、底面レベルは北東へ下る。主軸方向はN-32°-Eを測るが、先述の状況から谷地形の方向に規制されている。埋土は上位で黄灰色系シルト、下位で茶色系粘質土である。遺構の規模は大きいものの流水痕跡を示す



第17図 SB101平・断面図 (1/40)

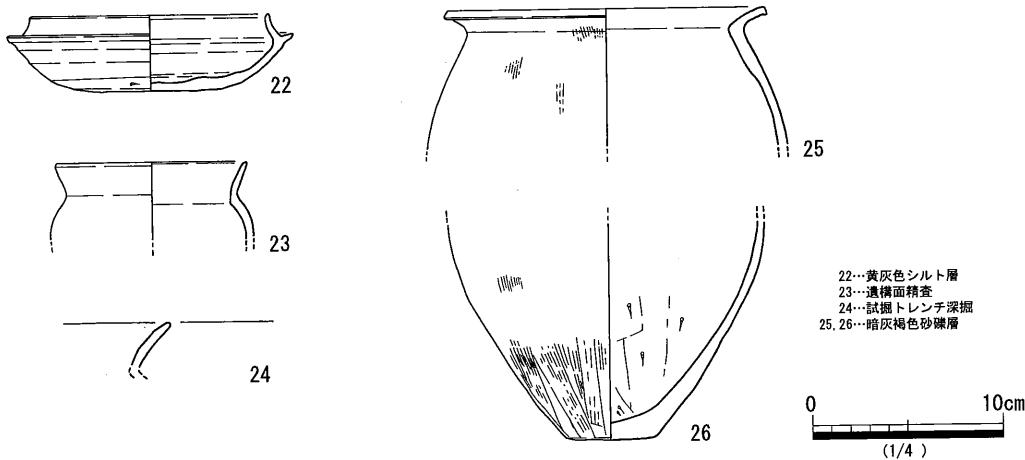


第18図 SD103断面図 (1/40)

砂層は見られない。出土遺物には少量の弥生土器、土師器がある。遺構の時期は埋土の色調、土質から中世以降と考える。

#### (4) 包含層出土遺物(第19図)

22は古墳時代中期の遺構面のベース土直上に堆積した茶灰色シルト層から出土した須恵器杯身である。立ち上がりは短く内傾気味であり、底部は平坦である。時期は6世紀後半に位置づけられる。24～26は古墳時代中期遺構面のベース土の下位に堆積した暗灰褐色砂礫層から出土した弥生土器甕である。24、25は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。弥生時代後期に位置づけられる。この土層はIII



第19図 I 区包含層 出土遺物実測図 (1/40)

区へ連続するが、やはり弥生後期土器が出土しており、当該期には金倉川の旧河道が存在したことがうかがえる。

以上の出土遺物の時期より古墳時代中期遺構面のベース土の上下に見られる土層の堆積時期は直上の茶灰色シルト：古墳時代後期、下位の暗灰褐色砂礫層：弥生時代後期と考えられる。

#### 第4節 II・III区の調査成果

##### (1) 調査区の概要 (第20図)

II・III区は調査対象地の中央から南側に位置する。III区の調査は4つの小調査区に区分して実施したが、II区を取り囲むような調査区配置を探るためII・III区を一括して報告する。これらはI区より高位にあり、地形的にはごく緩い傾斜をもつ平坦面である。検出遺構は少数の溝状遺構や土坑だけであり、遺物の出土量も少ないが、多くはI区と同様に古墳時代中期に属すると考えられる。これはI区SX105の性格を竪穴住居跡と考える際、SX105自体の属性以外で不自然な点である。というのはI区の谷地形内よりII・III区の方が相対的に良好な立地条件であるにも拘らず集落跡の痕跡に乏しいためである。

また国道319号を挟んで西側に位置するIII-2・3区は調査対象地が狭小であるためトレンチ調査のみ実施した。III-2区では旧河道を検出した以外に遺構、遺物は見られなかった。なお、II・III区の遺構面のベース土は概ねI区と同じ茶色粘質土であるが、III-4区のある南端部はこれより下位に堆積する灰色砂礫などがベース土となる。このためある程度削平を受けていると考えられる。

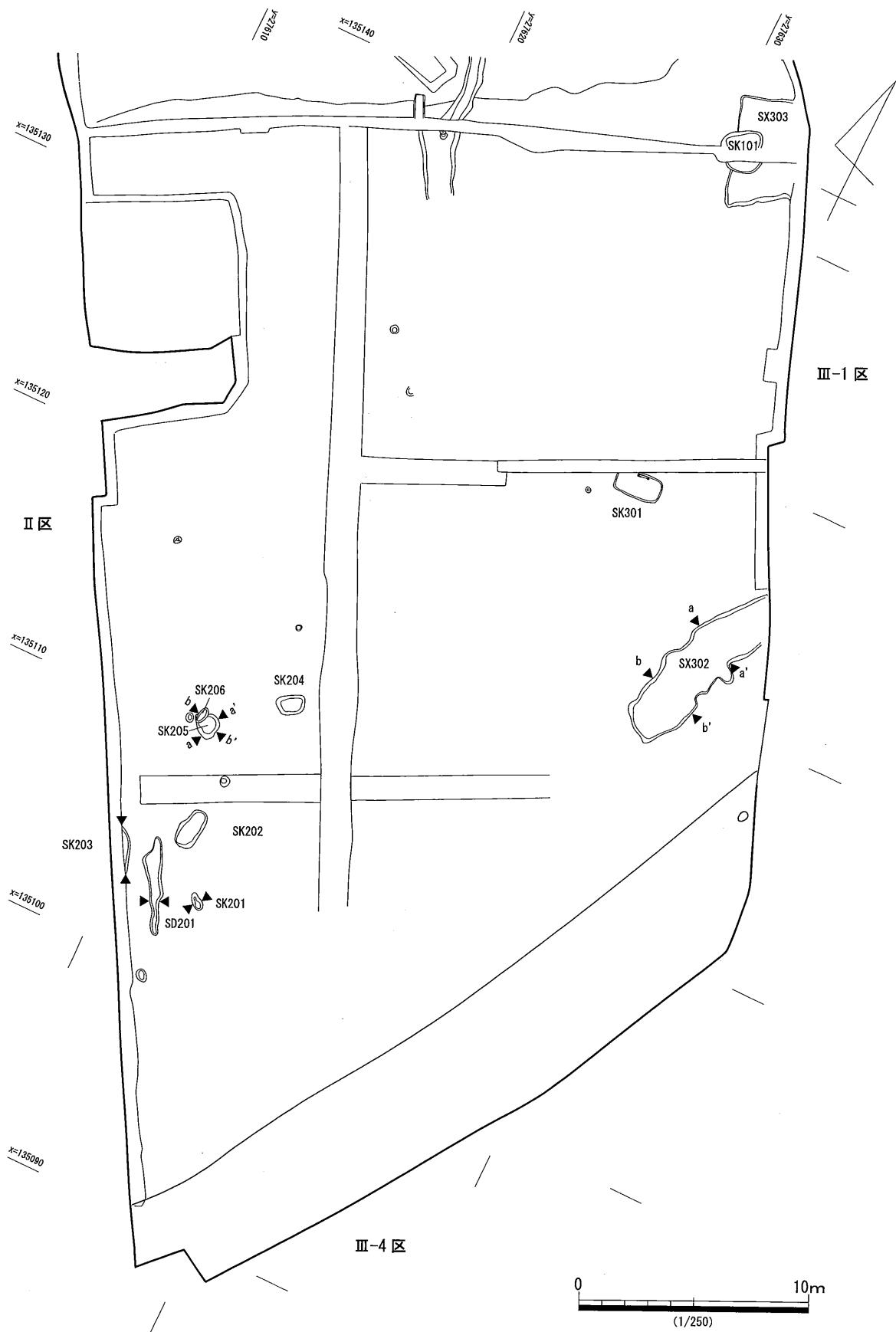
##### (2) 古墳時代中期の遺構、遺物

###### 溝状遺構

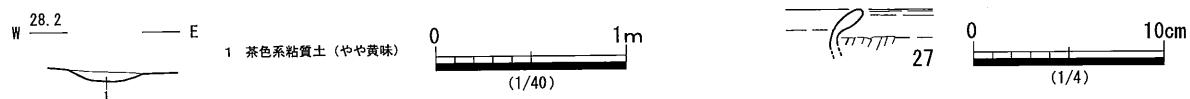
###### SD201 (第21図)

II区の南部で検出した溝状遺構である。断面形は浅い皿状であり、幅0.25m～0.82m、深さ7cmを測る。底面レベルは地形と同じく北へ下る。主軸方向はN-27°-Wを測り、埋土は暗茶色粘質土である。出土遺物には土師器甕(27)などがある。27は口縁部が体部より分厚く、端部には丸みを帯びる。

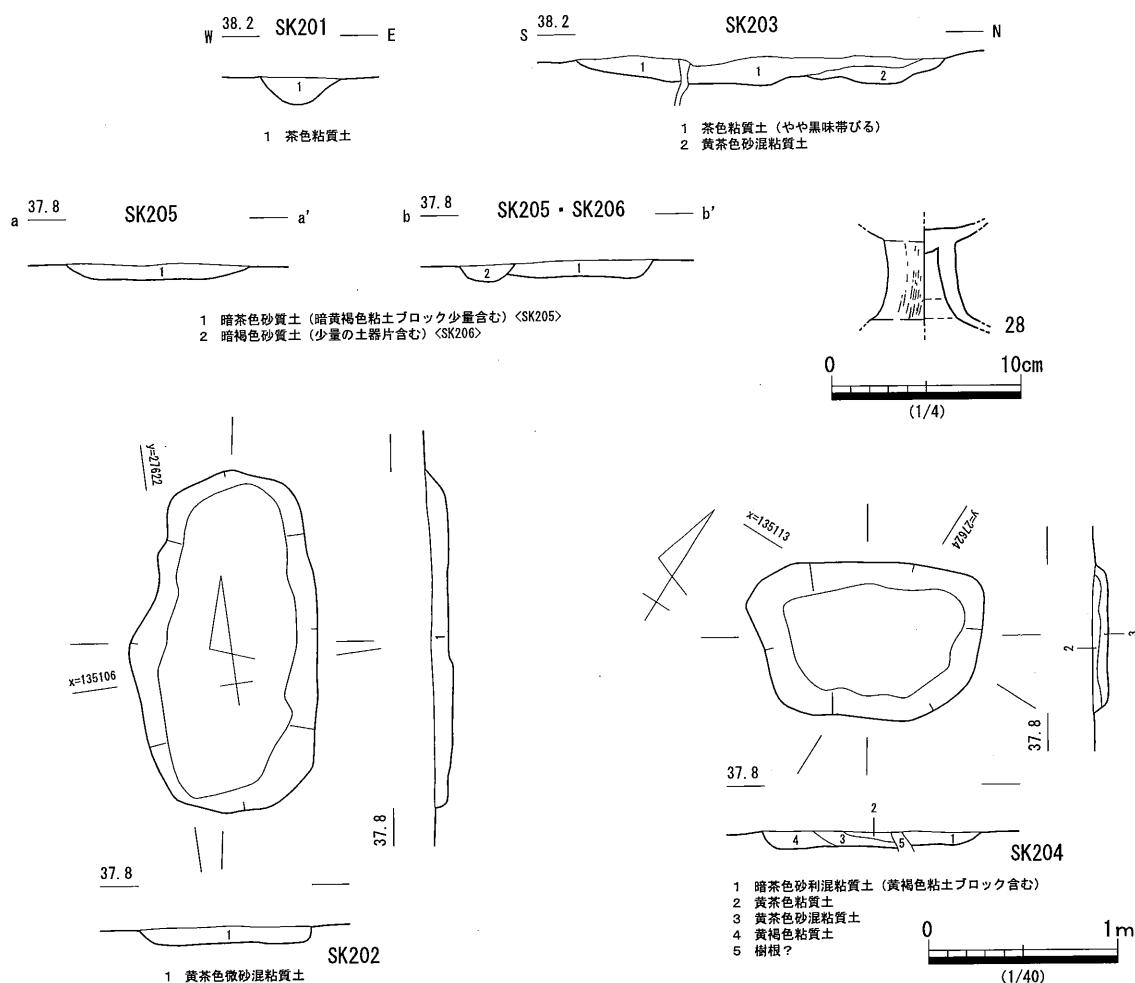
溝状遺構の時期は出土土器や周辺遺構の時期から古墳時代中期と考える。



第20図 II・III区遺構配置位置図 (1/250)



第21図 SD201断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/4)



第22図 SK201・203・205・206断面図 (1/40)、SK202・SK204平・断面図、SK206出土遺物実測図 (1/4)

## 土坑

### SK201 (第22図)

調査区の南部中央で検出した土坑である。平面形は隅丸方形、断面形は丸みを帯びた逆三角形である。規模は東西0.42m、南北0.75m、深さ15cmを測る。主軸方向はN-51° - Wである。埋土は茶色粘質土である。出土遺物には土師器がごく少量ある。土坑の時期は出土遺物と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

### SK202 (第22図)

調査区の南部中央で検出した土坑である。平面形は南側でやや膨らむ方形、断面形は浅い皿状である。

規模は東西1.0m、南北1.8m、深さ12cmを測る。主軸方向はN-8°-Eである。埋土は黄茶色微砂混粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

#### SK203（第22図）

調査区の南部中央で検出した土坑である。西側が調査区外に延びるが、平面形は橢円形、断面形は浅い皿状を呈すると推定される。規模は東西0.35m以上、南北2.1m、深さ14cmを測る。埋土は茶色粘質土である。出土遺物には土師器がごく少量ある。土坑の時期は出土遺物と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

#### SK204（第22図）

調査区の南部中央で検出した土坑である。平面形はややいびつな方形、断面形は浅い皿状である。規模は東西1.24m、南北0.82m、深さ9cmを測る。主軸方向はN-57°-Eである。埋土は茶色系粘質土である。出土遺物には土師器がごく少量ある。土坑の時期は出土遺物と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

#### SK205（第22図）

調査区の南部中央で検出した土坑である。北西部をSK206に切られるが、平面形はやや不揃いな隅丸方形、断面形は浅い皿状である。規模は東西0.75m以上、南北1.0m、深さ9cmを測る。埋土は暗茶色砂質土である。出土遺物には土師器がごく少量ある。土坑の時期は出土遺物と周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

#### SK206（第22図）

調査区の南部中央で検出した土坑である。SK205を切る。平面形は不整方形、断面形は逆台形である。規模は東西0.28m、南北0.75m、深さ8cmを測る。埋土は暗茶色砂質土である。出土遺物には土師器高杯（28）がある。28は裾部で明瞭に屈曲し、端部へ向かって開く器形をもつ。土坑の時期は出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

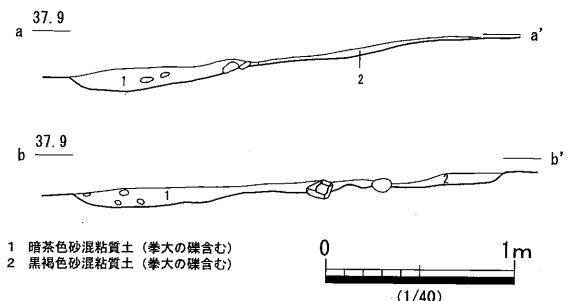
### 性格不明遺構

#### SX302（第23図）

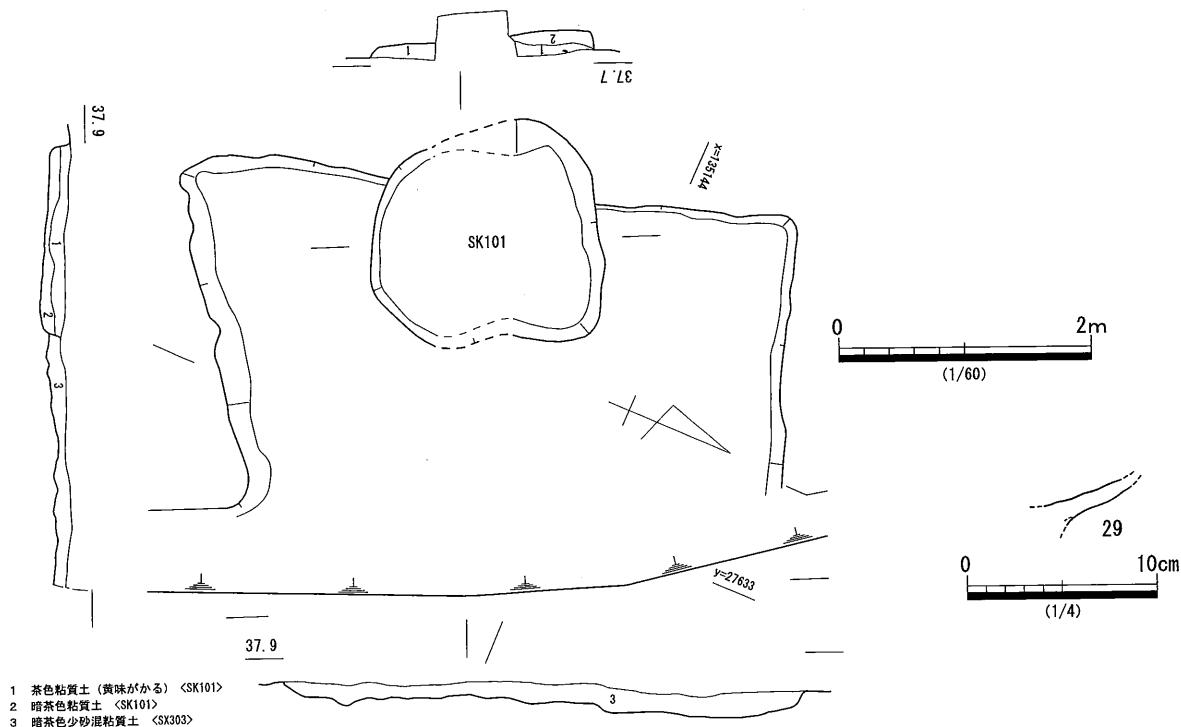
III-1区南東部で検出した遺構である。東側が調査区外に延びるため、平面形は不明であるが溝状を呈すると推定される。断面形は浅い皿状であるが、西側がやや深い。規模は東西2.0m以上、南北7.25m、深さ12cmを測る。主軸方向はN-27°-E、埋土は暗茶色系砂・礫混じり粘質土である。出土遺物はごく少量の弥生土器、土師器？がある。遺構の時期は埋土や周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

#### SX303（第24図）

III-1区北東部で検出した遺構である。SK101に切られる。東側が調査区外に延びるが、平面形はやや不揃いな隅丸方形と推定される。断面形は浅い皿状であるが、床面は南北、東西方向のどちらへも凹凸がある。規模は東西2.58m以上、南北4.74m、深さ19cmを測る。主軸方向はN-19°-W、埋土



第23図 SX302断面図 (1/40)



第24図 SX303・SK101断面図 (1/60)、SX303出土遺物実測図 (1/4)

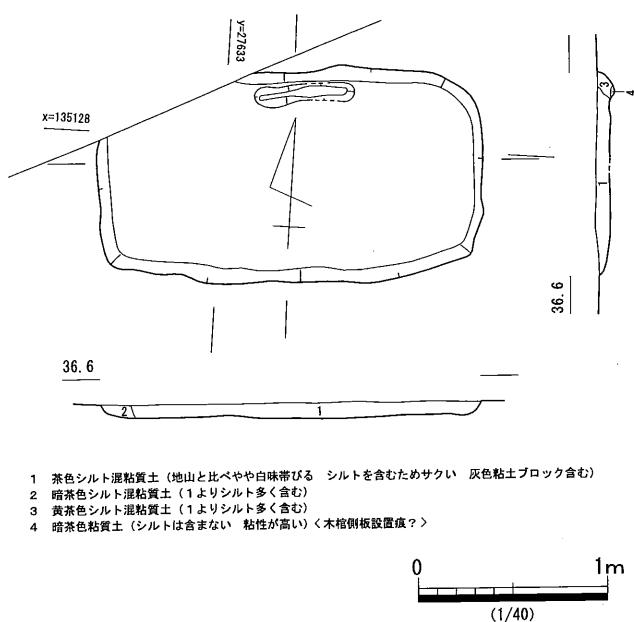
は暗茶色少砂混粘質土の単層である。規模と平面形は近接するSX105に類似するが、断面形の違いや床面上の施設(焼土面やピット)の欠如から異なる性格の遺構と考えられる。出土遺物には土器高杯(29)などがある。29は高杯の杯部である。口縁部にかけて弱く屈曲する。遺構の時期は出土土器や周辺遺構の時期から古墳時代中期と考えられる。

### (3) 古墳時代後期の遺構、遺物

#### 土坑

##### SK301 (第25図)

III-1区の中央部で検出した土坑である。北西隅をトレンチにより破損する。平面形は整った長方形、断面形は床面が平坦で、壁はほぼ直立する。規模は東西2.02m、南北1.10m、深さ8cmを測る。主軸方向はN-86°-Eであり、埋土は茶色系シルト混粘質土である。1層では灰色粘土ブロックを含む。規模、平面形、断面形から見て木棺墓の可能性がある。これが妥当であれば床面の北側で検出した帶状の落ち込みは木棺側板の痕跡であると考えられる。出土遺物はない。土坑の時期は埋土の色調、シルトを多く含む点がI区の茶

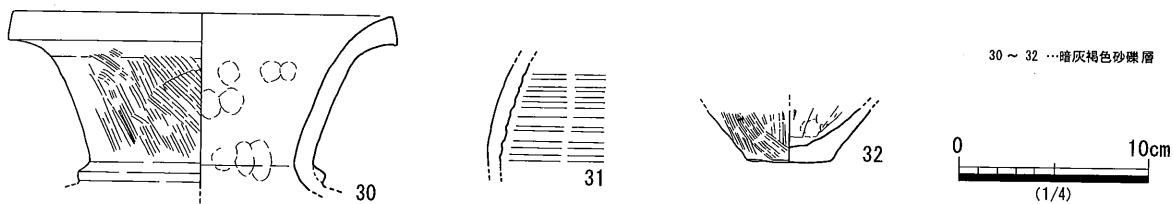


第25図 SK301平・断面図 (1/40)

灰色シルト層（古墳時代後期の須恵器杯身22が出土。）と類似するため古墳時代後期と考える。

(4) 包含層出土遺物（第26図）

30～32はⅢ区の古墳時代中期遺構面ベース土の下位に堆積した暗灰褐色砂礫層から出土した弥生土器である。30・31は壺の口縁部である。30は口縁端部を上下に拡張し、平坦に仕上げる。また体部との境界に断面三角形の突帯を貼り付ける。31は外面に凹線文が7条見られる。32は壺の底部である。これらは弥生後期に位置づけられる。



第26図 Ⅲ区包含層出土遺物実測図 (1/4)

## 第4章 まとめ

### 遺構の変遷

生野原遺跡では弥生時代から中世以降にかけての遺構・遺物を確認した。以下ではこれらの遺構・遺物について時期ごとに説明する。

### 弥生時代

下層確認を実施した結果、弥生時代後期の遺物を包蔵する（暗）灰色砂礫層が調査対象地のほぼ全体に広がることを確認した。よって弥生時代後期に遺跡付近で旧金倉川の大規模な氾濫が生じたことがうかがえる。また、この氾濫により堆積した（暗）灰色砂礫層の上面レベルには凹凸があるが、特にI区では大きな凹部がある。この凹部（谷地形）はその後徐々に埋没していくが、完全に埋没するのは旧耕作土と見られる黄灰色シルトが堆積した後であり、中世以降と考えられる。

### 古墳時代中期

この時期に属する遺構は検出位置から南側の平坦面に掘削されたものと、北側の谷地形内に形成されたものとに区分できる。

南側の平坦地に掘り込まれた遺構には土坑、溝状遺構などがある。これらはII区南部でややまとまる箇所があるものの量的に乏しく、遺物もほとんど出土していない。また遺構面がある程度削平されている箇所はIII-4区付近に限定される。よってこの地点では本来、遺構・遺物が希薄であると考えられる。

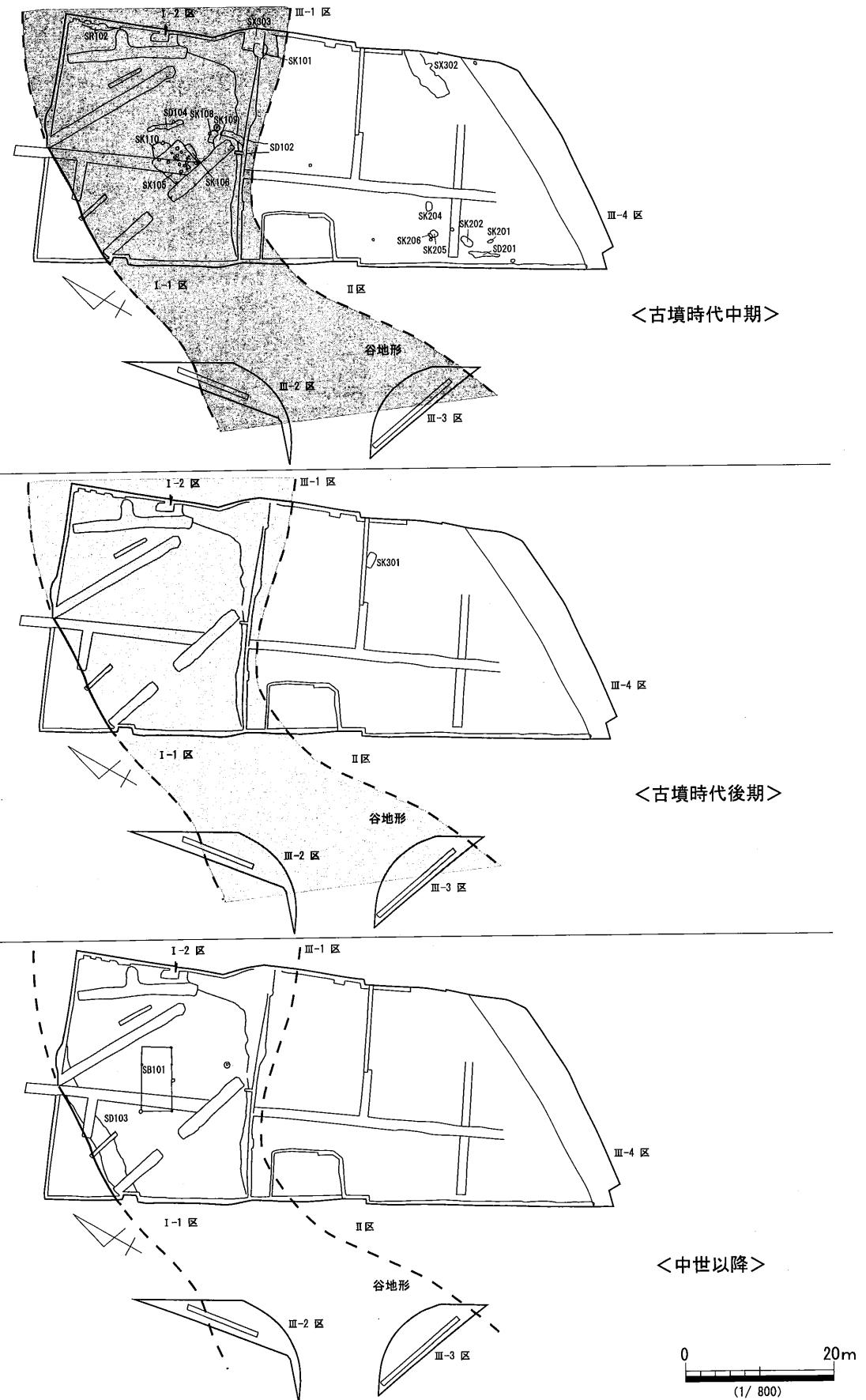
谷地形内の遺構にはI区SD102、SD104、I区SR102、I区SX105などがある。I区SD102、104は報告で述べたとおり本来は同一の遺構である可能性が高い。これが妥当であればこれらの溝状遺構はI区SX105を避けるような配置をとると言え、同時期に併存したと見られる。I区SR102は遺構の西肩付近のみを検出したが、土師器甕が数個体分出土した。I区SX105は規模、形状が竪穴住居跡に類似する遺構である。床面では貼り床層上から掘り込んだ焼土面と多数の浅く小さいピットを検出した。また出土遺物には当該期の土師器の主要器種（壺、甕、高杯）が数個体ずつ含まれ、法量のバリエーションも見られる。だが、主柱穴の復元が困難なこと、居住遺構の形成に向かない谷地形内に位置すること、周辺に居住遺構が見られないことを考えると微高地に位置し、複数棟で集落を形成する一般的な竪穴住居跡とは考えがたい。その性格については明らかでないが、当該期に遺跡付近は比較的安定した環境にあったこと、周辺地域では集落や古墳が形成され、開発が進行している時期であることから遺跡付近の開発を行うために形成された、仮設的な居住遺構と考えておきたい。

### 古墳時代後期

この時期に属する遺構はIII区SK301の1基、遺物はI区の茶灰色シルト層から出土した須恵器杯身1点に留まる（遺構の時期はSK301の埋土がI区の茶灰色シルトと類似することから推定）。SK301は遺構の規模、形状から木棺墓の可能性があり、木棺墓とした場合は、墓域を形成せず、単独で埋葬されたものと考えられる。

## 中世以降

この時期に属する遺構はI区SB101、I区SD103とごく少数の土壙のみであり、当該期の遺物も出土していない（遺構の時期は埋土の色調、土質から推定）。I区SB101は主軸方向が遺跡北部で見られる条里型地割のそれと類似するが、柱穴跡の並びが不揃いで深度も浅い。よって仮設的な建物であると推定される。またI区SD103は流水の痕跡が見られないが、深くしっかりととした作りであり、底場が金倉川のある東側へ下る。このため用水路として利用されたと見られる。このような遺跡周辺の状況や遺構・遺物の内容と希薄さから、この時期に遺跡北部には条里型地割が広がっていたこと、遺跡内は主に耕作地として利用され、I区SB101はこれに伴う農作業小屋などとして使われたことが考えられる。



## 遺物観察表・土器

報文番号	報告構名	種類	器種	色調			胎土			法量			調整			残存率	備考	
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
1	I区SD102	土師器	甕	7.5YR 5/4 にぶい褐	7.5YR 4/4	中・少								(ナメ) ヴ目	横行、指付け	肩部破片		
2	I区SD102	土師器	高杯	10R 4/8 赤	10R 4/6 赤	中・並								マツ	「ラス」	脚部3/8	外面の磨滅が著しい。	
3	I区SR102	土師器	甕	10YR 7/4 にぶい黄澄	10YR 7/4 にぶい黄澄	粗・多	中・多				12.6			マツ(ナメ)	「横行」 指付け	5/8	全体的に磨滅・剥落が著しい。内外に黒斑有り。	
4	I区SR102	土師器	甕	10YR 7/4 にぶい黄澄	10YR 7/4 にぶい黄澄	中・並					11.4			マツ(板ナメ)	マツ	口縁部2/8	全体的に磨滅・剥落が著しい。内外に黒斑有り。	
5	I区SR102	土師器	赤褐	5YR 4/8	5YR 4/8	中・並	細・少				16.0			横ナメ	「V」目後ナメ	口縁部8/8	外面に黒斑あり。	
6	I区SR102	土師器	甕	10YR 5/4 にぶい黄褐	10YR 6/4 にぶい黄褐	中・多	細・並					肺部22.3		「V」目後指付け 後ナメ	板ナメ 「V」目	指付け	底部8/8	外面中位にわざかに炭化物 (焦) が付着。
7	I区SR102	土師器	甕	10YR 7/4 にぶい黄澄	10YR 7/4 にぶい黄澄	細・少	中・少							「V」目	指付け	底部8/8	外面に黒斑あり。	
8	I区SX105	土師器	甕	10YR 8/4 浅黄澄	10YR 8/6 黄澄	中・多	細・並				14.8			ヨコナメ 「V」目	ヨコナメ 「V」目	口縁部8/8	外面に黒斑あり。	
9	I区SX105	土師器	甕	7.5YR 7/6	10YR 7/4 にぶい黄澄	中・多						11.9	19.3	「V」目後指付け 後ナメ	板ナメ 「V」目	口縁部1/8	全体的に摩滅が進む。外面に黒斑有り。	
10	I区SX105	土師器	甕	2.5YR 5/1	10YR 6/3 にぶい黄澄	細・多						12.0	19.7	「V」目後指付け 後ナメ	板ナメ 「V」目	口縁部6/8	全体的に摩滅氣味。外面に黒斑有り。	
11	I区SX105	土師器	壺	7.5YR 6/3 灰黃	10YR 7/3 にぶい褐	中・多	(黒色粒) にぶい黄澄	細・少				15.5	29.2	7.6	「V」目後指付け 後ナメ	板ナメ 「V」目	口縁部8/8	全体的に摩滅氣味。外面に黒斑有り。
12	I区SX105	土師器	小型丸底壺	10YR 7/3 にぶい黄澄	10YR 7/3 にぶい黄澄	細・少						7.0	7.1	エ	ヨコナメ 「V」目	ヨコナメ 「V」目	7/8	外面の磨滅が著しい。外面に黒斑有り。
13	I区SX105	土師器	高杯	7.5YR 7/6	10YR 7/4 にぶい黄澄	中・多						15.5	13.5 (最大)	10.3	「V」目後指付け 後ナメ	板ナメ 「V」目	口縁部8/8	全体的に摩滅が著しい。外面に黒斑有り。
14	I区SX105	土師器	高杯	2.5YR 8/3 淺黃	2.5YR 8/3 浅黄澄	中・並						15.0	10.4	11.2	マツ	マツ	口縁部8/8	全体に摩滅が著しい。
15	I区SX105	土師器	高杯	10YR 8/4 浅黄澄	10YR 8/3 浅黄澄	中・並						15.6		マツ	マツ	口縁部3/8		
16	I区SX105	土師器	高杯	10YR 7/4 にぶい黄澄	10YR 7/4 にぶい黄澄	中・少						19.0		横ナメ	横ナメ	杯部2/8		
17	I区SX105	土師器	小型丸底壺	5YR 6/8	7.5YR 8/6	中・少						9.8		マツ	マツ	口縁部2/8	全体的に磨滅が著しい。	
18	I区SX105	土師器	小型丸底壺	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙	細・少						頸径5.4		マツ	「V」目後指付け 後ナメ	頸部1/8	外面の剥落が著しい。外面に黒斑有り。	
19	I区SX105	土師器	高杯	5YR 6/6	7.5YR 5/4 にぶい褐	中・多						14.4		ヨコナメ 「V」目	ヨコナメ 「V」目	口縁部4/8	外面の剥落が著しい。外面に黒斑有り。	
22	I区包 含層	須恵器	杯身	N6 灰	N6 灰							中・多	12.4	マツ(横ナメ) ナメ	回転ナメ 仕上げナメ	口縁部2/8		
23	I区包 含層	土師器	小型丸底壺	7.5YR 5/4 にぶい褐	7.5YR 5/4 にぶい褐	中・多						中・少	10.0	マツ(横ナメ) ナメ	「横ナメ」 指付け	口縁部1/8		

報文番号	報告者名	種類	器種	色調			胎土			法量			調整		残存率	備考	
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部	
24	I区包 含層	弥生土器	甕	5YR 6/8 橙	5YR 6/8 橙	7.5YR 8/6 浅黃橙 10TR 8/2 灰白	中・並							マツメ	マツメ	口縁部 1/8	全体的に磨滅・剥落が 激しい。
25	I区包 含層	弥生土器	甕	7.5YR 8/6 浅黃橙	10TR 8/2 灰白			細・少		16.6				マツメ	マツメ	口縁部 4/8	全体的に磨滅・剥落が著 しい。
26	I区包 含層	弥生土器	甕	10TR 8/4 浅黃橙	10TR 8/2 灰白		中・並	細・少					4.5	マツメ(ハケ目) ナガ	マツメ(ハケ目) ナガ	底部8/8	外面に黒斑有り。全体に摩 滅が進む。
27	II区SD201	土師器	甕	5YR 5/6 明赤褐	5YR 5/8 明赤褐		中・少							横ナゲ	ハケ目 マツメ	口縁部 1/8	全体的に磨滅・剥落が著 しい。
28	II区SK206	土師器	高杯	5YR 6/8 橙	5YR 6/8 橙		中・多							ナゲ	マツメ(ハケ目) ナガ	接合部 8/8	全体的に磨滅・剥落が著 しい。
29	III区SX303	土師器	高杯	2.5YR 4/5 赤褐 にぶい	7.5YR 5/6 明赤褐		中・並							ナゲ	横ナゲ	マツメ	全体的に磨滅氣味。
30	III区包 含層	弥生土器	壺	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙		中・並	細・多			20.0			ナゲ	横ナゲ	マツメ	杯部破片
31	III区包 含層	弥生土器	壺	2.5YR 5/6 明赤褐	5YR 4/8 赤褐		中・少							横ナゲ	マツメ	口縁部 2/8	全体的に磨滅。
32	III区包 含層	弥生土器	甕	10TR 6/4 に ぶい	10TR 6/4 に ぶい 黄褐 2.5YR 6/8 橙	N3/ 暗灰	粗・並		細・少				4.2	ナガ目後ナガ ナガ	ナガ目後ナガ ナガ	底部7/8	凹線7条現存。外表面の磨 滅が進む。

遺物観察表・石器

報文番号	報告遺構名	器種	法量			材質	備考
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)		
20	SX105	砥石	230	126	59	2289	砂岩 一面を底面に使用。同面上に線条痕あり。
21	SX105	砥石	229	128	86	3960	砂岩 一面に線条痕が残る。

# 写真図版

室塚遺跡

生野原遺跡

図版 1 室塚遺跡



(1) 調査前の風景（東より）



(2) A地区全景（北より）

図版2 室塚遺跡



(3) A地区全景（北から）



(4) A地区全景（東から）

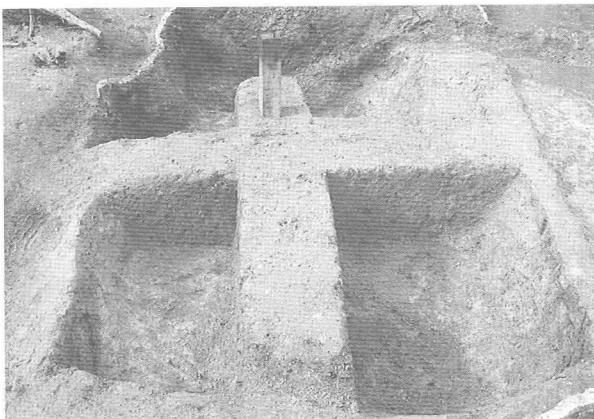
図版3 室塚遺跡



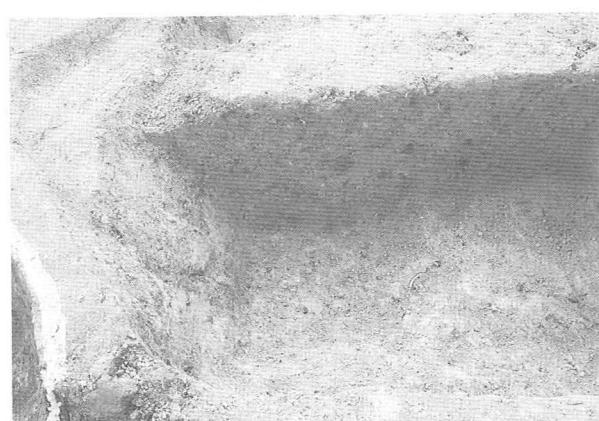
(5) ST01完掘状況（東から）



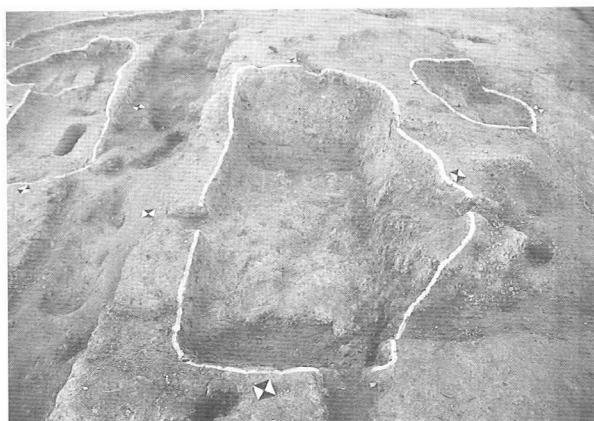
(6) ST01完掘状況（北から）



(7) ST01断面（東から）

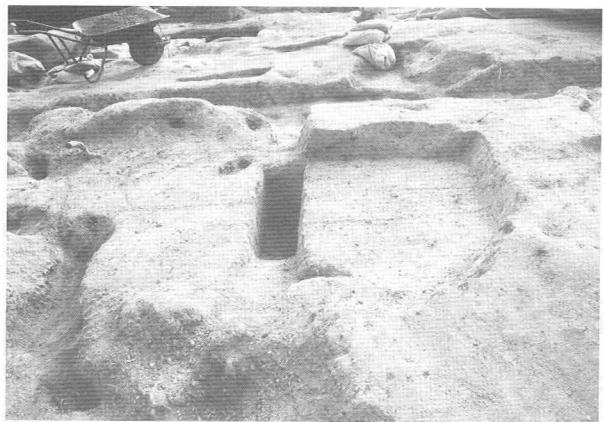


(8) ST01小口板痕跡（北から）



(9) ST02完掘状況（東から）

図版4 室塚遺跡



(10) ST02検出状況（北から）



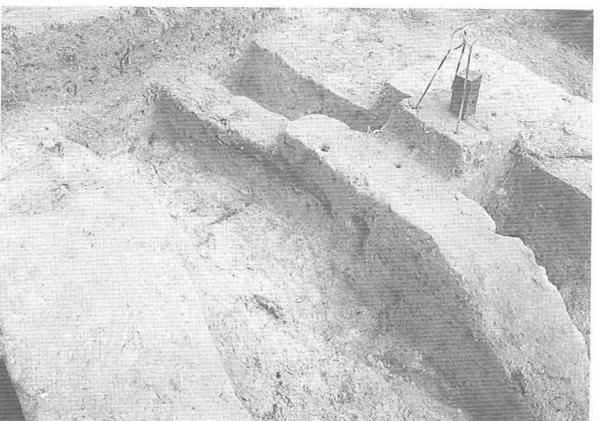
(11) ST02断面（北から）



(12) ST02断面（東から）



(13) ST03完掘状況（西から）



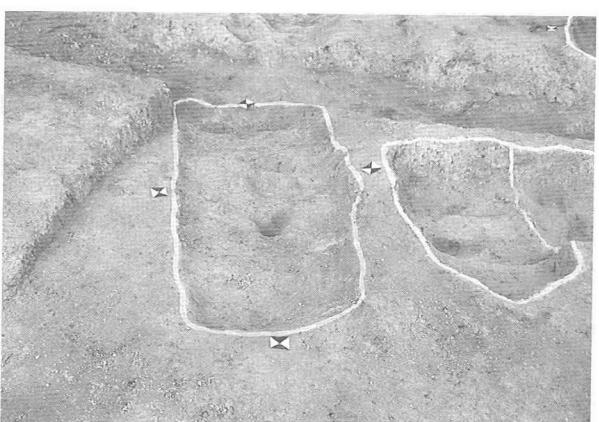
(14) ST03断面（西から）



(15) ST04断面（南から）



(16) ST04断面（南から）

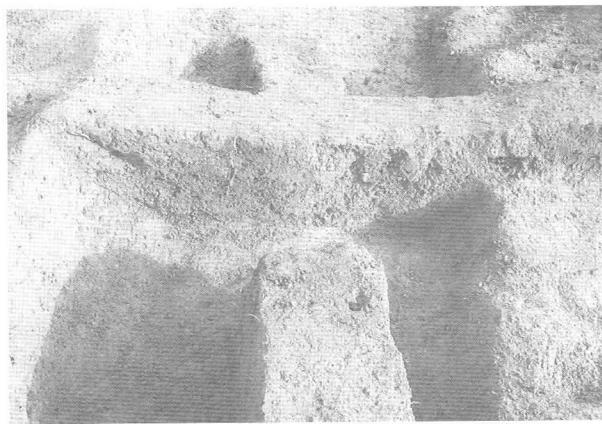


(17) ST05完掘状況（南から）

図版5 室塚遺跡



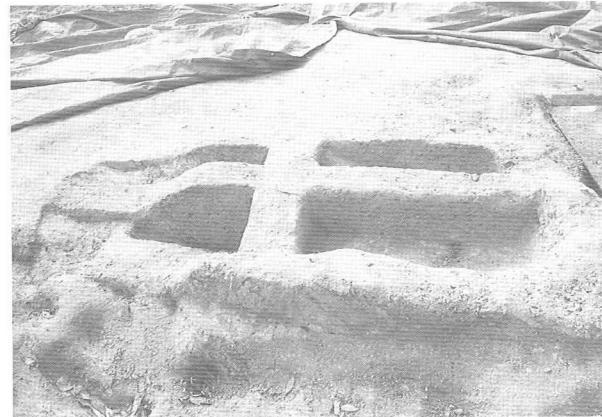
(18) ST06完掘状況（東から）



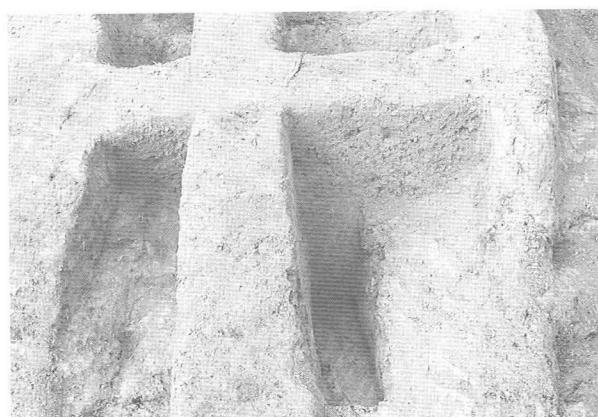
(19) ST06断面（西から）



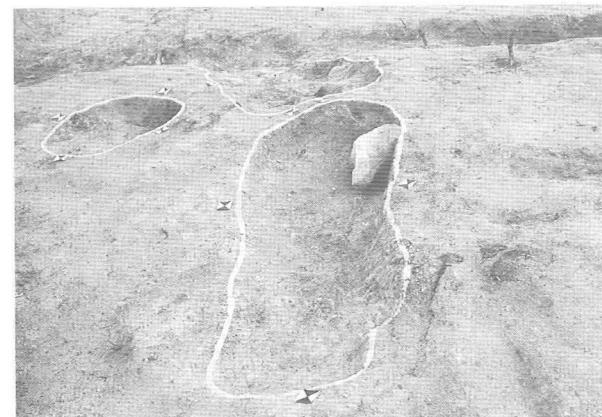
(20) ST07完掘状況（東から）



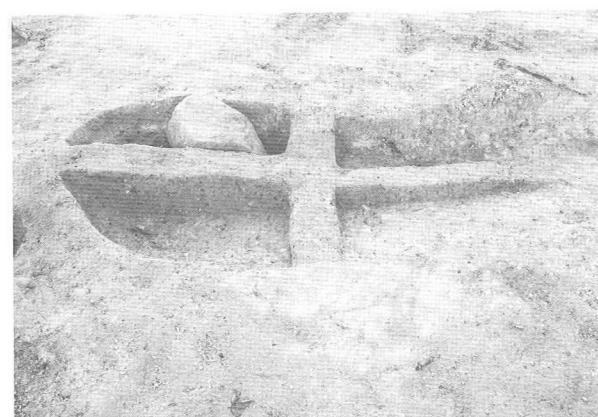
(21) ST07断面（北から）



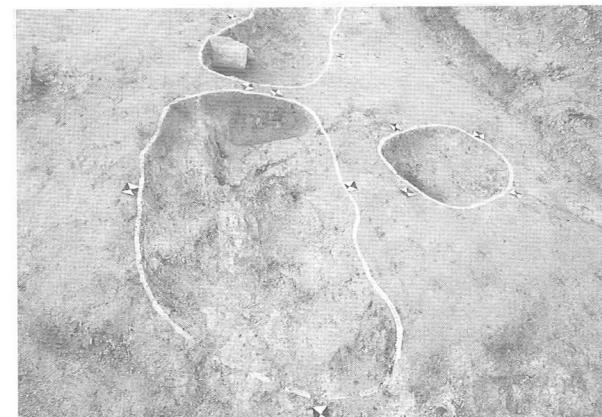
(22) ST07断面（東から）



(23) ST08完掘状況（北から）



(24) ST08断面（東から）



(25) ST09完掘状況（東から）

図版6 室塚遺跡



(26) ST09断面（北から）



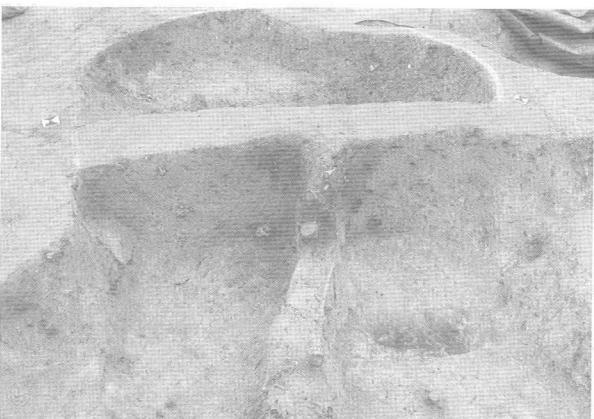
(27) ST10断面（南から）



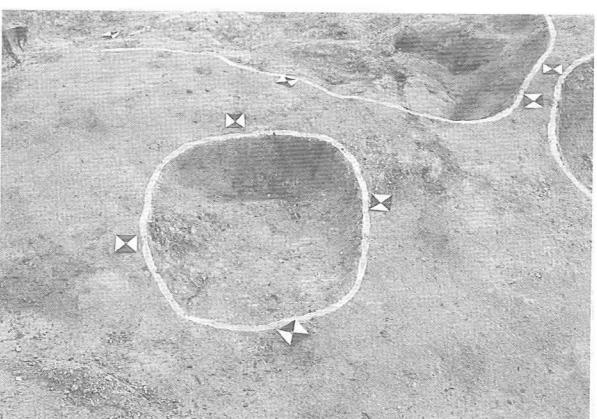
(28) ST10断面（北から）



(29) ST11完掘（東から）



(30) ST11断面（東から）



(31) ST12完掘状況（北から）



(32) ST12断面（北から）



(33) SD03断面（北から）

図版7 室塚遺跡



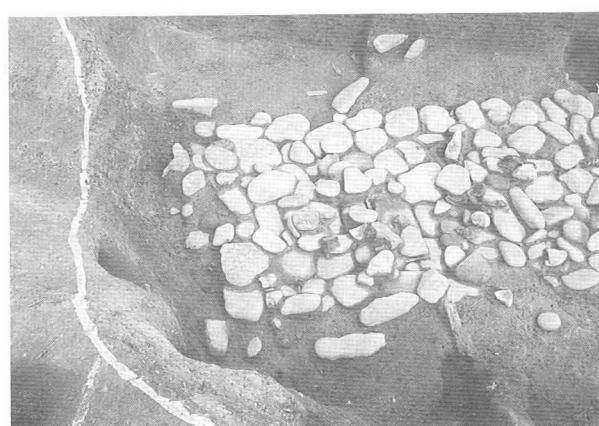
(34) A調査全景（南から）



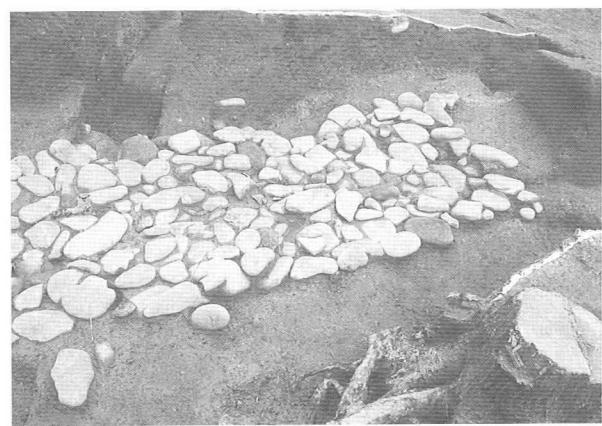
(35) 1号墳上面敷石検出状況（南から）



(36) 1号墳上面敷石検出状況（北から）



(37) 1号墳上面敷石検出状況（奥壁側）（西から） (38) 1号墳上面敷石検出状況（玄門側）（西から）



(38) 1号墳上面敷石検出状況（玄門側）（西から）

図版8 室塚遺跡



(39) 1号墳下面敷石検出状況（北西から）



(40) 1号墳下面敷石検出状況（北西から）

図版9 室塚遺跡



(41) 1号墳下面敷石検出状況（奥壁側）（北西から）



(42) 1号墳下面敷石検出状況（玄門側）（北西から）



(43) 1号墳石室埋土断面（西から）



(44) 1号墳石室埋土断面（西から）



(45) 1号墳墳丘断面（南から）



(46) 1号墳墳丘断面（北から）



(47) 1号墳石室埋土断面（東から）



(48) 1号墳石室埋土断面（東から）

図版10 室塚遺跡



(49) A区1号墳玄門付近断面（北から）



(50) A区1号墳玄門付近断面（南から）



(51) A区1号墳玄門付近断面（南東から）



(52) B地区Ⅲ区北壁断面（東から）



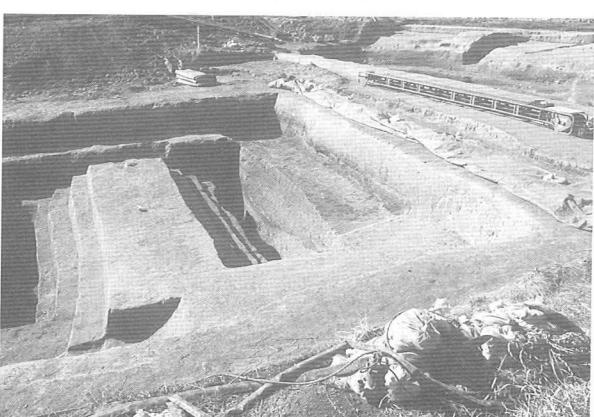
(53) B地区Ⅱ③区北西壁断面（東から）



(54) SR01全景（北から）



(55) SR01全景（西から）



(56) B地区Ⅱ①区北壁断面（東から）

図版11 室塚遺跡



(57) B地区遠景

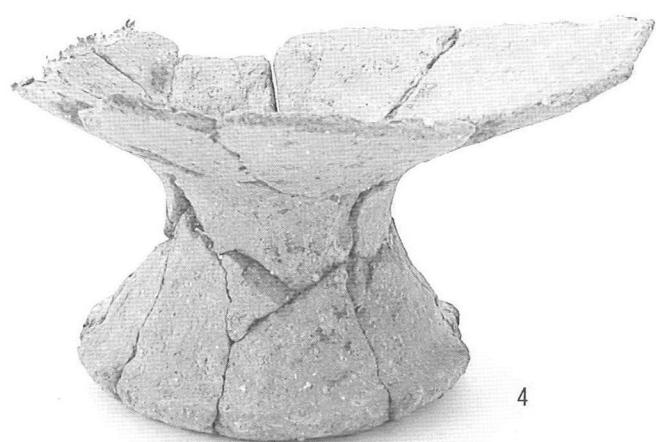


(58) 室塚遺跡現況

図版12 室塚遺跡



1



4

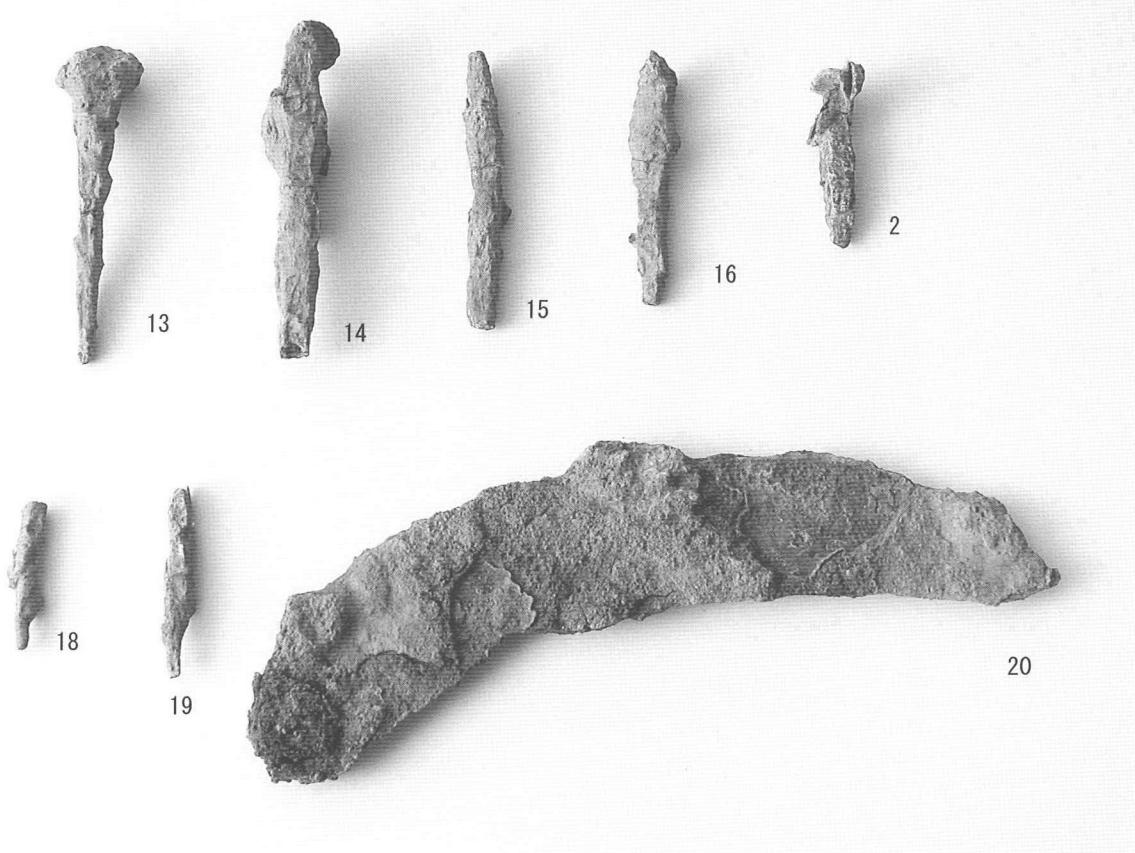
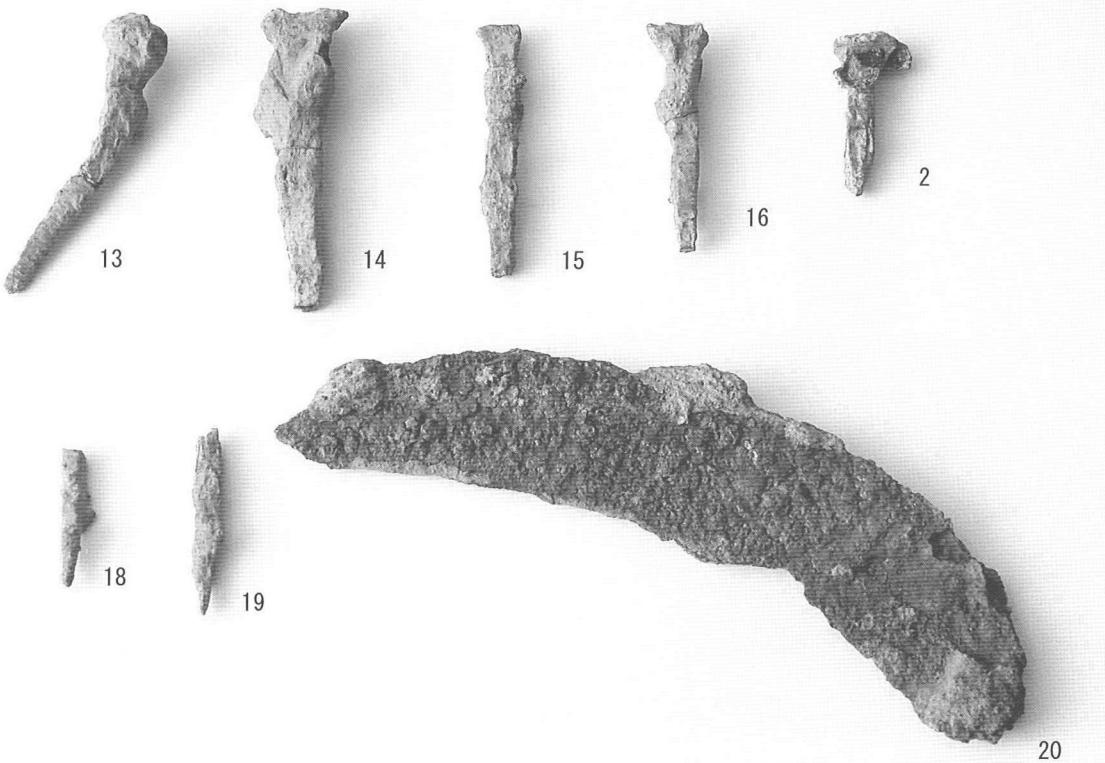
出土遺物(1)

図版13 室塚遺跡



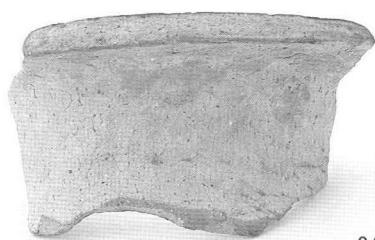
出土遺物(2)

図版14 室塚遺跡



出土遺物(3)

図版15 室塚遺跡



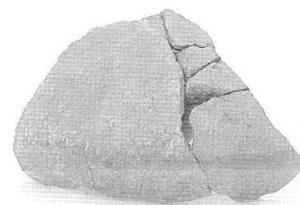
24



25



27



48



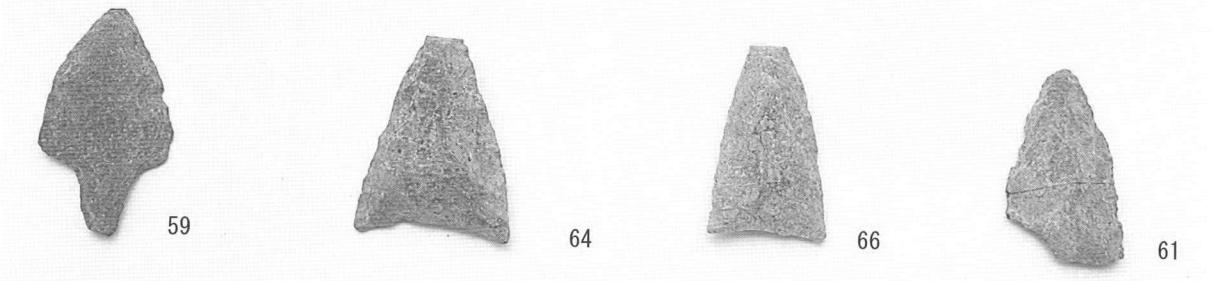
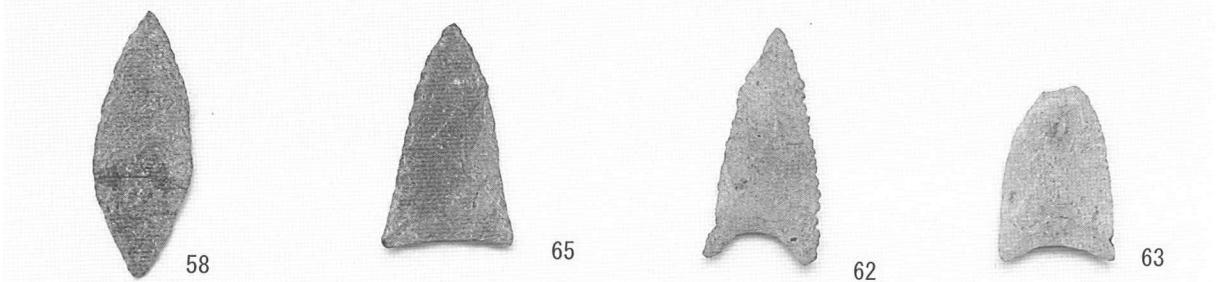
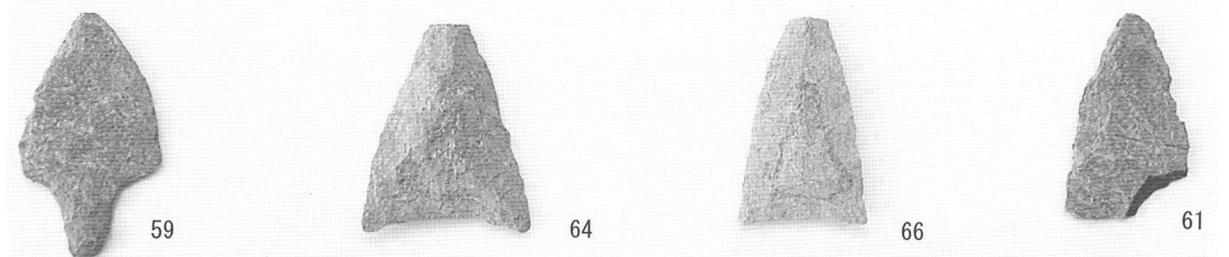
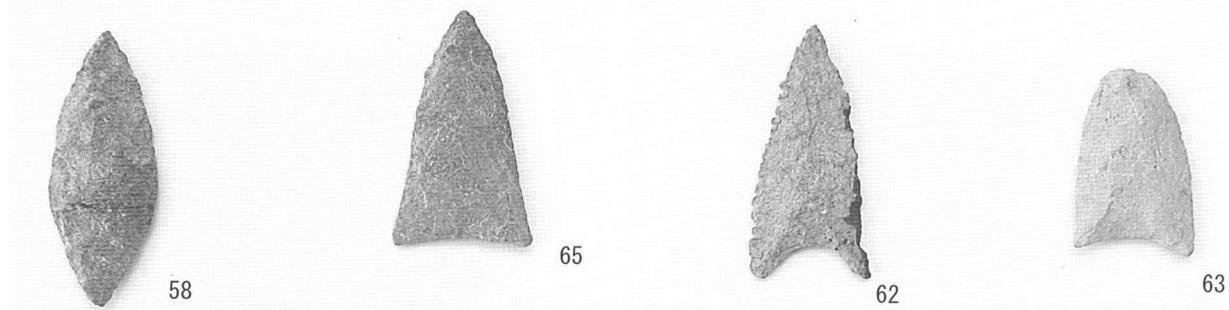
53



54

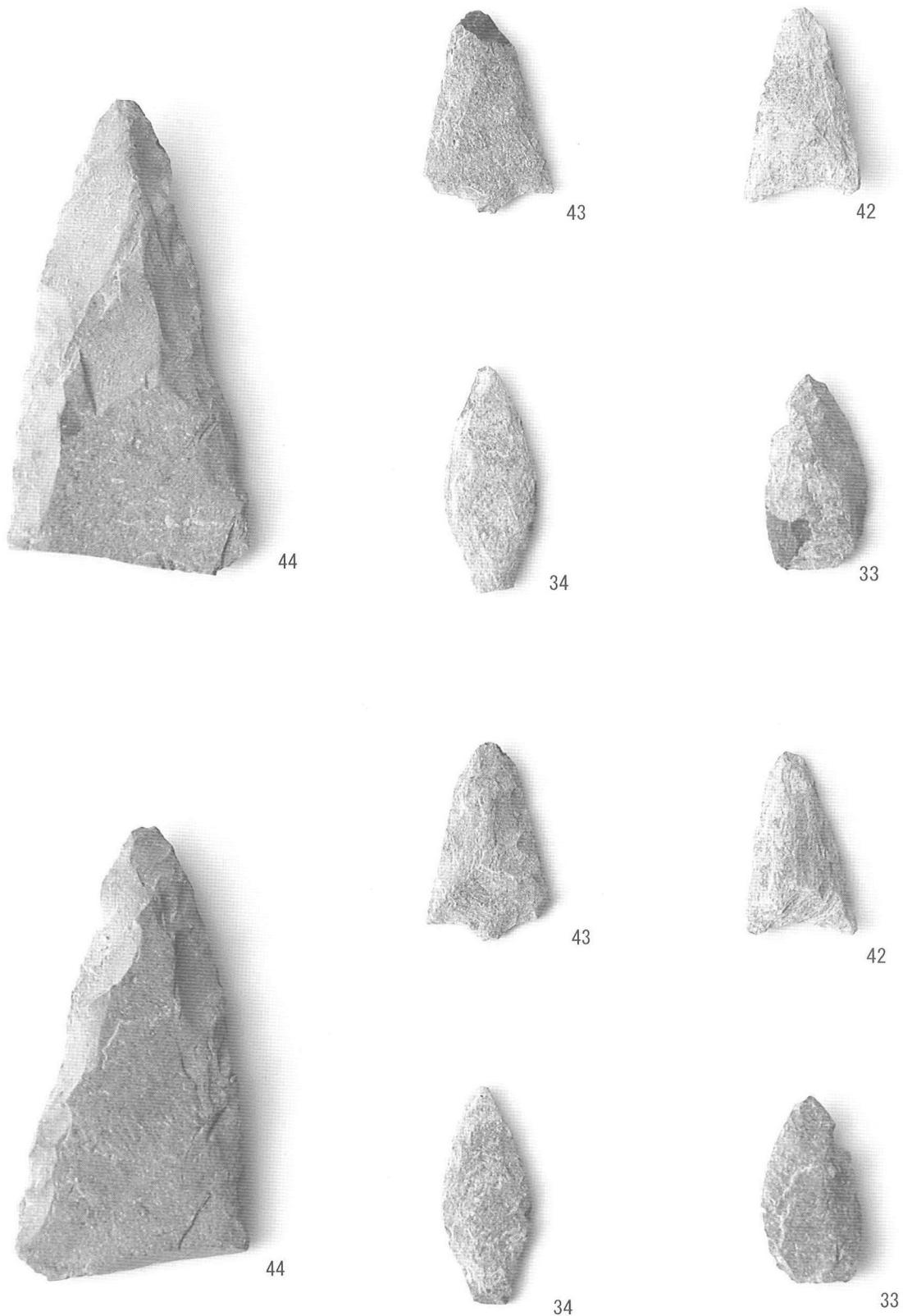
出土遺物(4)

図版16 室塚遺跡



出土遺物(5)

図版17 室塚遺跡

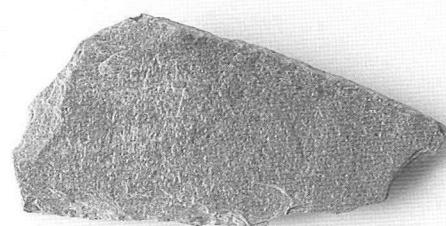


出土遺物(6)

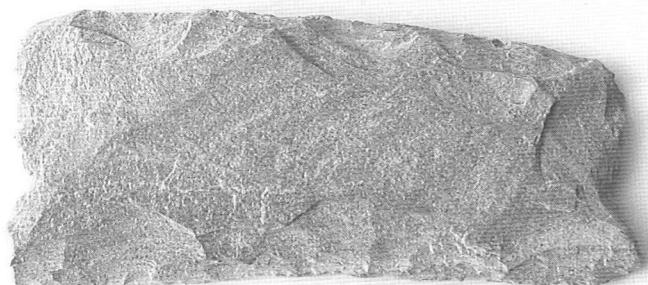
図版18 室塚遺跡



46



45



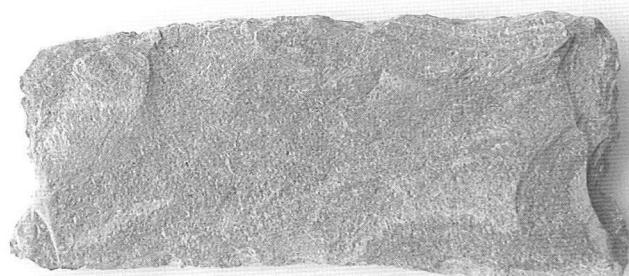
32



46



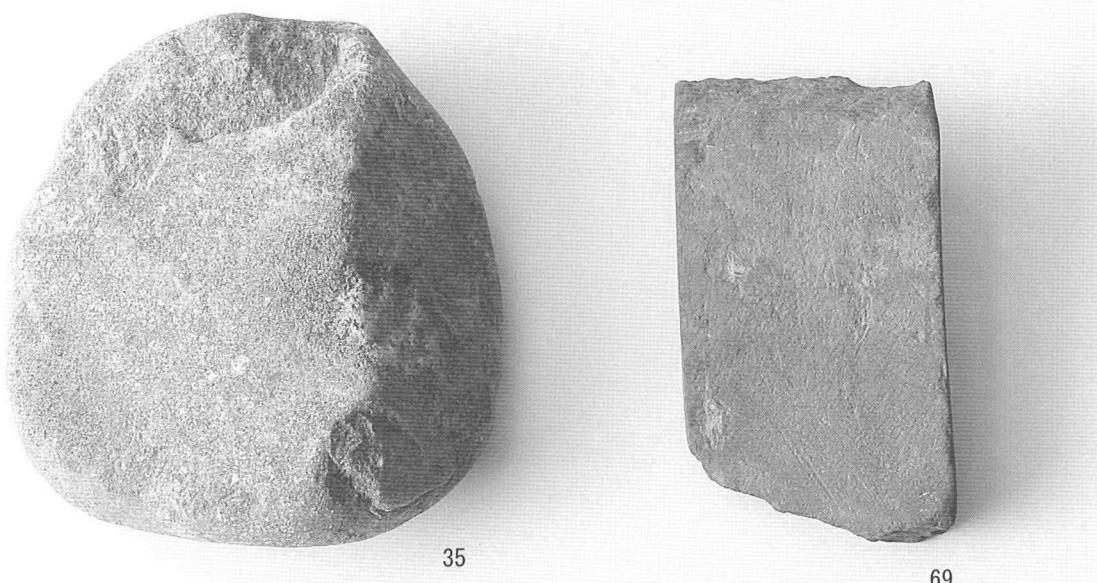
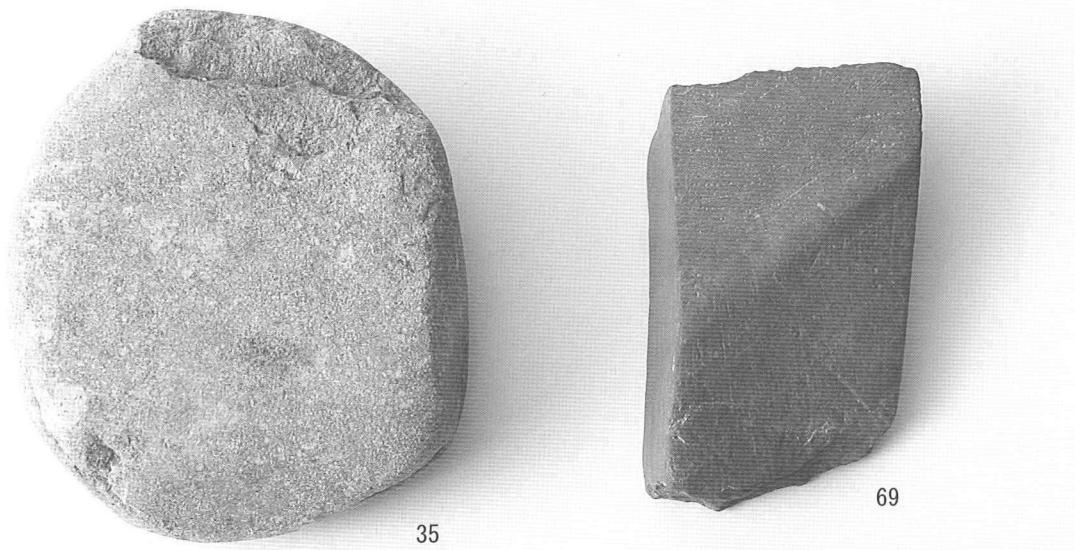
45



32

出土遺物(7)

図版19 室塚遺跡



出土遺物(8)

図版1 生野原遺跡



(1) I区 全景(北から)



(2) I区付近 遠景(北から)

図版2 生野原遺跡



(3) I-1区 調査区西壁断面(東から)

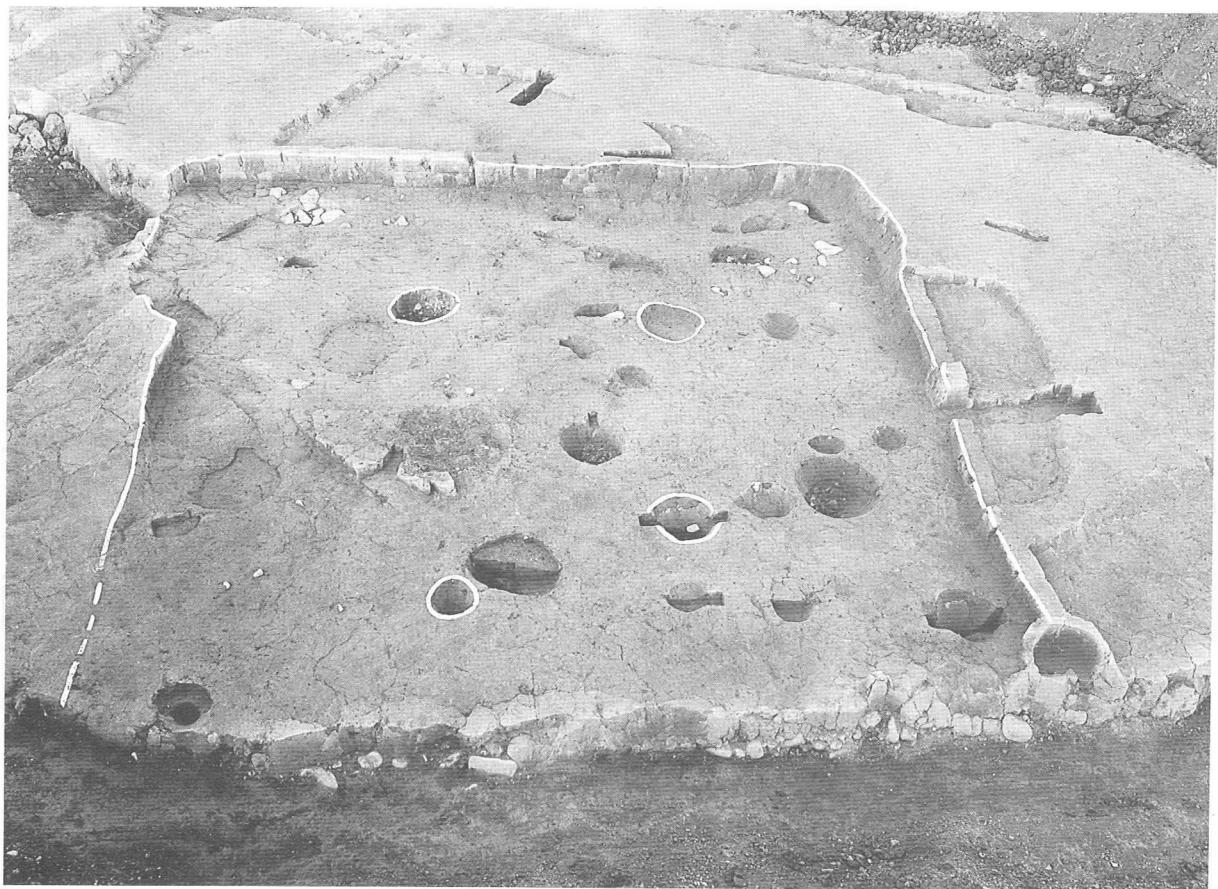


(4) I-2区 茶褐色シルト混粘質土層内 須恵器出土状況(西から)

図版3 生野原遺跡



(5) I-2区 調査区南壁断面(SD102付近)(北から)



(6) I-2区 SX105 完掘状況(南西から)

図版4 生野原遺跡



(7) I-2区 SX105 燃土面検出状況(南西から)



(8) I-2区 SX105 遺物出土状況(南西から)